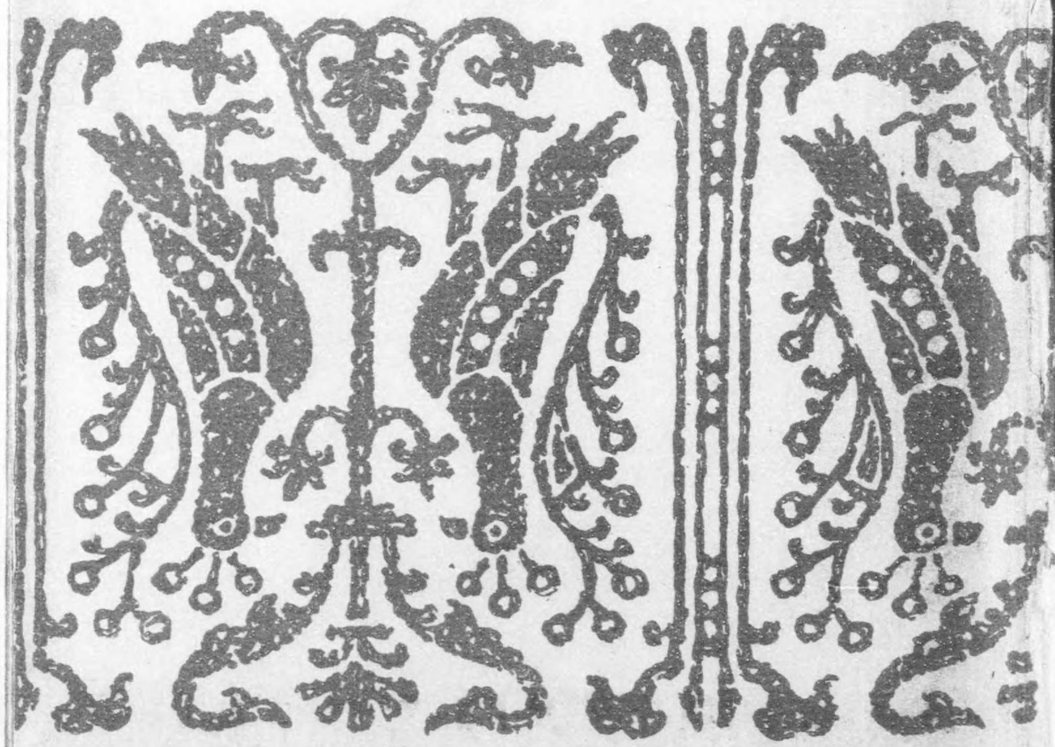
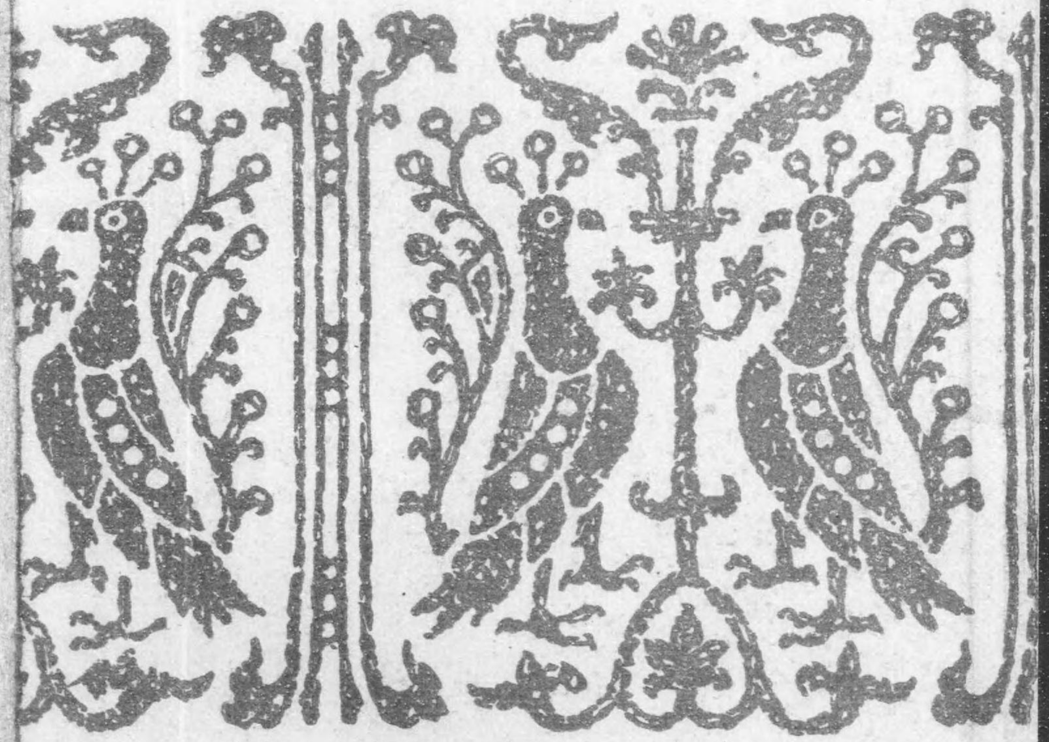
534
55

始

+2δR-26





128R-26

文學博士 和田萬吉譯

モンタヌス日本誌

東京小石川 丙午出版社發行

大正
14. 4. 8
閲了

534-55

序

本書は蘭人アルヌルヴス・モンタヌスの所編アトラス・ヤパヂンジス（Atlas Japannensis）を譯述せるものにして、内容は第十七世紀の初葉より凡そ五十年間、數回に渉りて東印度會社より日本帝國に差遣せる蘭國使節數名の見聞實記を經とし、第十六世紀の末期以來我國に於て基督教の傳播に從事せる葡、西兩國の牧師等の報文書翰類を緯として、織豐時代より德川時代の初期寛文年中に至る約一百年間の我國の史實を泰西人の眼に映じたる儘に極めて率直に記述せるものなり。隨ひて間〻聽僻め視誤れる事實無きに非ずと雖も、日本語譯解の不便なりし當時に在りて想像力に富める西人が道聽途說の領會動もすれば誇大に失するの弊あるは、已むを得ざることとして寛假すべし。此比較的小き闕點を餘處にせば、羅馬教の宣布に關する西僧等の報告を引用して日本信徒の處刑等を敍すること頗る詳悉に、又信長、秀吉、家康等の間に覇權の移動せし狀、秀吉、秀次の確執の樣等を說きて我國に普行せる史籍以上に明快なる判斷を下せるなど、最も本書をして興味あらしむる所以にして、又

今より三百年以前に於ける我が對外觀の大要を徵するに足るもの、本書を措きて他に多く求むべからずと謂はまし。蓋し早き時代に於て一部の成書として我國を泰西世界に紹介したるもの、本書以外に絶無なりとは謂ひ難けれど、國史上甚だ多事にして政權の推移掌を覆すが如き時世より國内統一の機運に移れる時期に於て、戰勝者が旭日堂々の勢力に任せて豪奢榮華に誇れる樣を直寫し、以て日本の富强不可思議にして驚嘆に餘りある邦國なることを披露し、よりて一時歐洲全土を振撼せしめしものは、恐らくは此書を最初とせん。其は蘭文原書の西紀一六六九年（我が寛文九年）に公刊せらるるや、翌年以後英、獨、佛の譯本殆ど一齊に世に出でたるを見れば、如何に本書が外國の讀書界に歡迎せられしかを想ふべし。

但本書の編者に一種の奇癖ありて、蘭使の日本にて遭遇せし天變地異より禽獸草木の一奇あるもの、其他習慣、崇拜物等何事に拘らず特筆すべきものある毎に、其原由、沿革、又は國土上の異同比較等に力を注ぎて博搜旁引を極め、爲に一時當面の筆路を止めて太く他方に脫線するを常とす。案ずるに此は編

者が專門の史家に非ずして教育家の立場に在りし關係より、當時猶幼境に在りし理科學に關する知識方面の啓導を試みんとせし熱誠の致す所にして、決して衒學の意に出でしことには非ずと思はる。然れども餘談插話の多きに過ぐるは慥に本書の缺點なりと信じ、殊に自然科學に係る說明の如きは、今日に在りては多少時世後れの感あるを以て、此譯本に於ては概ね之を省略し、主として我國の紀事に屬するもののみを採り、本書の要領の鮮明ならんことを期せり。乃ち量に於ては抄譯に似たれども、質に於ては全譯に外ならざるなり。

原書は前後二篇に大別せる外には、各篇中に絶えて章節を設けず、漫々書流しの形式を執れど、譯本に於ては流讀の便を圖りて、假に章題を置きて數百章に分ちたり。但此等の章題も成るべく原書本文の紙端標注（マージナル ノート）の語句を採用して、妄に私見を加へざることせり。

書中の插圖は、譯述に際して不切要と認めたる數者を除きて、他は悉く原形を存し、單だ其大さを縮約せるのみ。圖中人物等の畸異なるは、見聞者の

見取圖に基きて本國なる畫家の想像を加へたるに由れるならん。讀者此等の圖畫の寫實的ならざるより推して本文記事の精確如何を疑ふこと莫かれ。

此譯本の原書は、一六七〇年ヂョン・オギルビー翻譯龍動出版の英譯本にして、竪一尺一寸横七寸五分の大册、總頁數四八八、毎頁五〇行を收め、蘭文原本に次ぎて最も早く世に出でたるものなり。插圖は凡て蘭文原本と毫釐を差せず、唯題詞に英文を對照せるを異とするのみ。蘭文本、英譯本ともに夙に我國に舶載せられて好書家の珍襲たりしが、昨秋の大災によりて烏有に歸せしもの二三部に上りぬと聞けば、今や稍く稀覯に屬せんとするなるべし。

書中、蘭人の語に德川將軍を指してエムペロル又はエムペロル公方と稱して名義を誤れるは、我等國民の太だ不快とする所なれど、外人は江戸時代を通じて一般に此錯誤を襲蹈し、大政復古に至りて始めて天皇が眞のエムペロルたるを覺りしは、何人も知れる所なれば、此譯本に於てはエムペロルの語を和譯せず、原の如く該語を用ひて以て將軍を指すこととせり。蓋し政權を掌握せし武家の首領を目して日本國君なりと思惟せしは、我國體を熟知せざる當時

の外人に於ては然もあるべきことにて、將軍の下なる諸侯を王と呼びしも同じ筋の誤解に基けりと謂ふべし。此等を初として名義上の錯亂を以て論ずべき語句尚一二あるべしと思はるれど、强て其等を釐正するときは、却て外人所觀の眞相を傳へず、所謂角を矯めんとして牛を殺すの虞あるを以て、今は凡て原文に循ひて用語上の斟酌を施さざることとせり。讀者請ふ此を以て譯者を罪せざらんことを。

尚蘭人等の提供せる原書の資料中に、日本の人名、地名類を訛聞の儘に記錄したるがありと思しく、隨ひて原書中にあらはるる該名稱にして羅馬字に轉記の方を誤れるもの少しとせず。其甚しきに至りては今之を邦譯するに方りて全然反本の途を絶てるもあり。此等は止むを得ず殆ど不可解なる和字釋の下に原文所出の羅馬字綴を註し置けり。又思ふに原書は約三百年前製書の業未だ甚だ整はざりし時代の著作とて、印刷上粗笨不注意の痕頗る多く、殊に誤植脱字の如きは頻々として紙上にあらはれ居りて、例へば泰西人等の名稱に就きてすらも同一人を指すに前後異なる綴字を以てせる程なれば、東洋

英語版原本表題紙

ATLAS JAPANNENSIS:
BEING
Remarkable Addreſſes
BY WAY OF
EMBASSY
FROM THE
Eaſt-India Company
OF THE
UNITED PROVINCES,
TO THE
EMPEROR of JAPAN.
CONTAINING
A DESCRIPTION
OF THEIR SEVERAL
Territories, Cities, Temples, and Fortreſſes;
THEIR
Religions, Laws, and Cuſtoms;
THEIR
Prodigious Wealth, and Gorgeous Habits;
THE
Nature of their Soil, Plants, Beaſts, Hills, Rivers, and Fountains.
WITH
The Character of the Ancient and Modern
JAPANNERS.

Collected out of their ſeveral Writings and Journals
BY
ARNOLDUS MONTANUS.

Engliſh'd, and Adorn'd with above a hundred ſeveral Sculptures,
By JOHN OGILBY Eſq;
Maſter of His MAJESTIES REVELS in the Kingdom of IRELAND.

LONDON,
Printed by Tho. Johnſon for the Author, and are to be had at his
Houſe in White Fryers. M.DC.LXX.

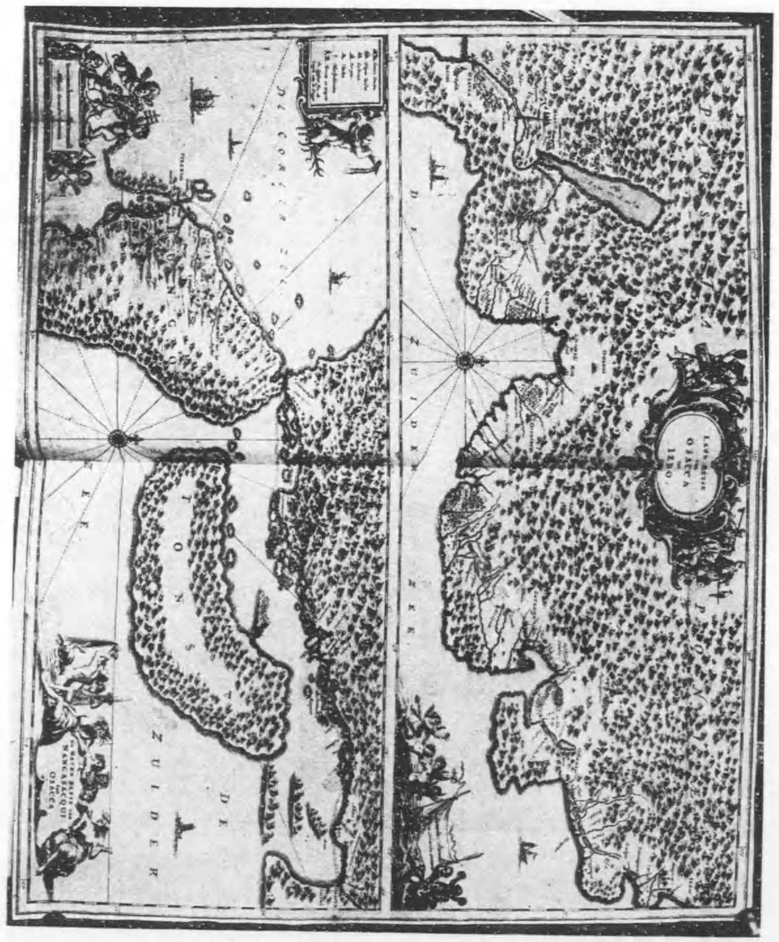
の人名及物名等に如上の掛漏を生ぜるも、深く怪しむに足らざるべし。又譯者に於て、泰西品物の名稱中、適當の譯語を考へ得ざるもの若干あり。此も亦已むを得ず原稱を其儘に擧げて一々其羅馬字綴を註し置き、徐に他日の攷定を待つことゝせり。讀者之を諒せられよ。

大正十四年紀元節日

東京に於て　譯　者　識　す

神惠によりて大不列顛、佛蘭西及愛爾蘭の王
眞教の防護者等なる
至上、至高、至大の君主
チャールス第二世に對し奉り
人口稠密、財力富贍なる
日本帝國の舊態近狀に關する
此等の奇異斬新なる紀事を
驚歎の一書として
陛下の最卑賤の僕隷にして最忠順の臣民たる
ヂョン・オギルビー
恐惶頓首して
最も神聖なる
陛下の
足下に獻じ奉る

（英譯本の獻本辭）



大阪江戸間陸路

長崎大阪間海路

内容目次

第一編　遣日蘭使紀行

海陸圓球を成す—天と地……一
地球上人民の分布……二
舊地に殘留せる一集團—動亂時代……三
ノアの長子ヤフェットの裔……四
セムの子孫……五
羅針盤の發明……七
コロムブスが新世界の知識を得し所以……九
コロムブス葡王及英王に請願す……一〇
一四九二年コロムブスの發航……一一
フロリダの發見及コロムブスの歸國—ヒスパニオラ及キュバの發見—アメリクス・ヴェスプチウス葡王の命にて西印度の再探檢—葡王ヘンリ四世の新國土發見……一二
王子の初航海　アトラス山を超ゆ……一三
葡王アルフォンソ五世亞非利加海岸を發見す—コンゴの發見—ヂアヂオの航海　喜望峯の名の所由……一四
フランシス派の僧の航海……一五
エチオピアの情況—葡王エマヌエル亞非利加及印度の再探檢に勇む……一六
ヴァスコ・ダ・ガマの遠征……一七
ガマの遭厄　船員歸國を望む　ガマの死を謀る新國土の發見……一八
ソファラに來る—モサムビクに來る　都市を砲擊す……一九
ガマに對する隱謀露顯　其經路　ガマ敵船二隻を捕獲す……二一
カリカット市の記載—ガマ饗應を受く　ガマ警戒してザマリンの許に至る……二二
ザマリン宮殿の記載……二三
ガマ、ザマリンと語る—ザマリン友情をガマに示す……二四
サラセン商人ガマをザマリンに讒す……二五
マラバル人葡人を除かんと圖る　隱謀成らずし

てガマ、マラバル人を難詰す……二六
ガマ葡國に歸る……二七
カブラレスの遠征……二八
ノヴィウスの遠征　其後の葡王の企畫　葡王の奇計……二九
世人術中に落つ……三一
西方の冒險—ヘルナンド・コルチス墨西哥を略す……三二
フランシスコ・ピサロ祕露を略す—ピサロの暴
富—西班牙人相殺す……三三
西葡兩國の利權爭ひ……三四
フェルヂナンド・マゼラヌス　世界を周航す—マ
ゼラヌスの遭害　死を脫せる部下の消息……三五
日本最初の住民……三六
日本人の風習　他國人との相違の著き點……三八
茶に對する嗜好—日本の所在及四圍……三九
蝦夷人其住地の廣狹を知らず……四〇
初めて日本に航行せし人は誰なるか—一五四二
年の事とする者多し—葡人は如何して日本に
入込みしか……四一
サヴェリウスの日本に渡航の書翰……四二
サヴェリウスの日本渡航　支那船主の船神像
サヴェリウスの日本上陸……四三
羅馬カトリック宗に改宗せる一日本人の印度所
見談……四四
フランシス・ベイスの長崎渡航……四五
リンスコットの日本渡航……四七
蘭人の航海通商熱—西蘭兩國の爭ひ……四八
蘭人の北方航海……四九
航路の變更—東印度會社の創立—東印度會社の
膨脹……五〇
ジャヴァの一市場—バタヴィアより日本への遣
使—エスイト僧の日本人改宗に關する努力
日本より西班牙及羅馬への遣使……五一
セントヘレナ島の記載……五二
日本の使節リスボン、マドリッドを經て羅馬に向ふ……五三
羅馬入りの盛儀—慇懃なる日本諸侯の書翰の冒頭……五四
神父ゴンサルヴスの紹介—ブラバヅリウスの法
王答辭代演……五五
日本人羅馬にて歡迎せらる—法王グレゴリ第十
三世の墓碑銘—法王セクスツス第五世の贈遺……五六
日本使節の歸朝—エスイト派の密謀露れて葡人
日本を逐はる　通商事業蘭人の獨占に歸す—
蘭人の平戸市場……五七
平戸の記載—同地の東印度會社倉庫　蘭人平戸
より長崎に移る—平戸の奇なる偶像……五八
蘭使長崎より江戸に差遣せらる……五九
臺灣の記載—臺灣に於ける蘭人の貿易　臺灣の
大切なる所以　西班牙人臺灣に於ける蘭人を
逐はんとす　日本人蘭人を憂ふ……六一
蘭國艦隊日本に進航す……六二
蘭船長崎に入る　大使フリシウス—スネック、
バタヴィアに航す……六三
平戸城の記載—マッフェウスの日本記事……六四
日本の奇なる山嶽……六五
日本の奇樹鳥獸……六六
日本人の體格—日本人は强堅なる人民　其習俗……六七
日本の盛膳—日本人の飲料製法……六八
日本人の家庭—日本人の言語—彼等の武器……六九
彼等の衣服—日本人の習俗の歐洲人に反すること……七〇
殿と稱する最上資格……七一
日本諸侯の權力—日本の僧侶……七二
市民は第三級を成す　商人は第四級　農夫は最
下級—日本人は慧敏なり　忍耐あり　名譽心
强く侮辱せらるるを厭ふ　怒を隱し訴訟を作
さず　誹論せず　何故に此く堅忍なるか……七三
日本の宗教は忌むべし—僧侶の主義……七五
阿彌陀と釋迦　ホトケとカミ—神となる人間
日本人の邪惡……七六
小事故によりて相殺す—降伏者を虐遇す—婦人
の無慈悲……七七
貧窮者は死す—刑罰—謀叛者の處刑　自ら腹を割く……七八
彼等は法律を有せず—諸侯と其臣下……七九
諸侯は往々位地を奪はる—日本は初は唯一の君
主內裏に統御せられたり……八〇
內裏の特權—日本人の主長—蘭使フリシウスと
總督代理　ブロークホルストとの合同……八一
長崎に於ける東印度會社倉庫の記載……八二
日本エムペロルの長崎貿易に關する命令……八三
蘭國使節長崎を發して江戸に向ふ—日本の漁夫
漁撈の方法—長崎の記載　市街及寺院　各街
に門戸あり……八四

長崎の家作り　家屋を高く作らざる所以　庭園
—都市は火災に惱まさる　上流者の建物は莊
麗なり　屋内の裝飾……八五
長崎の街路の數　夜間街道を通過する者無し
失火の節各街相救ふを得ず……八六
長崎を圍める庭園　長崎外園の杉—長崎の殿堂……八七
長崎住民の外貌及服裝—上流婦人の美服……八八
日本の概括的記載—四周　緯度　國土の區分　諸島……八九
奥州—大蝦夷の記載……九〇
蝦夷に關する地理學者の誤謬……九一
日本人の起原に關する臆說—マルチニウスの日
本人起原說—豪族及其歳入……九二
エムペロルの宮廷費及後宮費—近衞兵の服裝—
蘭使長崎より海路大阪に至る　路次の諸市邑
（蘆屋、小倉、下ノ關、室、姫路等）……九四
蘭使大阪に着す—日本の遊船　早船……九六
フリシウス及ブロークホルスト大阪に送らる—
スペックス及セゲルソーンの大阪に來りし時
—平戸よりの彼等の旅行……九七
秀頼其地位を失ふ……九八
カイロン及ハゲナールの平戸より大阪に至る旅行…九九
フリシウス及ブロークホルスト大阪にて豪家に
迎引せらる—大阪市の記載—大阪の水城……一〇〇
水門—鬼神の殿堂……一〇一
大阪の望樓—エムペロルの饗燕場—觀音の殿堂……一〇二
觀音堂前の奇門—觀音堂の細記—觀音の記載……一〇三
大阪に於ける主なる建物—大阪市の内部……一〇四
大阪屢〻日本の内亂に災せらる—内府樣の攻略……一〇五
大阪の大地震—蘭使大阪を發す—都への旅行……一〇六
日本の杉樹—蘭使都に着す……一〇七
信長自ら神として崇拜せられんことを望む—新
偶像「三體」……一〇八
信長自らエムペロルとなる　公方の遭害—都の
略取及宮殿の再建……一〇九
覇權を收めし後の信長—信長虚榮傲慢を以て世
人に厭はる……一一〇
ゾボの殿堂の收入—都の記載　ゾボの偶像釋迦
—宗教に關する日本人の諸說……一一一
禪宗—ピタゴラスの教義日本に存す　偶像阿彌陀…一一三
法華經宗の偶像釋迦—弘法大師　偶像崇拜を敎
ふ—都の主なる建物……一一三
坊主の殿堂—内裏の宮殿—エムペロルの宮廷—
市内の建物　諸侯の邸第……一一四
饗宴の塔　後宮　大佛殿　稅關—市民の邸宅……一一五
都の繁昌—蘭使の前進　大津より膳所—日本の乞食…一一六
膳所より水口　最良竹杖の產地　草津—日本の米…一一七
水口—鈴鹿山—龜山城—石藥師……一一八
庄野—桑名市—宮—ビオンゴの荒廢……一一九
宮市の記載—日本僧「サッキ坊主」……一二〇
鳴海　岡崎　赤坂　吉田市—二川　白須賀　新居…一二一
舞坂　濱名　見付—高山上の僧院　日本の一
大學　僧は外出せず　毎年一僧失はる　崇拜
佛の爲にする自殺……一二二
自溺者に對する尊敬……一二三
自溺する迄の行動……一二四
山伏、惡魔と語る　不可思議の行爲—日本人の
死を怖れざる所以—僧の失踪……一二五
金谷　大井川—蘭使幕府の鷹匠に遭ふ　島田よ
り府中　府中の荒廢……一二六
割腹の方法—カイロンの貴族處刑談……一二七
ヴィレラの處刑談—八丈島の記載……一二八
貴族の流謫—駿府は元エムペロルの宮廷所在地…一二九
江尻なる前蘭使の曾宿旅亭—都より駿府及江戸
に至るスペックスの旅行—駿府にて蘭使の到
着を報告す……一三〇
西使のエムペロル面前に於ける行動……一三一
西使の失錯—スペックス等謁見の日取　閣老へ
の贈遺……一三二
大臣コセキ殿との問答……一三三
スペックス等獻品を携へてエムペロルに謁す—
エムペロル、スペックス等と語る……一三四
スペックス江戸に向ひて出發す—憐むべき癩病
患者の記載……一三五
富士山　山伏の修行……一三六
山伏贓品を發見する方法—山伏病人を見舞ふ—
或山伏につきての怪事……一三七
ハルボレ坊主の記載……一三八
魔術師に關する神父フロユスの談—蘭使の前途
羅災後の三島……一三九
蘭使馬を徵集す　箱根村關守の記載—死者の爲

に求むる奇劵……一四〇
膳部等を携へて死者の靈を弔ふ所以—極樂に至る道程……一四一
蘭使嶮路に遭ふ　小田原に入る　小田原の地震—前進の路—トランガの殿堂……一四二
トランガの偶像……一四三
蘭使途に貴婦人に逢ふ—日本の牛車の記載—長崎江戸間の道程……一四四
蘭使の江戸着　江戸市の記載—江戸の家作り奇なる門　街衢……一四五
住民は課税せられず—愛宕山　エムペロルの殿堂—トンカルバ村　利根川……一四六
江戸の邸第及寺院—エムペロルの庭園……一四七
三體の殿堂—偶像充滿せる殿堂—戍衛所　奉行長廳—カミ及ホトケの殿堂……一四八
後宮—御臺—寶藏—エムペロルの三弟の第宅……一四九
江戸に在る他の宮殿　燈臺—阿彌陀の殿堂—黄金阿彌陀の記載……一五〇
阿彌陀像に種類多し—千像の大殿堂……一五一
日本に於ける大學—釋迦の大像—豪猪を祭れる殿堂……一五二
學徒の宮殿　日本の圖書館—日本に於ける多數の寺院—僧侶の寺院惡用—蘭使引見の命下る……一五三
蘭使の失望　宮廷に入る　接待の樣　退出—江戸城の記載……一五四
エムペロルの庭園……一五五
エムペロル最近親の邸第—エムペロルの住殿—兩使再び宮廷に來る……一五六
蘭使贈品を携へて閣員を訪ふ　エムペロルの大墳墓—エムペロル毎年亡父の墓に詣づ　銅燈臺……一五七
日本に於ける葬式の奇態—死者に對する僧侶の儀式……一五八
死骸—火葬の樣……一五九
火葬の時の奇習—說教の反覆　盆の祭事—丁憂中の日本人……一六〇
貧民の葬儀—蘭使江戸を退く—猿の殿堂……一六一
公方の宮殿……一六二
都の奉行の宮殿—森林中の僧侶修道院—魔王の殿堂……一六三
内裏の宮廷の正門—防禦工事　内裏の乘輿……一六四
内裏の大鹵簿—内裏の庖厨　爽快なる庭園……一六五
内裏の宮廷—高價なる玄關—宮殿の前面……一六六
黄金蒼の屋背—内裏の廣堂—エムペロルの内裏訪問……一六七
エムペロル内裏參訪の時の偉大なる儀式……一六八
内裏の貴族の服裝　裝飾せる馬……一六九
盛裝せる馬車—内裏の廷臣—贈呈品……一七〇
老若エムペロルの馬車—エムペロルの扈從……一七一
内裏の乘輿—内裏通去後の大混亂……一七二
蘭使の脫尼—内裏の受饗……一七三
大閣樣の美殿—日本人は演劇に得意—人馬の競走……一七四
内裏に對する崇敬　内亂の慘害の甚しき所以……一七五
内裏に對する謀叛—三好殿、公方に叛く　公方の死……一七六
三好殿公方に代る　大虐殺—公方の寵臣の奇行—公方の姉妹の自殺　幼弟の脫走……一七八
和田殿及信長、エムペロルの幼弟を援く—信長和田殿間の不和　親交復舊……一七九
和田殿池田城主と戰ふ—信長エムペロル間の不和　信長都を荒掠す　上京の火災……一八〇
僧侶の燒死—イズムの奇像……一八一
エムペロル信長に攻圍せらる　媾和—信長自らエムペロルとなる—僧侶殺戮の爲に民望を失ふ—奇異なる殿堂及修道院……一八二
僧侶の暴行　信長の攻伐　僧侶屠殺せらる……一八三
新教派の叛立……一八四
有名なるハクサンギン學校—信長ハクサンギンを攻め住僧を殺す……一八五
明智　羽柴……一八六
羽柴藤吉郎の生立　盜賊の嫌疑を被る　自ら無罪を證す　奉行職となる　將軍となる……一八七
羽柴、山口侯を征服す　柴田を亡す……一八八
太閤樣の政略……一八九
太閤樣大軍を以て朝鮮を征す　戰爭七年に亘る—フィリッピン島……一九〇
フィ島太守に贈れる太閤樣の書翰—フィ島より太閤樣への再度の遣使　フランシスカン派日本に教會を建つ……一九一
日本の一貴族聖母派を立つ—太閤樣が日本に外僧を在住せしめたる理由—茶壺の買入—太閤樣其諸甥を高官に陞らしむ……一九二

征韓の起志—自己の權力を抛たんと揚言す—日本軍朝鮮に赴く　支那兵朝鮮人を援く　日本人を退く……一九四
關白殿日本にて暴虐の行をなす—關白殿太閤樣間の不和……一九五
太閤樣老年に至りて一子を擧ぐ—エムペロル退隱時の奇習　日本人の饗應法……一九六
太閤樣旅行を中止す—關白殿を訪問す　政所樣の大鹵簿……一九七
太閤樣の大行列—關白殿太閤樣に會す……一九九
全部の行列聚樂に入る—盛大なる饗宴……二〇〇
聚樂に於ける變事—飛驒殿の盛燕……二〇一
伏見に歸還—關白殿怏々として太閤樣に別る　白井備後の派遣……二〇一
關白殿太閤樣の招喚を拒む—五ヶ條の質問……二〇二
關白殿の答申—密に軍兵を徵集す……二〇四
關白殿を脅威す　關白殿太閤樣に屈服し高野山に幽閉せらる—左近殿の忠烈……二〇五
關白殿髮を剃り名を改む—嚴しき幽禁……二〇六
木食上人、關白殿の爲に祈禱す　關白主從割腹を命ぜらる—太閤樣關白殿の從類を悉く殺戮す……二〇七
關白殿の妻妾子女を慘刑に處す……二〇八
白井備後妻子の處刑—太閤樣初めて羅馬教徒を處刑す……二〇九
フランシスカン派五人エスイト派三人の磔殺—太閤樣赤痢病に罹る—大御所の談話……二一〇
大御所の答—秀頼と大御所息女との結婚式……二一一
諸侯をして誓約せしむ　諸侯の協同平和を期して子女互に婚嫁せしむ—大阪城擴張の理由—死後神として祀られんことを望む……二一二
伏見城中の上層に運ばる—全營の悲痛　訃報の喧傳　虛傳なりしを知る　大阪城の奇なる造營……二一三
太閤樣秀頼の爲に憂ふ　重態に陷る　終焉—祕喪……二一四
大御所と閣員との不和—日本人改名の習慣—太閤樣神とせらる　閣員尾張を略せんとす……二一五
內府樣岐阜を取る—九州の動亂……二一六
主計殿肥後を取る　閣員間の不和……二一七
閣員兵力を集合す—閣員軍の大敗—佐和山城內の慘狀……二一八
內府樣、毛利殿を恐る　大阪の堅城—內府樣大阪城を得　次で日本全土に覇たり　薩摩侯の機敏—內府樣、毛利殿を赦す……二一九
宇土城の固守—宇土城陷落の爲にエスイト派の力を借る—エスイト派の謝絕……二二〇
內府樣日本の主權を握る　戰勝後の暴虐を行はず—津守殿の勇氣　聖像を捧げて斬らる……二二一
津守殿子息の慘死……二二二
內府樣敵人を宥す—明石掃部の驍勇　戰陣中の奇事—內府樣己の爲に戰ひし諸人を賞す……二二三
內府樣閑生活に入る　スペックス、セゲルソーン內府樣に厚遇せらる—ス、セ兩人の江戸行—彼等の江戸に於ける行動……二二四
スペックス佐渡殿の交話……二二五
蘭使歡待せらる　江戸を去り駿府に赴く……二二六
日本免許狀の內容—サヒ殿日本に於ける蘭人貿易を抑制す……二二七
スペックスの智計—蘭人エムペロルより要求の件を聽許せらる……二二八
旅行の自由—熱田の宮—蘭使の宮以西旅行……二二九
堺市の商業視察—平戸に着す—平戸の奉行日本に於ける蘭人の貿易を庇護す……二三〇
平戸の奉行への獻品—內府樣が外國貿易を奬勵せし所以—羅馬教徒の處刑につきてハザルトの談……二三一
志岐、有馬に於ける基督教徒の慘刑—エムペロルが基督教徒を處刑せし第一の理由……二三二
第二の理由……二三四
第三の理由　第四の理由……二三五
第五の理由　日本の基督教徒と他教徒との劇戰　基督教徒の敗滅……二三六
西班牙の勢力日本に於ける基督教徒處刑の動機となる—內府樣自己の血統に覇業を傳へんとす……二三七
大軍を以て秀頼の居城を圍む　秀頼の請斥けらる—內府樣秀頼を殺さんと決す……二三八
大阪城を攻陷す—內府樣の殘虐……二三九
內府樣の死　其子嗣ぐ—日本の暴風雨及洪水—基督教徒の迫害……二四〇
基督教の遲々たる發展　鹿兒島侯基督教に不快エスイト派の日本に於ける行動……二四一
山口に於けるエスイト派の業績　サヴェリウス都へ旅行す—サヴェリウスが美服を着けし所以……二四二

日本人が基督教に改歸せし奇なる事例—豐後侯
基督教徒に好意を表す……二四三
豐後の民基督教徒に對して暴起す—臥亞より豐
後侯への遣使—豐後侯僧となる　妻を離別す
洗禮を受く　領土より引退す……二四四
新市街を作らんとて出發す—嗣子は基督教徒に
好し—前侯の復位　叛徒を降す　フランシス
クスの死及葬儀……二四五
九州に於ける他の基督教信者……二四六
日本に於ける基督教徒の祭事……二四七
山口市の罹災　エスイト派教會堂を建つ—大村
侯の受洗改名　大村侯に對する内亂……二四八
大村侯危急を脱す　戰勝つ　エスイト派を厚遇す
—羅馬派遣の日本使節エスイト派に有利なりき…二四九
日本に於けるエスイト派布教の樣……二五〇
日本人改歸の樣—日本に布教せし者はエスイト
派を最とす……二五一
トロユス奇法を以て日本人を改宗せしむ—エス
イト派日本の歌謠を作る……二五二
演劇を催す—エスイト派の奇なる布宣法……二五三
基督教につきての日本人の反對說……二五四
日本人の反對說に關するフェルナンデズの書翰……二五五
佛僧エスイト派を罵る　山口の大火—羅馬教が
日本に流行せし所以　其第一因はエスイト派
が貧民を懷柔せし爲　救貧院の建設　佛僧は
貧民に對して暴虐なり……二五六
第二因は侯伯の貪慾……二五七
第三の原因　エスイト派理學を教示す　日本人
の知識欲……二五八
第四の理由佛僧より出づ　佛僧の暴戾　其無法
なる生活……二六〇
第五因は日本の宗教と加特力教との差異少かり
しこと—基督教の最初の迫害……二六一
伏見に於ける虐殺……二六二
基教徒を焚殺せし所以　處刑前の布宣法—焚死
基教徒の灰を海に投ぜし所以……二六三
江戸に於ける慘刑—アブ・アングリスの傳……二六四
ガルヴェス逸出して再び捉へらる　原主水焚刑に
處せらる　四十七人江戸附近にて焚殺せらる…二六五
江戸に於ける其他の慘虐　小兒に及ぶ—羅馬教
徒に對する布告……二六六
仙臺に於ける虐殺　大村にて　有馬にて　播磨
にて　肥後にて　廣島にて　長崎にて—河内
殿長崎奉行となる……二六七
直に基督教徒の虐殺を開始す—背信者を作らん
とする奇計の發明……二六八
基教を棄つる者多し—茂木に於ける慘刑—日本
の小兒頑强にして苦痛に堪ふ……二六九
日本人は基教を領解すること少し—小兒の信仰
心を硬からしむる日本人の奇法……二七〇
地獄の熱湯にての處刑……二七一
門戸を釘附にす　他人に雇使せらるるを得ず—
貴族等三十二人を謫す……二七二
河内殿歸航後の處刑—公方樣(秀忠)の死—長崎
奉行采女殿の殘暴……二七三
虐刑の杙を立つ—羅馬教僧の搜索及監視—熱湯の刑二七四
熱湯を以て苦しめらるる者多く改宗す—日本婦
人に對する暴刑……二七五
水責—親子責—其他の慘刑—兩脚を宙に吊りて
の呵責……二七六
背教者多數—當將軍樣の葡人に對する禁令—葡
人を謫す—媽港日本に使節を送る……二七七
エムペロル媽港の使節一行を斬に處す—宣告文
内容……二七八
六十一人斷頭せらる—繩を以てする呵責—竹筒
を以てする呵責　葦、炬火等を以てする呵責……二七九
母子に對する慘虐—島原に於ける布教幇助者の
處刑　呵責によりて背教を宣する者　背教を
悔いたる者の處刑……二八〇
志岐の怖るべき牢獄—當將軍樣(家光)の死　將
軍監督者の寛大……二八一
エスイト派日本に還らんと欲す—當將軍樣大に
男色を好む　結婚　乳母の諫言……二八二
フリシウス等長崎に旅行す　着京—日本婦人の衣裳二八三
大佛の殿堂……二八四
牡牛の殿堂—佛僧の牡牛に關する虛談—牡牛の
魔王—世界創造者を祀れる殿堂……二八五
繭使都を去る……二八六
佛僧の職業—教義の尊嚴—弘法大師派の僧　弘
法大師の爲人……二八七

根來僧嫌忌せらる　根來の青年教育　根來僧と認知せらるる者は何處にても殺さる　戰鬪を事とす……二六八
一向宗の僧尊敬せらる—佛僧の娯樂　犯罪僧侶の奇刑……二六九
佛僧の尊敬せらるる所以—貧民及婦人は救濟せられず—佛僧約束手形を人に與ふ……二九〇
佛僧說教の樣—佛僧の雄辯……二九一
殿堂に聽衆の群參—佛僧間の相異……二九二
信徒間の相異　各派各信徒の互に一致する所—釋迦屢〻生回す—日本の小神……二九三
佛僧の十二派—一向宗の僧—祇園の祭……二九四
摩利支天の血祭—一向宗僧侶の阿彌陀祭—日本の角力……二九五
都の莊麗なる橋　淀の城—野僧……二九六
大阪城の記載—濠の深さ及廣さ……二九七
大阪城を作りし人及其大なる理由……二九八
山伏の登る魔神の山……三〇一
蘭使大阪を退く—ダイマオギニの奇祭……三〇二
堺附近の大殿堂の記載—殿堂に附屬する家屋及庭園三〇三
莊麗なる塔—內裏の服裝—僧侶の長……三〇四
內裏の座席　名譽稱號の與奪權—內裏の後宮—宮嬪擧子の時　乳母の選定……三〇五
蘭使の南航—長崎へ航行中の奇事（蟻と蟻との鬪）—日本漁夫……三〇六
蘭使長崎に到着す—日本人の蘭人取扱方……三〇七
船舶の封印……三〇八
日蘭兩國人間の貿易狀況—豐後島（九州）住民の服裝—貿易品　商品陳列の場及有樣……三〇九
長崎港前の陳列場の記載—日本人の賣品……三一〇

第二編　日本帝國紀事後記

日本の諸王國……三一一
日本の要市—諸侯の權力無限……三一三
日本貴族の名譽心—エムペロルの奇異なる誓文—小兒の養成法……三一四
少年の教育—日本人は作法正し　健康長壽……三一五
夫は妻よりも多くの特權を有す—平戶に起りし貞婦の談……三一六
日本人の暴戾　婦女を取扱ふこと殘酷……三一七
高位地の婦人尊敬せらる—婦人の正式外出—婦人住殿內の娯樂—貴婦人及仕女の階級……三一八
諸侯大金を費消す—諸侯の江戶在住……三一九
エムペロル其臣下を壓服して背叛の餘力無からしむ—貴族の收入—諸侯賢人を顧問とす……三二〇
殉死の奇風—臣下自ら殺さるることを甘んず—處刑の奇法……三二一
ヘンリ・シャープの航海　日本に漂着す　日本人に欵待せらる—日本の貴族蘭人を裏切る……三二二
蘭人奇襲を被りて捕はる……三二三
日本人の囚人取扱方—江戶への旅行—囚人薄遇せらる……三二四
彼等の船に書翰を發送すべき命令—日本人木製の十字架を造る——木板多き日本の一村—日本人の來訪……三二五
記念の爲め署名を望む　縛を解かる……三二六
蘭船よりの書翰—船長シャープの返信—蘭人旅行を進む　常陸の佳市……三二七
蘭人厚待せらる—常陸に於ける王の宮殿—蘭人王に謁見す……三二八
奇なる饗應……三二九
日本武士の服裝—佛僧蘭人を尋問す……三三〇
蘭人江戶に行く……三三一
渡船及饗應—旅行に鷄を携ふ—佛僧の煩はしき訊問三三二
蘭人の答—江戶への旅行繼續—蘭人到處に好遇せらる……三三三
日本樂師の記載—蘭人江戶に入る……三三四
蘭人一貴官を惡む—蘭人宮廷に招かる……三三五
航海につきて尋問せらる—日本人蘭人に知を求む—復び尋問せらる……三三六
蘭人を恐怖せしめし事—日本人四名のエスイト教徒を呵責す……三三七
蘭人の姓名、年齡、職掌を記す—二人の日本貴官自ら來歷を語る……三三八
蘭人死を覺悟す　日本の步騎兵—蘭人法廷に引出さる……三三九
蘭人に對する質問及其答辯……三四〇
蘭人間の新なる恐怖—蘭人地震を恐るる事少き所以—判官蘭人を弄す……三四一
蘭囚の深憂—蘭囚への來翰……三四二
蘭囚と通譯との交話—日本の地圖……三四三

蝦夷の記載—シオワンの疑問　シャープの解答……二四五
韃靼のボリサンゲ河—蘭人の熟議……二四六
通譯江戸に來る—蘭人韃靼への航海につきて閣
員の前に訊問せらる—彼等の答辯……二四七
閣員の質問……二四八
シクンゴ殿に對する答辯……二四九
再度法廷に出づ……二五〇
蘭人にかかる新なる尋問—蘭人の答辯……二五一
トサイモンの質問—シャープの答辯……二五二
マニエケベの質問—シャープの答辯……二五三
和蘭に於ける宗教につきての質問—之に對する
答—和蘭の海戰事態につきての質問……二五四
キラン攻取につきての問……二五五
日本娼婦の記載—日本人蘭人を饗す……二五六
日本人の難問……二五七
ビレヴェルドの答……二五八
蘭人に對する其上の難詰—シャープの答辯……二五九
シクンゴ殿蘭人をして誓はしむ……二六〇
書翰の日本譯—シクンゴ殿蘭人に好意を示す—
通譯の執拗……二六一
誓書に署名……二六二
通譯間の内訌—蘭人の拘囚の長びく所以—少年
パウの尋問……二六三
閣員會合の席にて審問—エスイト四名の訊問……二六四
日本閣員の尋問—蘭人の答—葡國に關する問答
—西班牙の勢力を語る……二六五
日本閣員葡蘭兩國の宗教の異同を問ふ—シャー
プの答……二六六
日本の墨汁入—日本人は書技に精妙なり—日本
人の書方……二六七
蘭國青年太鼓を打たしめらる—日本貴婦人の記載……二六八
二人のエスイト改宗を取消す—四人の通譯二通
の書翰の飜譯に苦しむ……二六九
蘭人消息に接す—エムベロル蘭人を恐怖せしむ……二七〇
日本の黄金島—日本紳士の記載—貴族と蘭人と
の奇なる問答……二七一
二船の記載　日蘭人の問答……二七二
四人のエスイト派の釋放—蘭人其居館を移す所以……二七五
蘭人再び日本判官の前に引出さる—シクンゴ殿
の新審問　ビレヴェルドの答辯……二七六

一層の奇問　ビレヴェルドの答辯……二七七
ビレヴェルドの基督教に關する解答……二七八
シクンゴ殿の質問　シャープの答　ジャヴァの
記載—日本の囚人……二七九
エルセラク到着の報—蘭使エルセラク江戸に着す……二八〇
シャープ及ビレヴェルドの訊問急なり—日本祕
書長の審問　ビレヴェルド及シャープの答辯……二八一
カストレコム號の韃靼人—蘭人に誓書の要求……二八三
エルセラク及拘囚の蘭人シクンゴ殿の前に出づ……二八四
エルセラク蘭人に釋放を告ぐ—蘭人再び痛心す……二八五
江戸の大地震—蘭人エムベロルの居城に至る……二八六
蘭人條件つきにて放免せらる—日本エムベロル
の豪富……二八七
諸侯のエムベロルに仕ふる態—放免の祝詞……二八九
エルセラクの江戸長崎間旅行……二九〇
死兒の偶像　シカニの記載……二九一
偶像エネ……二九二
エルセラクの大阪長崎間航行……二九三
東印度會社の謝恩使—遣使の命令書……二九四
ワゲナールに與へられたる命令……四〇〇
カスエリス鳥の記載—ワゲナール長崎に着す
日本人日の吉凶を言ふ……四〇二
日本人の多妻—日本人結婚の奇風……四〇三
結婚式……四〇四
ワゲナール江戸に着す—エムベロルに謁見す……四〇五
獻品の代價及旅行費—江戸の大火—火焔ワゲナ
ールの旅館に及ぶ　蘭使一行避難す……四〇六
一行の危難—ワゲナール投宿する處を得ず　江
戸市外に遁る……四〇八
江戸の燒跡を見る　江戸城焚く—ワゲナール熔
解せる銀塊を搜す……四〇九
死者十萬を超ゆ—ワゲナールの貨財若干救はる
—生命の危險……四一〇
日本貴族ワゲナールに買品の價を拂はずして去る……四一一
ワゲナール江戸を出づ—長崎に歸着す……四一二
蘭人、支那人の事につきて日本人と不和なり
日本人蘭人に對して暴行す……四一三
支那人其貨物をウルク號より回取す……四一四
ワゲナールの辯疏聽かれず　日本人、支那人を
して蘭人に對抗せしむ—ワゲナール日本人の

苛酷を愬訴す……四一五
キエモン樣こワゲナールこの問答……四一六
エムペロル地球儀を請求す　ウルク號の判決—
藤堂樣の請求……四一七
ワゲナール第二次の遣使　苦しき航海—日本人
自ら溺死す……四一八
ピエネス島—堺の大殿堂—ワゲナールの江戸に
至る旅行……四一九
江戸に着す……四二〇
エムペロルに謁見す……四二一
謁見の樣……四二二
日本貴族の不義理……四二三
蘭使閣員の前に出づ　北條安房守の問　ワゲナ
—ルの答—エムペロルの贈品……四二四
蘭人の贈品返還せられし所以—ワゲナールの長
崎に至る旅行……四二五
肥前市及ダイマツ城……四二六
日本人の商品を賣る樣……四二七
マルチン・レメイの事件……四二八
蘭國外科醫の事件—醉酩船員の事件……四二九
日本人製陶に力む—日本人蘭船を港外に出す……四三〇
長崎奉行インヂークを訪問す—長崎に於ける慘事……四三一
長崎の地震　羅馬教徒迫害せらる　基督教拒否
の法—羅馬教徒七十四人の斬殺……四三二
オンナイス宮殿……四三三
インヂークの江戸に至る旅行……四三四
江戸着後の蘭使—インヂーク、ヨヒエ樣に欵待
せらる……四三五
蘭使インヂーク、エムペロルに謁す　インヂー
クの子息厚遇せらる……四三七
インヂーク再び宮廷に行く　賜品を受く……四三八
江戸を出發す……四四〇
火山シウルプラマ—インヂーク都に着す……四四一
日本の溫泉—ウチワリメットの記載……四四二
長崎に歸着す—國姓爺に關するコイエットの書
翰　支那人ゼランヂア城を攻む……四四三
臺灣の事情を日本文に譯して江戸に申送る……四四四
インヂーク支那戎克捕獲の允許を得んこす　イ
ンヂークの決答……四四六
ヘルマン・クレンクの冒險……四四七
國姓爺の臺灣攻取及伯父殺害の話……四四八
博多侯インヂークを訪ふ……四四九
平戸、有馬の兩侯蘭人を訪ふ—作右衞門殿及イ
ンヂークの交話……四五〇
インヂーク長崎奉行を訪ふ……四五三
大市鹿兒島の記載……四五四
蘭使鹿兒島に入る……四五五
死體を洗淨する爲の殿堂—再び鹿兒島の記載……四五六
メワリ市の記載……四五七
鹽屋の眺望……四五九
都に於ける蘭使の迎接……四六〇
都の記載……四六一
日本の度量衡……四六二
日本の街路—日本の貨幣—日本の商賣法……四六三
バウロママ山の記載……四六四
奇なる偶像トバン……四六五
偶像ホトケの奇談—日本通譯の奇談……四六六
蘭使の宮驛に於ける迎接……四六八
長崎より出航する船舶—結末……四六九

（目次終り）

插畫目次

英語原本表題紙……卷首
大阪江戸間陸路
長崎大阪間海路……同
セントヘレナ島……五二
平戸の洋館……五八
平戸侯の城……六四
出島の長崎蘭館……八二
日本人の魚撈法……八四
婦人の服裝……八八
男女風俗……八八
武裝せる兵士……九四
日本人の快駛船……九六
大阪市……一〇〇
大阪城……一〇〇
鬼神の殿堂……一〇二
觀音堂……一〇二
魚口出現の觀音……一〇四
安土山信長神像……一〇八
都(京都)……一〇八
公方の殺害……一〇二
乞食……一一六
野人の生活……一一八
佛僧……一一〇
侯伯行列中の武士……一一〇
迷信者の投身……一一四
武人割腹の樣態……一一六
癩患者……一一六
箱根の關守……一一〇
葬送の列及喪家に投石の光景……一一〇
トランガ武神像……一一二
將軍の姪を載せたる牛車……一一四
江戸市……一一四
黄金阿彌陀堂の奇なる狗頭佛像……一一五
千佛殿……一一五
江戸城内……一一四
日光の前將軍墳墓……一一六
葬禮……一一五
猿の殿堂……一一六
内裡の宮廷……一一六
人馬の競走技……一一七
三十臂觀音……一一八
貴婦人を運ぶ車……一一九
擬人頭を刺擊する遊技……一一〇
豐臣秀次の最期……一〇六
大阪落城……一一三
地獄の沸湯(基督教徒の迫害)……一一六
當將軍樣其内室を禁錮す……一六一
盛裝せる貴婦人……一六一
大佛殿……一六四
日本の創造神……一六六
角力……一九六
九州人の服裝……二〇八
蘭人欺かれて捕へらる……二二二
蘭人糺問せらる……二二八
高官外出の態……二二〇
門附の音樂隊……二二四
筆硯及筆寫の態……二六六
高官の服裝……二七〇
江戸の地震……二八六
將軍の座位……二八八
日本の埋葬……二九二
トンサ島(四國)住民の服裝……二九二
日本人の婚禮……四〇四
江戸の火災……四〇六
堺市……四一八
堺郊外の大殿堂……四一八
尾張市……四二二
鹿兒島……四五〇
都の奉行の行列……四六〇
蘭使の迎接……四六八

モンタヌス日本誌　一名蘭使紀行

文學博士　和田萬吉譯

第一編　遣日蘭使紀行

海陸圓球を成す

陸地と海洋とが一體を成して正しく圓球狀を形作れることは月を蝕する圓形の陰影により、又天空の光體の出沒不定なることにより、又天頂の高さの種々なることによりて證明せられ、毫も疑を容るるの餘地無し。その大なる圓球の表面は、縱令粗雜にして凸凹あり、多くの部分は岩及山となりて隆起し、他の部分は陷りて深谷となれるにもせよ、猶平坦にして滑かなる外圍をなせり。何となれば最高の山頂も最低の窪地も此廣大なる物體の積量に比較すれば殆ど擧げて云ふに足らずして、手の上の疣又は耕地の上の小溝よりも小なるが如くに見らるべければなり。

我が此地球を圍繞する無數の光體は測知すべからざる距離に於て穹窿の窮極なき渺茫界裡に光輝を放てり。

天と地

地球の周圍には空氣三帶に擴がり、中央よりは各種の流星を放ちて、吾人の上に諸種の結果を來す。最下の層は諸種

の禽鳥類の收容地となり、河海には魚類棲息す。然れども創造主は陸地、海洋及其處に棲息せる凡ての動物をば一に人間の制裁するに任せたれば、凡ての動物は全く人間の命令の下に在り。斯くの如くにして、力の權威は顚倒せられ、ミクロコスムスはマクロコスムスの上に置かれ、小世界は大世界を支配せり。

地球上人民の分布

然れどもアダムの墮落以來、其後裔は舊態を持續し、彼等の重大なる罪過、著しき惡事は漸次に增長し、神をして彼等の上に正義の審判を下さしむるに至れり。是に於て神は洪水によりて舊世界を破壞し、唯八個の人間を生存せしめき。此八人方舟より下り、洪水は退き、新世界爰に開始せられぬ。此新世界には彼等の後裔次第に增殖し、之が爲に新殖民地を作るの止むなきに至り、彼等は初めて定住せし山麓より斷えず漸く遠かり行けり。然れども一たび荒廢せる世界に程善く又均一に再び殖民するに與りて最も力あるは、言語の混雜に及ぶもの無し。此言語の混雜はバベルに於て世界の幼稚期に起れることなり。此地に定住せんと決心せし人民の凡ての子孫はそれ以上に何等の思慮もなく、シナルの肥沃なる平原に着せり。彼等は曰く此地は今後發達すべき且初より企畫せられたる帝國の中心たらざるべからず。彼等が今着手せる大規模の土木の中、高塔は既に雲を眼下に俯瞰し、尙天空に登らんと脅威せるが、該建築は我等が帝都の凡てを支配する首腦たらん。而して我等は此平原の上に擴がれる此帝都に居住し、生命財產を捧げて之を防禦し維持せんと。然るに彼等の傲慢なる企畫、憐越なる目論見は突然神の攝理によりて攪亂せられき。神は彼等を定住せしめず、却て彼等を地表の上に散布せり。彼等は工事に最も忙しく又期待の頂點に在りて此驚くべき建築を竣功せんと勞働せる時しもあれ、全能の主は彼等の全努力を絕望に歸せしめ、爲に凡ての作業は忽ちに放擲せられぬ。そは人々互に措誤をなし互に理解せざることとなりしを以てなり。此混雜の裡に彼等の唯一の慰藉は同一の國語を語るものと相會ふことなりき。卽ち同一の言語を語るものは集りて一團をなし、相結びて隊を作り、彼等の未だ知識せず且人類の未だ棲息せざる地方をさして逃走せり。彼等は其地に殖民し繁榮し、俄に數個の大帝國を發達せしめたり。斯くの如く彼等全體が世界の各隅に遁走したることは良結果を齎し、各地は此手段によりて、何よりも速に人類を以て供給せられ、彼等の新殖民地は漸次に極端の海岸にまで推及びたり。

舊地に殘留せる一集團

然るに唯一箇の集團のみは此解散の後にも舊地に留止せり。彼等の着手せし高塔は之を放擲してその破壞荒廢に委したれども、其首府の工事は愉快に繼續せられ、此地に於てニムロド先づ第一に稱號を取り、最上の權威を掌握し、新に建立せられたる王位に登れり。是をアッシリア國の最初の王とす。彼以外にも多くの專制君主は時の進むと共に各國に立ち、全世界は再び殘る隈無く人を以て充滿せるが如く見えたり。

動亂時代

休止を好まざる人間性が一事の成就を以て滿足せざる爲か、或は過多の集團の爲に領土を擴大せんとの野心に驅られたるか、乃至は他の必要に迫られたるか、爰に、鐵時代卽ち動亂時代始り、戰爭及反目は各地に暴威を振へり。勝利を得るものは强大となり、之に反して敗衂するものは屈辱を嘗め、國民は盛衰榮枯常ならず、絕えず動搖不定の裡に在りき。王國も變じて共和政體となり、共和政體も亦厭はしくなりて元の王國に復歸するもありき。最も微力なる團體は追迫し來れる敵の爲に最惡の困窮に陷り、何れの地にも身を寄することを得ず、止むなく海洋中に遁逃せんとして遂に海底に葬られたるもありき、或は驅逐せられて何處とも知らず逃れて無人の陸地に上り、其處に新殖民地を開けるもあり。斯くの如くして古來未だ聞かざる新世界に人民は古くより住することとなり、其增殖と共に漸く大帝國

を作りしもの、遙の後に至りて我が航海者によりて發見せられたるもありき。

我が舊世界卽ち亞細亞及亞弗利加には如何にして人民が繁殖するに至りしか、何人が祖先なるか、或は何人が統御者として人民に領地を與へ各殖民地に定住せしめたるか。聖書を初め、古來の著述家の言によりて玆に之を記述するは、蓋し所を得ざるの譏あるまじきか。

ノアの長子ヤフェットの裔

ノアの三子の中ヤフェットは長子にして、彼の子孫は亞細亞と歐洲とに繁殖せり。モゼスの說にては此等はヤフェット、ゴメル、マゴッグ、マダイ、ヤヴァン、チュバル、マセック、及チラスの子孫なりと云へり。傳ふる所によれば、ゴメルは先づカスピ海に沿ひて殖民したりと云へども、ストラボ及プリニーは此地にセメリア人を置き、ゴメルの子孫たるアシュケナズ、リファット、及タゴルマは他の殖民地に定住し、アシュケナズはメヂア王國の基礎を定めたりと說きたれども、他の著者は之に反對して、アシュケナズは小亞細亞に定住したりと想像し、又他のものはヘッセン又はサキソニーに殖民したりと言へど、其の典據たるべき記錄は吾人之を知らず。エウセビアスはアシュケナズをゴート人の祖先、卽ち最初の王とせり。然るに現代の猶太人は彼を以てチュートン國民卽ち高獨逸の殖民者とせり。而して一層北の方に移殖せられたるリファットの子孫はスキチアの背後の地にリフェアンと云ふ名稱を與へ、後にはパフラゴニアを併せたり。第三子トガルマよりはトガルマ族出で、カッパドキアの先、カナーンの北側に定住せり。然れどもハルデヤ人の解釋に據れば、トガルマは獨逸に殖民したりと云ふ。而してツルコマニー卽ち土耳其人は亦トガルマ族より出でたりとは猶太人の斷言する所にして、此理由より土耳其皇帝は人民より今も尙トガルと稱せらる。然れどもヤフェットの第二子マゴッグはカエレシーア、マダ及メヂアの領內に住居せり。第三子のヤヴァンはイオニア人の祖先

にして、時を經るに從ひ他の國民と結合して大となり自らギリシヤ人と稱し、國を希臘と稱せり。羅甸人は此希臘人より出でたり。故に初には伊太利の大部分はグリースと稱せられ居たり。今にても伊太利の都市の名稱に、羅甸人の希臘人より出でたる事を示して否定し難きものあり。古代の著述家の斷定する所にてはヤヴァンを兩面のヤヌス神とせり。其の意義は希臘人及新羅甸人の兩者に祖先たりと云ふに在り、ヤヴァンに四子あり、エリサは地中海の諸島に殖民し、タルシシュよりしてキリキアのタルスと云ふ地名起れり。キッチムはキプルスの地名にして、トローヌス及ダデスといふ極端の二海角の入口に昔はキッチム市在りしなり。而して今日にてもダデスの海角はヒチ岬の名を有せり。ヤヴァンの末子デダニムはエペリアの一部を領せり。此所にはドノナ市ありて、ユピテル・ドドチウスの託宣を以て有名なり。眞鍮の鑵鼓を鳴らし、或は、又託宣する槲樹そのものより豫言す。槲樹は傳ふる所によれば、その空洞なる腹より問に答へたりと。ヤフェットの第五子よりチュバレア族出づ。後にはシリア人と稱せらる。他のものは、ヨゼフスに據れば、西班牙に定住せり。其王國內のスチューバルといふ古都はチュバルの名を存したるものなり。マセックの子孫は海岸を航して亞剌比亞に赴けり。古代の人はヤフェットの末子チラスの住地を定むるにつきて互に相異れる意見を有せず。卽ちヨゼフスはトラキヤ人の祖先なりといふ。プリニー及メラは、その國にアチラ河ありと稱せり。他の學者は彼は歐洲のサルマシアに往けりとす。其他にはプトレミーの說によれば、チラスといふ河卽ち現今のネステル河流れ居たりと云へり。或人はチラスを以てフォイニキアに在るチレ市の建設者とし、又或はヂュリンギア族の建設者とし、他の者はタレンチンの入口に在る古都ツリウムの建設者とす。

セムの子孫

ヤフェットの子孫につきては之を擱き、次にセムの子孫は如何といふに、彼等は卽ちエラム、アシュル、アルファクサ

ッド、ルド、及アラムにして、アルメニア、波斯、印度及亞細亞の東方に擴がれり。殊にエラムはエラミト人の祖先と認めらるるものにして、是より波斯人出でたり。彼等が唯一の領地を確立すると共にエラミト人と云ふ最初の名稱は消滅せり。アシュルはニネヴェの建築せられたる都市内にアッシリア國の基礎を作れり。昔は異教徒の歴史にては是等をニヌスより出でたりとせり。アルファクサッドに就きては、モーゼスは次の如くに云へり。アルファクサドはサラーを生み、サラーはエベルを生めり。エベルに二人の子あり。一人の名をペレグ(分れの義)といふ。其は彼の代に邦國分れたればなり。其弟の名をヨクタンといふ。ヨクタンはアルモダド、シェレフ、ハザルマヴェト、エラー、ハドラム、ウザル、ヂクラー、オバル、アビマエル、シェバ、オフィル、ハビラー、及ヨハブを生めり。彼等の住める處はメシャーよりして東方の山セファルに至れり。ベヲヂクツス・アリアス・モンタヌスは殊に此等の分布をヨクタンの各子に歸せり。即ちアルモダドにはテメオト人を歸す。但しプトレミーとミーラに據れば亞細亞のサルマシアに移殖せられ居るものとせり。次にシェレフにはセレビア人を、ハザルマヴェトにはサルマシア人を、ヤルカにはアラコシア人を、ハドラにはヒルカニア人を、ウザルにはオキシエニアのバクトリア人を、デクラにはイマウスの山中に住みしスキチヤ人を、オバルにはカウカスとパロパニススの間に住みしオボリト人を、アビマエルには有名なるイマウスの極めて高き懸崖ある處に住みしイマエンス人を、シェバには有名なるサケス人を歸せり。然れども他の人は波斯人と相隣接せるサベア人をシェバに歸するを以て可とするものあり。オフィルにはオフィル領と稱せられし地を歸すべく、其處はソロモンが黄金を持歸らしむる爲に三年ごとに艦隊を派遣したる處なり。然れども要するに人類の地球表面に於ける分布に關しては、多數の著述家や聖典なご。さては近代の地理學者又は近き旅行家の確定したるもの多きが、之に據るに地球の三分の二は未だ住居せる人無しと見ゆ。即ち南極地方の全部及北極地方の大部分にして人迹の稀なる荒涼たる地方、及通過を許さ

ぬ沙漠と跋渉しがたき山嶽及多數の島嶼ある亞細亞、亞非利加の如し。其中或ものは既に古代に於て發見せられ、或ものは亦近代に於て發見せられぬ。其多數は開拓の勞を費す價値あるものとして認められず。就中日本は長年月の間未耕地のままなりしが、或時二三の憫むべき流浪者は切迫し來りし艱難の爲に其鄉國を逐はれしより(傳ふる所によれば)、此地に殖民せざるべからざることとなれり。斯の如き見る影もなき原始よりして二三代を經るや、不知不識の裡に最有力にして畏怖すべき大帝國は發生せり。然れども我等は今日本の記載說話に關する我等が此目的に向ひて進むに先ち、(是に就きては和蘭人は最良の記錄を供給し得るものなるが)、玆に少く我が座席に在りて目を四圍に放ち、容易き觀察點に立ち、航海業の外に兼ねて我が地球の處女地帶(以前には通過し得られざるものと考へられたりし)を解放せんと大膽にも冒險を試みたる航海者の事を簡明に說くも亦誤れる業にはあらざるべし。彼等は斯くして東洋の未發見の部分を見出したるのみならず、新なる西印度を發見せり。西印度は東印度の絹布及香料に於けるが如く金銀に富めり。尙又彼等航海者は前記の何れにも匹敵するほどなる第三の大陸に關する記錄を提供し居れり。

羅針盤の發明

磁石の多くの效驗及驚くべき作用は多年の間熟知せられ居たり。然れども、それが一小地球にして、蒼穹の南北兩點に應ずる兩極を有し、想像上の子午線緯線を有せる最も不可思議にして亦最も有要の物なることは、チーブルスの人フラヴィウス・メルヴィウスが今より約二百年前(本書出版の西暦一六七〇年より算す)に於て發見せる所にして、之によりて人類に大なる利益を供し、航海を完成せしめしなり。是より以前には、磁石をも海圖をも有せざる憐むべき航海者は、天候險惡にしてかの唯一の水先案内たる太陽星辰が晝夜暗雲の中に包まれたる時なごは、漸く海岸に沿ひて徐航するを常習となし、好天氣の徵候には勇氣を得て進みて沖の方に冒險せしなり。彼等は其身の正に何處に在るかを

知らず、又何れの方向に進むべきかを知らず、天の何れの方向より風の吹けるかを知らず、實に憫殺すべき狀態にありき。かのヴィルギリウスのアエネイド詩篇第三卷に云へるを引きて證せん。

我等の船が遠く海洋に離れて以來
唯空と海とばかりにて凡ての世界は見えず
夜と暴風雨とに副へて黑雲は起り
大洋は次第に恐しき闇黑に荒ぶ。
怒れる風は荒るる浪を一きは激しくし
廣漠なる洪水の中に我等を右往左往に離散せしむ。
足早き暴風が晝を包むごき
滿天は暗澹たる夜の餌となる。
電光は絶間なく斷雲より閃く。
針路を離れて暗き海原を漂ふ。
バリヌルスもかかる空には晝夜の差別を知らず。
又何方へ行くべきかを知らず。
日なき日を三日、夜を三夜、
一個の星もなく陰鬱の霧中をさまよふ。
四日の曉となりて浮び出づる陸地を見たり。

遠きあたりに雲霧の包める山も見ゆ。
帆を下して我等は漕ぐ。健なる我が水夫は潮水の蒼々としたる道を掃き行く。

然るに指針の助によりて、近代の航海者はアエチウス、ウリッセス、其外古代の航海者が常に難破を恐れつつ十年を要したる所を十日間に無事に航走することを屢〻なり。

而して近くは偉大なる補助器即ち磁石によりて、航海者はアトラス及ヘルキュリスの圓柱と永訣し、廣漠且未知の海洋のただ中を大膽に航走することを難しとせず。斯くて針路を變ずること無く、晝夜を別たず、明暗を論ぜず、好天氣にもあれ荒日にもあれ、忍耐强く倦むことを知らず、凡ての危險と爭ひ、新星を上らしめて舊星を沒せしめて、さしもの長航路を事無く終結せしむと謂はんとす。實にや彼等の或ものは世界を周航し、地球を環航し、極東と極西とをして互に握手せしめたり。

斯くして彼等は精確に新世界米國を測量し、海岸より海岸まで、東大洋より西大洋までを視察せり。マゼランカは最後即ち未知の擴がり居れる境域の緣端を航行して、(前者の如くには十分に究められざりしかど)その大さは他の三分一よりも小ならざるべしと推測し、古代の學者の說を一蹴し去れり。後者はただ全世界の三分の一の知識のみを以て滿足せるが如き愚昧なるものなりしなり。

コロムブスが新世界の知識を得し所以

第一の海上の英雄即ち偉大なる船長にして西印度發見の最上の光榮を有する人は、ゼノア人クリストフェル・コロムブスなり、彼は葡國にて結婚し、マデーラに住せしが、才智ありて奇拔なることを好み、常に斬新なる計畫に耳を傾け居たり。彼は自己の性癖を滿足せしめ、且財產を獲んと望み居りしが、偶然旅行中にフロレンス人マルクス・バウルスと相知

れり。彼は醫師にして大博物學者なりし上に、又哲學にも通ぜり。彼はコロムブスの氣質を知るや、當時にありては想像に過ぎざる話を以てコロムブスの好奇心に充ち研究を好める性質に對應し、先づ對蹠地の存することを語り、合理的なる論法を以て大なる天空の諸光體は吾人より姿を失ふ時も、決して發光を怠り或は遮蔽せられ居らざること、又は此等の大なる赫々たる光體は晝間に於て他の地に幸して光線を注ぎ生氣を與ふるものなること、他の地とても決して我が世界に劣らず住居に適し豐饒なること、又大地は古人の唱導したるが如く盆の如く扁平なるにはあらず、圓球の如き形をなして自らの位置を占め、空氣のみならず天空といふ渺茫界之を圍繞せることを敎示せり。

此くてコロムブスは燃ゆるが如き想像中に斯くの如き學說を咀嚼し玩味し居れる間に、偶〻亞弗利加行の一船天候の惡しかりしが爲に豫定の航路を取るを得ず、陸地を遠く離れて幾日となく大洋中に簸揚せられ、終に貯藏品を費し盡して後、最も憫むべき狀態を以てマデーラ港に入りしが、入港すること間もなく、船長以下水夫は連日の飢餓の爲に疾を得、休養も其元氣を恢復することを得ずして盡く死亡せしことあり。船長は加養中コロムブスの家に引取られ居りし間に驚くべき物語をなせり。曰く彼は西の方未だ歐洲人の見たることあらじと思ふほど遙なるあたり、全く未知の海岸に吹流されしことあり。彼の死後にはその非常に不運なりし航海の日誌を讓與すべしと云へり。此くて船長の死後コロムブスは熱心に其日誌に讀み耽りしが、彼は此書によりて彼自身をして其地に臨めるが如くに確信を懷かしめ、且未見の新世界に至る航路を定むるに著大なる指導を彼に與ふるものを見出せり。

爾後彼は久しく安處せず、事業を進捗せしむる爲の實行に入れり。彼は自身のよりも充實したる財囊の援助を借り、此新しき大企畫によりて財產と名譽との兩つを獲得せんとせり。

コロムブス葡王及英王に請願す

コロムブスは先づ葡萄牙王に請願せり。そは王の沿海の領土は彼の發見せんと企つる地と恰も相對するが故に、同王は(彼の想像する所にては)其計畫に最も適當したる人なればなり。然るに王は之を峻拒したるを以て、コロムブスは同胞バルトロメウ・コロムブスを英國に遣して請願し、國王ヘンリ第七世と商議する所あらしめんとせり。王は穎才及深慮の評高かりしかば、基督敎國中斯くの如き大計畫に彼を用ふべき君主は英王以外にあるべからずと想像せしなり。然れども不幸にしてバルトロメウは海賊に捕へられて久しく解放せられず(賠償金乏しかりし爲)、英國に到着せし時は時期既に遲かりき。バルトロメウの捕虜となれる間にクリストフェルはカスチル及アラゴン王フェルヂナンド及イサベラに申請せしが、時恰もグラナダなるムーア人との戰爭に惱みし折柄にて、王は彼の願意に耳傾けざりき。

コロムブス及彼の目論見は七年間全く一顧をも與へられざりき。然れども フェルヂナンド及イサベラが數回の勝利を得て敵軍を屈服せしめたる時、コロムブスはさしも長かりし擾亂の後初めて平和靜穩となりたる初頭に於て復び運動を開始し、更に西班牙朝廷を慫慂せり。王及女王は氣力衰へ財政も窮乏し居たりしかど、彼の言を聽きて終に說服せられ、一万七千ヂュカットの金を此事業の爲に支出するに決し、此金額を以てコロムブスの爲に三隻の船を艤裝せり。

一四九二年コロムブスの發航

是に於てコロムブスは大に滿悅し、一四九二年九月一日開帆して先づ針路をカナリア群島に向け、此地より貿易風に乘じて正西に向ひ、大洋に乘出せり。其後間もなく非常の狂風に遭遇し、風は磁石の各方位によりて吹き彼の船を痛く掀飜せしが、次で全く無風の狀態引續けり。水夫は長く海上に在りしを以て疾病を生ぜしが、疲勞恨悔の極、動搖を起すに至り、永く陸地を見ざるに絕望せし今は速に歸途に就きて食料の盡きざる間に生命を助からんとの念願の外には、何物も彼等を滿足せしむるもの無かりき。彼は斯く迫られては止むことを得ず、三日以內に陸地を見ざれば彼

等の願望に聽從すべしと約束せり。

フロリダの發見及コロムブスの歸國

此くて約束の最終日となるや、彼等は西方に當りて水平線に近く一抹の雲影を見たり。彼は此徴を見て歡喜し、水夫を激勵鼓舞し、速に陸地を見るべしと言ひしが、果して其言の如くなりき。其後間もなく彼等が碇泊せしはフロリダの海岸にして、此地に上陸して暫時休養し、土人の補助を得て同地の近傍島嶼を視察し、同時に微少の物品を土人に與へて黄金其他の貴重品と物々交換を行へり。彼は王の名に於て一の城塞を建て、此地の占領を行ひ、四十人の西班牙人を殘し、ヂエゴ・アラナを以て其指揮者とし、許多の財寶及印度人十人を積みて出發せり。

ヒスパニオラ及キュバの發見

彼の西班牙に到着するや、大歡喜を以て迎接せられたり。成功を闕下に奏せしに、國王は之を嘉納し、更に再び彼に資財を供給せり。次で彼はヒスパニオラ及キュバの大島とメキシコ灣の奥とを發見せり。

此くてコロムブスは十四年間に數回の遠征を遂げ、西印度を發見したり。

アメリクス・ヴェスプチウス葡王の命にて西印度の再探檢

同時に此大企業の名聲は多くの船長等を刺戟誘導し、同樣の方法を以て名聲を揚げ財産を增さんとする者を生じたり。その中にフロレンス人アメリクス・ヴェスプチウスは葡王エマヌエルの命を奉じて更に十分に大陸の視察を遂げ。彼の廣大なる國土に命名せり。西印度はクリストフェル・コロムブス第一の發見者なりしかど、大陸の方が今亞米利加と稱せらるるは之が爲なり。

葡王ヘンリ四世の新國土發見

然れども西班牙の事業に就きて筆を進むるに先ち、葡人に就きて簡單なる記載を試みんとす。葡人は此頃より以前に航海術を會得して海上の人となり、世界の南方又東方に新發見に從事したり。彼等の最初の計畫者は年少なるヴィスコ公ヘンリ皇子なりき。葡王ヘンリ第一世の第二子にして、長子は皇太子として世襲權及適法の繼承權により父王の崩御の後には葡國の王冠を戴くべきことに定まり居れり。その弟たる彼は勇敢豁達の本性ありて、若しよくしたらんには彼の本土を享有せんとの希望もありしが、生得權は之を拒絶したるを以て、財産を海上に索めんとするに至れり。而もそれが兄の王國と匹敵するものなりとは誰か知らん。皇子は又學者等より航海術の研究を爲すことを奬勵刺戟せられぬ。彼等學者は明白なる多くの論證を以て今は全く未知なれど大に注意すべき土地多く、殊にモーレタニア以南の處に多く、其地は廣漠にして通過し難き沙漠のあること、及酷熱なるが爲に陸地よりは入りがたしと雖も航海により其海岸を見附くるならば、亞非利加の全大陸を一層十分に視察し得るやも知れざることを斷言したり。

王子の初航海　アトラス山を超ゆ

是に於て彼は心を決し、老熟なる判斷を以て彼の企てたることを實行することになれり。萬事の準備を整へたる後、其目的の爲に船舶若干隻を艤裝し、一四一〇年を以て開帆し、航進してアトラス山の高き山嶺を水平線下に見たる第一人者となりき。其時までは凡ての南方航路の終點卽ち所謂チブルス・ウルトラは此アトラス山なりしなり。而して山の背後に亞非利加海岸を距る六十リーグの地を發見して引返しぬ。但し成功は言ふに足らざりき。

然れども勇氣は之が爲に挫折せず。此くの如き冒險を企つるに足るべき材料を充實すること十年、更に艦隊を組織し、老練なる好水夫ヨハンチス・ゴンザルヴェスの指揮の下に出發せり。彼は海岸を見失ふまでに遠洋に出でて進航せり。屢〻暴風、激浪、逆潮、氣まぐれなる潮流に逢ひしが、一に勇敢を以て之に堪へ、天候其他の障碍を排して猛進

し、アトラスを越ゆること四百二十リーグの地點まで進みしが是に至りて疲勞、困憊、風浪等の大敵に力屈し、此大發見の名譽に滿足して歸國せり。此くの如くにして此皇子は四十年間にマドラス、ボルト・サンクト島、ヴェルド海角、及ギニア海岸を發見して、南海の心胸を開き、葡國人を航海業者となすの名譽を得たり。皇子は高齢に達し、一四六三年に薨ぜり。

葡王アルフォンソ五世亞非利加海岸を發見す

彼の薨後航海業は全く衰廢し、海は無耕作に委せられ、二十年間葡人の航海に從ふもの無かりしが、葡王アルフォンソ第五世出づるに至り、一たび開始せられながら其後長く等閑に附せられたる事業に再び着眼して、更に航海術を復活し(然れども國民の傾向は當時之に反對なりき)、孜々として其歩を進めたり。最初のはヴェルド海角以上まで航海してセントカザリン島を發見し、永久の貿易を定め、是によりてギニアの黑人と親密の關係を結べり。

コンゴの發見

王の殂後はジョン第二世其後を承けて事業を繼續し、良船長ジャック・カヌスを派出したり。彼は先づコンゴを發見し、河を溯航して深く其附近の内地に入れり。

ヂアジオの航海　喜望峯の名の所由

クリストフェル・コロムブス、カスチル王に用ひられて遠征を遂げ、其名聲全基督教國に弘布するや、此風説に刺戟せられたる王は、西班牙が西方に於て爲し得たる功業に匹敵すべきものを南方の遠征に於て贏ち得んとの希望を起し、バルトロメウ・ヂアジオを派遣せり。彼は亞非利加の沿岸を航し、終に南方の大海角に到着せり。若し彼が之を理解し、之を正當に使用せしならば、是れ實に大功業となすべきものなりき。然るに此地に到るや、船員の不穩の擧動及天候の壓迫に屈服して、彼は此大海角にカボ・ブイグ又はカボ・ボイエの惡名を附したり。蓋し彼は此處に制止せられて後、速に歸國するの止むなきに至りしが故なり、然れども彼の賢明なる主君は一層よく之を領解して、それを喜望峯と名づけたり。

フランシス派の僧の航海

然れども ヂアジオが大なる南方の海角の前に逡巡せる時、彼の親友にしてアントニオといへるフランシス派の僧は、妙なる好奇心に刺戟せられて其地に上陸し、單獨にその廣漠未知の世界に於て財産を求めんと冒險を試みたり。予が此譚を語る所以は、爰に適切とは謂ふべからざれど、不可思議として傳ふべきものあればなり。蓋し單身、暑くして水に乏しく、沙漠多く、住民あれども彼我互に言語を領解せざる國土を旅行するが如き冒險を試むることは、實に一奇と謂ふべきなり。然れども彼は實際之を行ひ、啻に亞非利加内地を旅行したるのみならず、亞細亞の大部分に及び、終にジェルサレムに到着し、此地に於て敬神の誠を致し、リスボンに歸り、國王に奏するに彼の驚くべき冒險譚を以てせり。是に於て王は唯海岸のみを發見し得る艦隊を艤裝するよりも費用を節約すべき方法を考へ、其目的の爲に王はペドロ・デ・カヴィラ及アルフォンソ・バイヴァを用ひたり。彼等兩人は亞剌比亞語に通曉したれば、巡禮者となりて、未だ多くの人に知られざる地方を視察せんとせり。彼等は先づネープルスに來り、次にはローデスに寄港し、埃及を訪ひ、グランドカイロを見、轉じてジェルサレムに赴けり。此地に於て聖墳に相應しき涙を流し、それより兩人相分れて別々の路を旅行せり。バイヴァはエチオピアに赴き、其地に於て死亡せしが、カヴィラはオルムスより印度のカルカッタに行けり。此地にて彼は君主よりの書信を受取りしが、其主旨は何にても亞非利加に關する好消息を奏上し得るまでは歸る勿れといふにありき。斯くの如き命令を受けたるにより彼はエチオピアに奮進せしに、此地の

王は彼の大贊歎者となれり。彼の外貌と才能とは彼の心を奪ひしなり。是に於て王は彼を宮中に住ませ、彼若し結婚せんと欲せば、巨額の財産を有せる門地高き婦人を妻はせんと申出でたり。

エチオピアの情況

皇帝の宮殿より彼は葡王に一書を奉るの方法を講じたり。その書中に於て彼は亞細亞、亞非利加の諸國のことを十分委曲に陳述し、中にもカルカッタ市につきて住民の性格を細敍せり。彼の言ふ所にては、住民は色黑く、胡頽子の如き容貌をなし、人情又は禮儀に於ては殆ど知る所なく、無愛想にして宗教心に乏しく、凡ての道德に無識なり。彼等は身體の半以上赤裸なるを以て誇りとし、唯臂の部分に眞珠の腕飾をつけ、劍をつけたる帶は背部に横たはり、中央の部分に於て袴卽ち金の麗しき刺繍を施したる紫色の絹の長きを着く。

此處にては女子は數夫を有つを許され、一人の女子は好むだけの男子と結婚するを得。最も多數を有する者、最も高貴なりと稱へらる。故に彼等の小兒には生誕による優位といふこと無し。多くの小兒は誰も父の何人たるかを熟知せず、凡て同等の相續者たり。然らざれば母の妹姉の子相續す。エチオピアの土人は凡て黑人にして、一種の基督教徒なれども、猶太教と回々教との混淆せるものを交ふ。君主は多數の常備軍を有し、よりて彼の威嚴と廣大なる領地とを保護す。

葡王エマヌエル亞非利加及印度の再探檢に勇む

此の報告の後幾許も無くしてジョン王は崩殂せり。實に一四九五年なり。エマヌエル嗣立せしが、發見の事業を繼續せんとの考にて、斯くの如き大事件に關して如何なる手段を執るが最良なるべきかを貴族に諮問せり。王の顧問は偉大又は公共善を目的とする公精神よりも寧ろ私心に充ち居たれば、第一には困難、危險及大なる費用を顧み、第二には名

譽と利益とを考へ、彼等は既に亞非利加に於ける發見によりて十分に得る所ありたれば、彼等が成就し得るよりも以上を彼等に期待するは唯狂氣の沙汰といふの外なし。蓋し遼遠なる地方に殖民する爲に新なる船舶、新なる殖民を派遣するは、王國を弱くし、海軍を無力にすべく、又其處に移住したる人民を維持する以上に、此新獲得地より新利益を得んことはおほつか無かるべしと云ひ、其他之に類したる立論を爲せり。公精神ある黨派は凡ての大なる協議に於てはとかく少數を成すものなるが、此場合にも甚だ少數なりしかど、多數者に對して論陣を張り力說して曰く、彼等は國民が最初の發見に於て既に得たる名譽及利益につきて愁訴する理由無く、寧ろ是れ彼等の邁進を奬勵する所以のものなり。國庫は愈〻充實せらるべく、全國民は之が爲に事業を增すべく、外國貿易によりては富裕を加ふべし。若し彼等が此くばかり幸福に開始し遂行したりしことを忽諸に附せんには、啻に彼等の資財と努力とを失ふのみならず、その事業全體は漸を以て衰へ、終には皆無に歸するならん。若し吾人が斯くの如き榮譽ある計畫を放棄せば(吾人の例の爲に元氣を挫折せられて)、何人か聊にても困難及危險の虞ある事業に着手するものあらんやと。

ヴァスコ・ダ・ガマの遠征

斯くの如く此事項は盛に討論せられしが、王は己の判斷と意向とに適するが如き意見を有する顧問の言にのみ聽き、孜々として神速に四隻の艦隊を艤裝せり。兵士、水兵、その他凡ての必要品を十分に積み、ヴァスコ・ダ・ガマを提督に任じ、其同胞バウロ及ニコラオ・セリオを副とし、一四九七年六月十日出帆せしめたり。冒險者の妻子及近親は悲哀、叫喚、涕泣を以てそれを送れり。此航海は長途にして危險なれば、再會の期無からんとの杞憂に囚はれしなり。彼等は拔錨して先づ針路をフォルチュナート群島に向け、同地よりヘスペリデスに進み、ヴェルド海角を後にして、愈〻東方に航行し、全く陸地を見ざる處に出で、三箇月間風浪に任せしが、南緯十度の地に達して陸地を見たるを以て、

彼等は成し得る限り速力を加へて其方向に進み、久しからずして心地よき河口に碇泊したり。彼は上陸後數人の土人を見たり。其毛髮は短く捲き縮れ、膚の色は黑く、全然裸體にして、未だ商業の何たるを知らず、又從來未だ外人を見たることなきを以て、彼等は貿易を行ふこと少く、唯槍又は諸種の釘を動物及果物と交換せり。ガマは此地をセントヘレンス灣と呼び、之に注げる河をセントヂェームス河と稱せり。

ガマの遭厄　船員歸國を望む　ガマの死を謀る　新國土の發見

休養後、彼等は一たび拔錨したる上は喜望峰を越ゆるまでは一たびも着陸すまじと決心する迄に勇氣旺盛となれり。然れども彼等は靜穩ならざる天候の爲に苦しめられ、もはや遠征を續行するの望を失ひしのみならず、又彼等の保全につきても絕望するに至り、海員の衆口一致愁訴する所は、彼等は盲せる狂人の如く全然破滅の中に身を投ずるものなりと云ふに在りき。彼等の此絕望的想像は引續き彼等を苦しむる天候の爲に愈〻醞釀せられしが、殊に鄕國並に妻子を再び見るの希望を失ひたるが爲に然りしなり。然れども ガマはひとり能く部下を慰撫奬勵し、眞に高邁なる人々は凡ての危險を蔑視し、彼等が一たび企畫したることは決して之を放擲せず、困難は如何なる形を以て現るとも恐怖の爲に心神を惑亂し或は疑惧を生ずべきに非ず。今や最惡の時は過去り、艱苦は或程度まで無くなり、當に長き努力の後の收獲を攫むべき時に近けり。斯くの如くにして始めて驚くべき功業に對する不朽の名譽を得べきのみならず、又彼等の現在の必要を供給し、永久に彼等の所有とすべき富を得べしと說けり。然れども船員は如何なる說諭にも聾の如く、頑迷は恐怖と混じて耳を塞ぎ、提督が儼として歸國のことを聽入れざるを見るや、彼等は其勸告と奬勵とに從はざるのみならず、反て提督の生命を奪はんと共謀し、多數が苦しまんよりも一人を苦しむるが善しとの結論に出でたり。バムロは此隱謀を發見し、數人の水夫及水夫長を鞫問せり。ヴァスコは親ら舵を取りて何人にも委任せず、天候に惱まされつつも前進を續け、終に大なる南方の海角を周航し、此を距ること五十リーグにして一箇の灣を發見し、之をセントブラジウスと名づけたり。其中央に一島あり。此島に上陸して土人を見しに、曩に着港したる地の人と異る所なく、唯陰部を蔽ふに其目的に適する貝を以てせるのみ。

ソファラに來る

此地にて休養したる後、尙航行を續けしかど、惡天候、激浪、逆流の爲に苦しめられしを以て進行は遲々たりき。然れども終にザンジバルの地域に達し、彼は此聖者の名を取りて命名したる後、直に此地の首都ソファラの前に投錨したり。住民は稍文化に進み、銅輪を以て胸又は腕を裝飾し以て自ら美なりとし、木綿の柄を附せる短劍を把りて得意とせり。言語は全く解すべからず。然れども都人中に一人の亞剌比亞語を用ふるものあり、之を通じて知りし事は、彼等の船に似たる一船に在りし一白人が往年彼等と交易せし事なりき。

ヴァスコ・ダ・ガマは王の派遣せる彼の艦隊中に十人の囚人卽ち犯罪者を有したり。出發に先ち王は其生命を助け、提督が適當と考ふる地に上陸せしむべきことを命じたるが、是れ其處に流寓して運命を求めしめ、若し生存せば國內の視察をなし、言語を學び、以て他日の用を爲さしめんとてなりき。ガマは此等の中二人を此地に留まらしめ、前記の目的の爲に殘したり。此くてソファラに一月間滯在せしが、船中に一種の疫病起りぬ。此は從來食物稀少にして鹹藏物のみなりしに、今や俄に新鮮のもの多量となりしが爲にして、多數の水夫等之に罹りて亡びたり。

モサムビクに來る　都市を砲擊す

彼は更にモサムビクに向ひて出發したり。此は南緯十五度の小島に在りて、貿易商業に名高く、富有なる都會なり。此地にては商人及都人は皆金の刺繡を施せる繻子を衣とし、精巧なる亞麻製の大帽を被り、劍を肩に橫ざまに下け、左

には圓楯を持てり。彼等は斯くの如き裝を以て小船に乘り、提督の船に來りしに、ガマは叮嚀懇切に之を待遇せり。對話中彼等はガマに語りて曰く、王はアブラハムといひ、モサムビクの唯一の王なりしが、其下に在るセック卽ち副官此都を管掌す。其人は名をゾカシアと云へりと告げたり。後ガマは彼等と對話し、其中に交りて彼等及代理官の歡心を買ひ、二人の水先案内を得たり。此の水先案内を得る目的は艦隊を安全に東印度に出さんとてなりき。然れども此懇親は誤謬より起りしものなり。彼等は初めガマの一行を西サラセン人と想像せしが、後に至りて基督教徒なることを知るや、凡ての快心好意は全く一變して怨恨憎惡となり、水先案内先づ之を悔恨して異教者の爲に奉仕するを嫌忌し、海中に跳りて海岸の方に泳ぎ去り、全體の行事を遲滯せしめたり。葡人は此大なる侮辱を怒り、水先案内等の亡狀は都市の勢力の後援に在りとなし、之に砲擊を加へ、爲に住民の負傷するもの數人を出せり。是に於てゾカシアは止むを得ず會議を召集して、他の水先案内を送ることに決定せり。然れども此水先案内も祕密の命令を受け、彼等を目的の港灣に向はしめず、路を失ひてキロアの王に引渡さしめ、葡人には王等はアビシニヤの基督教徒にして、葡人を親切に迎へて各種の食料を供給すべきものなるを信ぜしめんとせり。彼等が進みて此奸計を企畫せしは、基督教に對する惡意と嫌惡とよりなり。かくて此地を拔錨し、順風に乘じてキロアの港に着せり。ガマは此地に於て前陳の如き救ひ難き破滅に陷らんとはいかで豫想すべき。此時ただ神の攝理ありて、船の港に入らんとするに際し暴風起れり。然れども是れ實に友誼的の暴風なり。彼は入港せんとして進路を轉じ、全力を擧げて努めたるにも拘らず、風は彼を沖の方に吹返し、船は風下に吹流されたれば、かの邪心ある水先案内の勸告に從ひ、生命を助からんと欲して海島に沿ひ、モムバザに向ひて進航せり。此地は一の都市といふよりも寧ろ城砦にして、難攻不落とも謂ふべき岩上に建てられ、殆ど四圍の海を以て城池とせり。ガマは此地に投錨するや、住民は新奇をめづる心より大群をなして船中に來りしが、船にては彼等を歡待せり。豫て謀叛的の目的を忘るること無かりし水先案内は、言語の利益を有するを以て住民を誑し、先づ彼等が基督教徒なることを語り、彼等を壓服して船を捕へ、不信仰なる犬を犧牲とせば、神に對し國家に對して良き奉仕をなすに當れりと告げたり。此くの如く說きて、彼等は好奇又は愉快の爲にするが如くに船より船に移りて互に相告げ、甲板に土人の增加するを待ちて彼等の決意を實行せんと定めたり。此事を遂行するは容易なりき。何となれば、彼の船の中一隻は近き頃の疫病の爲に人員缺乏せしより之を燒棄したりしを以てなり。然れども ガマは若し天候の惡きが爲に吹流さるることありとせば、餘りに內部に入込みて居り、且二三の岩石に近きを以て、碇泊を好まざりしかば、急に顧慮する所ありて拔錨を命じ、更に船を乘り入れて繫留するに一層適當なりと考へし處に碇泊せしめたり。

ガマに對する隱謀露顯　其經路　ガマ敵船二隻を捕獲す

玆にサラセン人の水先案内は思寄らず水夫が遽しく左右に往來して綱具を處理し、外海に向ふを見て、己等の計畫を察知して難を逃れんとせるならんと思ひ、謀の裏をかかれたりとつぶやきつつ突然海に投ぜしかば、其他の土人も亦互に警告して直に相繼いで水に投じ、恰も海鳥の如く水を潛りて泳ぎ、小銃の彈着距離以外に達して初めて逃走の樣を示したり。然れども此暴擧は咄嗟と云ふ程に早く行はれしにあらず、又彼等は凡て逃走をなす用意をせしにもあらず。仍てガマは十三人を捕へ、又附近に在りし船の中、二隻を捕獲せしが、其の中に熟練にして篤實なる水先案内一人ありて、彼に告ぐるにメリンデの市が殆ど晝夜平分線の下に在りて外人を懇切に待遇することを以てせり。提督ガマは之に氣を得、且此水先案内の言を信じ、其指定に從ひ、直にメリンデに向ひて進航したるに、此地にては（サラセン人なれども）かの老水先案内の言の眞實なるを見たり。

メリンデの王は今や老齢の爲に凡ての公事を捨てて退隱し居りしが、修好及友誼の表徵として其子なる若き王子を遣はして高貴なる贈遺をなし、後直に優れたる水先案内を供給せり。此水先案内は艦隊を二十日間に安全に東印度カリカットに導きたり。

カリカット市の記載

カリカット市はマラバル海岸に在り、港灣又は安全なる埠頭の誇り無くして、常に天候惡しく波浪激しく、時々猛烈なる颱風さへ起り、殊に五月の末比には最も甚しけれど、其商業貿易の盛なるが爲に富裕殷賑を以て名ある地なり。葡人は偶〻氣候險惡なる冬季の央頃此地に到着して、市を距ること二十リーグの地に在り。其後暫く此處にて風雨の襲來を受けしが、住民は慣れたることとて此目的の爲に作られたる快走艇に投じて船中に來れり。ガマは亦軍用端艇を出して、選兵數人と共に上陸せり。此時前に擧げたる罪人中の一人を伴ひしが、此罪人は其運命を求むる爲に放たれぬ。然るに他の人々とは服裝を異にせるを以て、土人は其周圍に群集せり。其群集中にチュニスの商人二人ありて、其一人はモンザイドと稱する者なりしが、西班牙語に通じ、外人に慇懃にして、彼を其家に伴ひ、提督ガマに對しても懇切を盡せり。ガマは之によりて國情及民風を察知し得しかば、此商人に更に二名を附して使者とし、國君卽ちザマリンに對して、彼等に安全の上陸を許可し、君主葡萄牙の國王よりの國書を捧呈せんと請ひ、此國書は兩國の便宜、殊に親睦平和に關する永久の同盟を欲する意味の大切なる事項を記せるものなりと云へり。

ガマ饗應を受く　ガマ警戒してザマリンの許に至る

ザマリン卽ち國王は當時バンダラナに住せり。此地はカリカットより二リーグを隔つる小市なり。ガマの使者は此處にて國王に謁見し、彼等の請求は何等の猶豫遲滯なく直に許可せられ、王は彼が斯くの如き友誼的の目途にて陳述せしことを大なる親切、榮譽なりと取りたり。王は亦懇切にも天候の突發的暴威より彼等を保護するに足るべき安全なる埠頭たるバンダラナの下に投錨することを勸告し、又其處は王の居城に近きを以て、彼の君主たる葡王の提案を協定するに便宜なるべしと云へり。而して直にカッアレスと稱する王の最上の遊船を貸付し、之をバンダラナより出し、直に公式を以てガマを王宮に迎へしめたり。然れどもガマは先に苦き經驗を嘗め、今とても如何なる凶事の起るべきかを圖りがたしとの顧慮より、最も倔强なる部下十二人を選出して護衛たらしめ、且自己の小艇を艤して海岸に在りて歸るを待たしめ、艦の責任は全く弟なるパウロに委ね、若し不慮の變ありて歸艦の遲延又は其他の變事の起りたる場合には、速に帆を揭げて去り、一切の事情を君主たる葡王に具申すべしと命じたり。

ザマリン宮殿の記載

當時此等の印度人は人又は貨物を運ぶべき馬其他の家畜を有せざりしを以て、ガマは輿にて王宮に送られたり。途上彼は皆精巧なる亞麻を着したる王臣數名に迎へられぬ。彼等は此目的の爲に遣はされたるものにて、秩序正しく彼の先に立ちて王宮に進み、其後手を執りて多くの前室及儀式室を通過して案内せり。凡ての入口及戸には國王の親兵十人づつ立ちて警戒す。斯くてガマは終に王の面前に出でたり。室は廣大にして莊嚴なり。床には絹及金を織り込める美しき敷物を布き、壁には一層美麗精巧の綴の錦を懸けたり。周圍には階段の上に多數の座席ありて、凡ての公侯及顧問官着座せり。國王卽ちザマリンは全面に黃金の薔薇を刺繡せる白布を着たるが、之を結ぶに無比の價なる東洋の眞珠にて飾れる美麗の帥を以てせり。其身は安易に仰臥し、帽子を被り、頗る華麗なる床の上に臂もて身を凭せたり。其帽子は寧ろ大なる黃金のターバントに類し、星の如く燦爛たる寶石を以て蔽はれぬ。彼の腕及脚の大部分は重き黃金の輪を以て美麗に捲かれ緊しく引締められたり。手足の指はエメラルドの指環を以て

蔽はれ、腕輪は金剛石を鏤めたり。彼の近くに一官人立てるが、檳榔子を以て被はれたる平板を持てり。此檳榔子は印度の君主が常に嚙むものにして、その利益たる常に甘き呼吸をなさしむるにあり。飲料よりもよく渇を醫し、不消化を治し、胃よりは凡ての慾心を除き、頭よりは憂愁不平を起すべき氣鬱を散ずと云ふ。ザマリンは顏色黑く、身幹は高く逞しく、四肢は大にして筋力强く（腕と足とは裸體なるが故に）、顏面及身體に於て自ら王者の威嚴を示したり。

ガマ、ザマリンと語る

ガマは着席を命ぜられ、通譯を經て始めて國王に謁するの機會に逢ひたる欣を述べ、彼は葡萄牙王陛下よりの代理者として敬意を表し、手に接吻する爲に派遣せられし者なること、葡王は偉大なる君主なれば、如何なる他國の君主とも親密なる同盟を結び、永久に親睦せんと欲すること、又特に美德に富み偉大にして名聲宇內の隈々に及べる陛下の高名を聞きて、第一着に相結ばんとする趣を陳べ、又之によりて葡王は艦隊を艤裝し、彼を以て指揮者として出發せしめ、彼は今多くの時日を費し、多くの危險を冒し、無窮の道程を經、波立騷ぐ海上に凡ての風に搖られ、終にこの長く憧憬せる港に着し、今や公式の謁見と勅諚とを拜するの異常なる光榮及恩寵を得たるを謝し、同時に葡萄牙王の名に於て次の如き同王の深切なる願意を敬みて奏上すと云へり。卽ち兩君主の間に確固たる平和と親厚なる交際とを取定むるのみならず、葡王及陛下の兩國民は絕えず通商貿易し、兩國民は同樣の利益幸福に霑はんとなり。

ザマリン友情をガマに示す

斯く陳べて稽首し、時宜に適へる態度を以て亞剌比亞、葡萄牙兩語を以て書かれたる國書と、多數の獻品とを捧呈せり。獻品は高價にはあらずと雖も新奇なるものにして、王は其中數件を殊に嘉納し、之に對して好意を表し、彼に示すに凡ての友誼を以てし、彼の願ふ所は何事も之を許すべしと約束せり。それより王は益々深く知らんと欲する念を起し、種々の質問を發して、葡王の風采其他を尋ね、更に又葡國につきて如何なる國なるか、何處に在るか、距離如何を訊ね、ガマの此地に至れる長途の航海中に起りし珍しき出來事を知りたしと希望して入興せり。此等の質問に對しガマは簡單にして巧妙なる談話をなせり。是も亦王の意に協ひしが、彼は國風に從ひて盛宴を張りて彼を寵異し、主客共に歡を盡して、ガマは退出せり。

此會商の風評は市中に弘布せしが、各種の市民は此噂につきて贊意を表したり。然れども唯サラセン商人のみは然らず。サラセン人は當時多數に此地に住し、此地より他國に向ひて盛に利益ある商業を營み居りしが、此事を聞きて甚しく苦惱し、葡人が彼等の間に侵入して彼等の富裕なる商業の一部を奪去らんことを憂ひたり。蓋し是れ彼等の產業に破壞を來すのみならず、兼ねて宗教に害を及すべく實に一大椿事たりしなり。

サラセン商人ガマをザマリンに讒す

彼等は利益を愛すると基督數を憎むとの二重の力より（基督教に對しては彼等は不俱戴天の敵意を挾めり）、翌朝彼等の中主だちたるもの集合し、葡人の嫌忌を惹起すやうなる演說を準備して王宮に至れり。彼等は直に引見せられしが、彼等の用務は其容貌態度に徵して事態重大なりと見えたり。彼等は恭しくザマリンに奏して云く、陛下を聊か驚かし奉りし彼の外來人の人物及狀況につきては唯彼等自身よりの外何等天聽に達し居らざるべけれど、實は彼等は其言ふ所の如きものにあらず、其語る所は悉皆虛僞のみ。彼等は漂浪せる海賊及剽盜の一團にして、彼等の行爲は明に人類社會の共同敵たり。又彼等の王は、若し王ありとせば、遙に西方に偏在せる一小國の君主に過ぎず。隣國に向ひて彼等は狹き版圖を擴大せんとするも爲し得ず、此等の暴虎憑河の無賴漢を到る處の海上に派出して、甜き言、惡辣なる詐

欺又は劍戟を以て爲し得る限りの鹵獲を爲さんとするものなり。若し陛下にして自由の通商貿易を彼等に允許せられんには、臣等は止むを得ず此の定住せるカリカットを去り、餘處に向ひて商業を求めざるを得ず。是れ陛下に利益ある所以の道に非ず。蓋し臣等は多年輸出入税及租税を納れたれば、國家は確實にして多額なる收入を得來りたれども、若し臣等にして一朝此地を引揚げんか、從前の如き利得を奉ることは出來ざるべしと說きたり。斯くの如くにして此事件は混亂を來したり。

マラバル人葡人を除かんと圖る　隱謀成らずしてガマ、マラバル人を難詰す

マラバル人は生來輕佻にして信賴すべからず。彼等は今やサラセン人の爲に斯くの如く說得せられたるのみならず、又動搖せる宮廷の影響及勸說を蒙るや、如何にして葡人を除くべきかの計畫を立て、彼等を全滅すべき謀を廻らしたり。然れども此計畫は實行せられざりき。かのチュニスの商人にして外人の眞友なるモンザイドは此計の根底を探査し、恐るべき陰謀を殘る所なくガマに告げたり。ガマは此危險には甚しく敏感にして、俄に潛に脫走して、以て今は疑ふ餘地無き破滅より自身及艦隊を救はんとせり。かくて帆を揚げて此信賴し得ざる港を去り、海を航する中に一隻の印度船のバンダラナに向ふに遭へり。同地はカリカットよりは安全なる港にして、國王が嘗てガマに停泊せよと勸告せし處なり。彼は此船に托してザマリンに書翰を送れり。其書中には彼が危險に迫られて港を去りて海に出でたること、陰謀を企つる者ありて、彼の生命を奪ふのみならず、兼ねて船を拿捕し、所有品一切を鹵獲せんとせしこと、又人ありて以前には葡人に恩典を賜ひし陛下の聰明をば虛僞讒謗の流言を以て蔽ひしこと、彼は今後商業を行はぬこと、又は斯くの如き反覆常無く信用し難き人民と交涉するの意なきこと、故に彼が海岸に殘しし物品は直に船中に送附ありたく、今後陛下又は他の人々に迷惑を掛くまじきことを委曲に陳述せり。

之に對してザマリンは辯解の言を以て彼の腐敗せる官人及從者に罪を轉嫁し、彼等をば既に鞫問して相當の刑罰に處したりと答へたり。

然れども此辯解ありしに拘らず、何の辨償も無かりき。貨物は沒收せられて國王の使用に供せられたれば、ガマは憤怒甚しく、報復手段に訴へて損害を償はんと欲し、たまたまカリカットに向はんとするマラバルの船を捕獲せしが、此船中には六人の上流者ありき。王は此等の人々の放免を受けんが爲に、ガマが殘留せる貨物を舊主に返付し、葡王の書信に對する答書をも送り來れり。

爾時チュニスの商人モンザイデは彼の葡人に對する好意の發見せられたるを以て、市を脫走して(死罪及財產の沒收は免るべからずと思ひたれば)葡船に投じ、其身の安全を圖れり。ガマは彼を丁寧に待遇し、後リスボンに伴ひたり。リスボンに於ては改宗受洗して基督教徒となり、多年の間相當の尊敬を受け、良好なる狀態にて餘生を同地に送りたり。

然るにザマリンは斯くの如く貨物を捕虜と交換して降伏せざるべからざるに至り、爰に汚名を流ししが、彼の偉大なる絕對的權力に反抗するものは唯三隻の船に過ぎざりしを非常なる恥辱として、其儘に在るを好まず。但し彼の海軍は其一部分を以てしても彼の主張を擁護するに足れど、當時は例年の暴風の故に軍艦は海岸に引揚げられ、急に之を引卸すは不可能事に屬したり。然るに彼は驚くべき巧智を以て六十隻の船に强健熟練なる兵士を載せ、凡ての葡船を破壞沈沒すべしと命じたり。

ガマ葡國に歸る

土人はガマの逃れしを追跡し、各一隻に二十隻の割合を以て彼の船側に殺到し來りしが、神意の有難さは暴風を以て

彼に保護を加へしかば、之によりて戰鬪は解散せられ、彼等は敗北を取り、而も危險を冒して不名譽にも歸陣せざるべからざることになれり。ガマは危險域外に出でてカリカットの戰を逃れ、直に故鄕に向ひて進航せり。此くて二年有餘を費して航海を終へ、一四九九年を以てリスボンの港に碇泊せし時は、彼は大歡喜を以て迎へられしが、彼は實に不撓の勇氣を以て急迫せる危險を冒し、さしも願はれたる東印度への水路を發見したる第一人者として永久の名聲と榮譽とを得たり。

カブラレスの遠征

ガマが歸國の後、王は彼より東印度遠征によりて得べき利益に關する十分なる報告に接して、大に心を强くせしかば、爰に十三隻の船艦を艤裝し、千五百人の海員と五百人の兵士を載せ、ペドロ・アルヴァロ・カブラレスをして之が指揮に當らしめ、カリカット王と修好親睦の同盟を如何にしても締結し、商品の市場を設くる爲に其地に城砦を自由に築き得る允許を得べき嚴命を下し、若し國王にして之を拒絶するか又は說伏し得ざる時には、武力に訴へて之を强請すべしと云へり。指揮官カブラレスは此くの如き命令と委任とを受け、艦隊を率ゐてリスボン港を出發し、ガマの取りたると同樣の航路を取りてセントヂェームス島に達せり。次で彼は尙西方に向ひ、終に未知の海岸に着せり。彼は之をホーリー・クロッスランドと命名せり。是れ後にブラジルと稱せらるる地なり。彼は此地に上陸し、地味豐饒なるを見て城砦を建て、ガスパル・レミウスを葡國に還して、エマヌエル王に此新發見を奏上せしめたり。而して彼の起したる新土王の責任を艦隊中より選出せる數人に委任して、之を維持すべき必要品を殘し、カリカットの方へ進路を取りたり。然るに彼は途中暴風に遭ひて、船四隻を失ひしが、それより以上の大なる損害を受けずして免れたるを喜び、直にカリカットに向ひて航進し、後久しからずして同地に到着せり。

ザマリンは彼を待遇すること不信實なりしかば、彼等は抗議を提出せり。然れども、カブラレスの措置宜しきを得て、ザマリンをして彼の損害の二倍を償はしめたり。斯くて僅少の成功を齎して歸途に就き、一五〇一年リスボンに到着せり。

ノヴィウスの遠征

同年エマヌエル王は事業を遂行せんと欲して、更に三隻の船を派出して、ヨハネス・ノヴィウスをして其指揮に任ぜしめたり。彼は歸國の途に在るカブラレスに逢ひしが、カリカットのザマリンの輕佻にして反覆常なき行動を語るを聞き、全く絕望して、彼の努力も無效ならんと想像し、彼と共に歸りしかば、此遠征は終に何等の效果をも齎らさざりき。

其後の葡王の企畫

此かる困難ありて銳氣を沮喪せしめ、財庫は愈〻缺乏を訴へ、彼の努力は成功を齎さず、恰も唯無效なる希望を養ふに過ぎざるが如きにも拘らず、王は聊も之に屈したる色無く、愈〻奮鬪的意氣を以て進み、翌年再びヴァスケス・デ・ガマに船十隻を附して派遣せり。王は以爲へらく、彼の經驗ある指揮により好運を得て、終に事件の總てを良好なる局面に向くるならんと。然るに彼も亦前者に比して好成績を收むるまでに至らずして歸れり。然れども王は尙續行して中折せず、ヴィンセント・ソデリオ、次にはステファノ・ガマ、次にはアルフォンス及フランシスコ・アルブケルケ、其後にはグンヂッサロ・ケーリオに數艦隊を附して出發せしめしが、出費の莫大なるにも拘らず、悉く僅少の利獲を得たるに過ぎざりき。

葡王の奇計

然れども、王は終に此重要なる事件の重荷は唯彼及僅少の貴族の肩上に在るのみにて、商人及私人の貿易商、一般の人民は全く之と交渉無く、又彼等は當時に於ても亦何れの時に於ても財力其他の點に於て、之に關係するを好まざるが如きを知るや、爰に一手段を工夫せり。そは國民が生來迷信深く、豫言及其他將來の事件に係る愚劣なる言に傾聽するを奇貨とせる一の詭計にして、全國民少くとも富者の心を奪はん爲に、全く新機軸にて巧妙至極なる係蹄を用ひしものなり。その所施次の如し。

ヘルミクス・カヤヴスは當時の碩學にして有名なる詩人なりき。詩才に富みたるのみならず、祕計を行ふに巧にして、又信賴すべき人なりき。エマヌエル王は密に此人を用ひたり。彼等は協議の後、王の口授せる所を詩人は書取り、次で閑暇の時を以て之を詩に作り、全部を古代文字を以て三個の石に刻せしめ、其成るやロハ・デシントラ海角（Cape Rocha Decintra）に近き海岸に埋沒し、エマヌエル王の命令を發するまで放置せしめたり。さて發掘の日の指定せらるるや、ヘルミクスは王の事業を一層良好に實施せんが爲に、多くの友人、身分ある人、近傍に居住せし人等を彼の別墅に招きて饗宴を催せり。此處にて人々は皿を換へ盃を倒して快哉を叫び居る中に、豫て彼が命令を下しおける一人彼に珍らしき報告を傳へ來れり。其旨趣は彼は新なる壁を作る爲に石を掘出さんとして、三個の石を發見せしが、その上には銘文あり。彼及現地に在りし者は何人も其一語をだに領解するを得ず、定めて何か不可思議の意義あるものなるべしと云ふにあり。之を聽くや會衆は盡く席を立ちて宴席を離れ、直に現場に赴きてかの大理石を熟視せり。凡ての人は知られざる文字を嘆異するのみにて、その表題を解するものも無かりしが、その腐蝕して殆ど磨滅せる文字の樣によりて此地に埋沒せること多年なりしに相違なしと判定せり。此風評は近傍到る處に流布し、終に大なる驚異を以て王の耳に入るに至れり。然るに王は此語を傳奏せる者よりも一層不可思議に思ふ樣態を示ししが、頗る熱心に其何の意義たるを知らんとして、直に大理石を宮中に移さしむるやう命じたり。王は之を見て非常に驚き、多くの苦心と長き時間とを費して之を讀み、且筆寫せしめたるが、是れシビルの豫言にして其意味は次の如くなりき。

シビルは西海岸に歡喜あることを豫言す、

文字を滿面に刻せる石の見出されん時。

嗚呼西方よ、汝が東方の富を見る時、

ガンジス、インヴス、タグスは賞嘆者たるべし。

凡ての地は開かれ、商業は昌ふべし、

日の出沒する處に、月の盈虧する處に。

王は之を神聖なる遺物として寶庫に藏せしめ、且宣明して曰く、之を保存することはパラヂウムのトロイに於けるが如く、國民の安全、善及利益を意味し、葡人は最も西端の國民なれば、其戰勝によりて終に遙なる東印度を支配するに至るべしと。

世人術中に落つ

此珍らしき發見は葡國全土に傳はりしのみならず、凡ての基督教國を通じて茶話以上のものとなれり。而して銘文は何れの地にも傳寫せられ、各國語に反譯せられ、多數の博學なる註釋家は之を說明し、葡國人のみが其事業をなすの運命を負へりといへる同一の決論を與へたり。

此詭計によりて國民は耳目を開かれたり。近くヴァスコが善く開始せる大計畫を盛に實行するときは、王及全王國の享有すべき利益の如何なるものなるべきかを正當に理解するに至れり。此計畫を遂行すれば、彼等は征略によりて廣

大なる而も未だ知られざる東洋の國土の司宰者たるを得べきを疑はざりき。

此迷信的の手段により、事業は四方に向ひて進行し、凡ての人は爭ひて第一線に立たんことを努め、計畫を實行せんが爲に各人の資本を合同せんとせり。之に依りて葡人は先づゴアを略取することを得、此處に市場を定めて、是より各地に進出して多くの足場を得、戰勝によりて許多の地の君主となり、其處より巨額の財寶を持歸り、又我が日本にも最初の貿易を行へり。

西方の冒險

吾人は茲に葡人の東印度に於ける航海及發見を暫く擱きて、西方米國に向ひて冒險を試みたる他の航海者につきて探究するは誤に非ざるべし。吾人が先に述べたるアメリクスに次ぎてはヴァスコ・ヌンノ・バルボアあり。强健老練なる船長にして、一五一三年コロムブスの發見に附加して、先づメキシコ灣の海峽をノムブル・ド・ヂオスとパナマとの間に見出し、又(海峽を過ぎて)東西兩印度に境する大なる南海を見出せり。

ヘルナンド・コルチス墨西哥を略す

之に次ぎてヘルナンド・コルチスあり。彼は航海者たるのみならず、亦征服者たりき。艦隊を率ゐてメキシコに上陸し、僅少の西班牙人、クラックスカラン人、土人及メキシコに深怨を抱ける敵の援助を得て、一五二〇年西班牙王の爲に數百萬の人口を有する彪大なる帝國を征服し、廣大なるメキシコ市に入り、モンテズマ皇帝を其皇居に於て捕虜とせり。然れども此行動につきたる非常の光榮と此大なる征服の名譽とを彼は長く享有し得ざりき。何となれば彼の希望及勇氣の頂上に在る時、彼はたま〳〵暴動せる西班牙人を鎭靜せんとして、窗外を見てありしに、一箇の石彼の身に命中し、負傷は致命傷といふにても無かりしが、後久しからずして死したればなり。

フランシスコ・ピサロ祕露を略す

五年の後フランシスコ・ピサロと云へる航海者兼征服者は第二の帝國をチャールス第二世の爲に得たり。是をペリューの大國とす。但し速に此帝國の君主となり得たるには非ず、此大事業を完成するには實に六年を要し、終に國王アタバリクサを捕虜とせり。葡王は彼を善くも待遇せざりしかど、天地創造後一回の戰利品としては未だ曾て聞かざる程の巨額の財寶を獲得せり。何となれば宮中の調度は食器置場、庖厨より王の食卓に至るまで皆黃金を以て作成せられたればなり。之が爲に微賤の一兵卒に至るまで九千ヂュカットより少からざる配分を得たり。

ピサロの暴富

此時ピサロの得分は頗る巨額にして、算術の計算を以てしては其數を示し得ず、其收入は之を經濟的に利用すれば、世界の最富者となるに堪へたり。而して若し彼にして之を欲しなば、新皇帝となるも亦容易なりしならんが、彼は新に獲得したる巨富の大部を彼の主なる僚友且股肱として最も信賴せしアルマグロといふ者に詐取せられたり。

西班牙人相殺す

アルマグロの大詐謀は其儘祕密となしおかれざりき。ピサロ詐取の次第を悉く知るや、從前の兩親友の間の反目甚しく、好愛は憎惡と變じ、互に敵となりて相警戒せり。此黨派の紛爭と動亂との中に、フランシスコ・ピサロの兄弟フェルヂナンドは隱謀を企て、突然アルマグロを襲ひしが、アルマグロは防禦を爲すに遑あらずして殺戮に遭へり。然るにアルマグロの一子にして印度婦人の出なるヂエゴといへるもの、復讐の念を禁ぜず、大膽なる刺客の如く陰密なる手段に出でゝ、白晝フランシスコ・ピサロの家に闖入して、友人の中に交りて在りし彼を殺せしが、ピサロの同胞コンサルヴェスは其後直にヂエゴを殺せり。次でコンサルヴェスは諸人に號令して君主チャールス五世を見捨てしめ、自ら統

治權を掌握せり。されども彼は長く之を有するを得ざりき。何ごなれば皇帝の公正なる權力はベーテル・ガスカこいふもの之を謹直に奉行して、不正なる基礎の上に立てる政府を顚覆したればなり。是れ正道は想像的にして且簒奪に成れる王權の上に勝利を得たりと謂ふべし。斯くて簒奪者は敗北して皇帝は其位に復せり。

西葡兩國の利權爭ひ

カスチル及葡萄牙が一は東洋に、他は西印度に、各數多新獲の利益を追ひて、領土を擴張せしかば、兩國は終に衝突して、交渉を開くに至れり。葡萄牙人は西班牙が西方より持歸りたる豐にして大なる利益を嫉視し、西班牙人は之に對して葡萄牙人が東洋より持歸れる香料の新にして大なる貿易を羨みたり。此香料は凡ての基督教國に盛に供給せられ、彼等の黃金よりも少からざる利益を得たるべしと想像せられたれば、兩國は爰に互に爭ふこゝとなり、其間の調和を望むこゝは甚だ難かりき。

葡萄牙は凡ての新發見を我物として要求せしが、其言ふ所は斯くの如き冒險に榛莽を闢きて路を作りしは自國なりと云ふに在り。獨り東洋に於けるのみならず西印度にて發見せられし總ての土地に對しても、法王エウゼニウス第四世の授與して全高僧會の署名せる委任狀及特許狀によりて要求する所ありき。

然れども西班牙は之に對抗して、法王アレキサンダー六世の親署せる書類を提出せり。此書中に法王は西王の力に藉りて多くの未知の國に福音を弘布し得んとの希望の下に、ヴェルド岬以西に在る凡ての國を與ふることを明言せり。此地は亞非利加の本土に在りてヘスペリデス群島の子午線に在り。而して法王は一方、東及南に於ける諸地方を葡王に與へたり。是れ其當を缺きたることにはあらず。如何ごなれば葡人の事業は其方面に在りたればなり。蓋し兩者は曾て同一の地方を領有したるこゝあるなり。

是に於て爭議は羅馬の宮廷に於て裁決せらるるこゝとなり、結局カスチルは今後東洋の事に干涉すべからず、又葡萄牙は西方の發見に干涉すべからずと決せられしが、兩國は之に同意して該命令を遵奉するに至りぬ。

フェルヂナンド・マゼラヌス世界を周航す

フェルヂナンド・マゼラヌスは久しくアルフォンソ・アルブケルケに仕へて東印度の遠征に從事したる者なるが、彼の豫期せし程の報酬を得ざりしかば、エマヌエル王に對して私に怨を抱き居りしが、終にチャールス第五世に奉仕を申出で、同皇帝に奏するやう、若し皇帝にして幸に己を用ひ給はば、法王の委任を聊も破ること無くして、西方に航してモラッカ島を發見し、且皇帝をして香料及黃金兩世界の絕對的君主たらしめんと云へり。

チャールスは斯くの如き貿易の巨利を思ひ、且は此手段によりて葡人より年々の收入を奪ひて彼等の商業を衰へさすべきこゝを思ひ、此提言を納れて一五一九年五隻の堅艦を附して出發せしめたり。此等の船は皆新しき遠征に長く堪ふべきものなりき。彼はシヴィルを發して先づ針路をブラジルの方向に取り、是より海岸に沿ひて終に南緯五十三度に達せり。此地にて彼は海峽を發見せしが、是れ彼の名を取りてマゼラン海峽と稱せらるるものなり。此海峽の口に於て一隻の船は岩に當りて沈沒し、他の一隻は疲勞の餘航海を厭ひ、夜に乘じて潛に逃れ、直にシヴィルに歸りたり。

マゼラヌスの遭害　死を脫せる部下の消息

然れども マゼラヌスは多くの困難を排して此未知の海峽を通過し、終に大なる南方の海洋に出でたり。此處にて險惡なる天候に惱まされ、漸くスブス島に來りしが、彼及數人の高級士官は爰に上陸し、土人に誘はれて深く內地に入り款待を受けんとせり。此くて土人は好機會を得るや豫期の饗宴は忽ち血腥き夜會に變じ、快飲豪興裡に彼等は悉く蠻人の毒手に罹りて死せり。

辛くも殺戮を免れたる少數者は三隻の船を操るに十分ならざるを以て、止むを得ず最悲の一隻を燒棄し、其豫企したる航海をモラッカ島に向ひて續け、此地に於てテドルの前に碇泊し、彼等の久しく索めたりし香料を積込みたり。彼等は此地より歸國の途に上りしが、一隻の船は漏水甚しくなり、彼等が最大の努力も之を救ふを得ず、さしも高價なる全船貨と共に直に沈沒せり。此くて出發の節は意氣揚々たりし五隻の中、僅に還ることを得たるは一隻のみ（而も損所多し）。此一隻は三年の長日月を重ねて久しき期待の後に、汚れ損じたる香料の少許を積みてシヴィルに入港せり。然れども西方の航路に先鞭を着け、世界を周航せし船長及船艦の名は之を記錄するの價あり。船長はジョン・セバスチアン・ラノと云へるビスケー人にして、船はヴィクトリーと稱せられき。

日本の最初の住民

さて今は我等が目的とする日本の記事に立歸るべし。少數の漂流民の此地に於ける殖民に關しては、前に言及し置きしが、是より一層詳細に陳ぶべし。

日本人の繁殖せしは初は支那よりの殖民によれるものにて、彼等自身の語るが如く、今より約七百年前の大陰謀及叛亂に緒を開けり。

爰に豪勢なる一大臣あり、名族と相結びて君主の如き權力を有し、萬般の政事を心の儘に行ひたりしが、一方に皇帝の在るを忌み、己自ら唯一全權の君主となるに非ずんば不幸不滿と考へぬ。其大望は自身の地位を高めんと欲する多數の彼の一族親緣によりて愈〻醞釀せられ、終に彼等は陰密にして惡むべき、されども實行し難き企畫をなしたり。卽ち皇帝を殺害するのみならず、樞密官及其他の勢力家にして彼に從はざる者又は彼の現在の權力及增上し行く威望を忌む所行ある凡ての人を除かんとするに在り。彼等の此忌はしき計畫は祕密裡に進行し、而も其內容を打明けられたる者は多からざりしに拘らず、端無く露顯せんとせり。是に於て爾後密謀によりて事を進むること不可能となりしかば、俄然一擧して功を收むる爲に兵士を集むるに決し、それには奸曲なる計畫の上に美しき假面を被せ、暗黑なる主張の意義を體裁好く繕はざるべからざることとなり、仍りて彼等は先づ恐怖及嫉妬と云へる大猛狗を放ちて顧問官を懾誣し、しか〳〵なるが故に彼等は自ら警戒するの要ありて所謂自衞的武器を執るに至れるなりと言做せり。同時に皇帝派も亦自己の安全に對して猶豫するを得ず、此新編制の民軍に對抗するの準備をなせり。斯くして陰謀は大叛亂となり、全帝國は長き內亂に曝せられ、大戰鬪は一勝一敗を以て戰はれしが、終に天運正しき方に幸し、皇帝は勝利を得て、從前よりも一層獨裁的となれり。皇帝は正當なる憤怒に激成せられしかば、叛臣等に苦痛を與へて、敢て君主の咽喉に飛付かんとする者の鑑戒たらしめんと欲したり。先づ嚴酷なる宣言を下して、煽動者にもあれ或は實際武力を取りたるものにもあれ、悉く之を發見して處分の法を講ぜしかば、全帝國は此峻嚴なる命令を實行するが爲に流血と殺戮との一大屠場と化せんとせり。皇帝の稍穩和なる顧問官等の中には危險の迫れる親族を有する者もありて、其處刑に罹らんとするを見るや、皇帝に懇願し、慈悲を以て彼の正當なる宣告を緩和し、叛逆者の生命を赦して國境外に放逐し、朝鮮對岸の荒凉たる島嶼に餘生を送らしむることにせられたしと乞へり。此請願は聽許せられしを以て、謀叛人は同地に送られたり。此くて前述の如く少數の不平なる流謫者より小殖民地は起りしが、時日の進行と共に成長して、今日にては有名にして堂々恐るべき一帝國となり、支那と競爭し得るに至り、名を日本と稱せり。

此物語の眞否如何は確定し難しと雖も、彼等が支那の一殖民地たることは、支那の國語及性質の多くが彼等の間に殘存せるによりて察すべし。而して此傳說はその實否如何に拘らず、支那に對して調和すべからざる反抗を牽起し、彼等は支那人を以て彼等の鄕國より彼等を正なくも追放し、權利、土地及所有物を奪ひたる國民とし、よりて深怨を懷けり。斯く

の如く古來の怨恨は今日までも繼續し、彼等は凡ての機會に於て支那の海岸を襲擊し、火と劍及各種の敵對行爲を以て內地に侵入せり。又彼等は支那の習慣風俗を嫌惡すること甚しく、彼等の行爲が支那人のそれに似ることを好まざるのみならず、寧ろ奇怪至極なる動作を同胞に敎へ込みて、他の凡ての世界人類にも類せざる程のものたらしめたり。

日本人の風習　他國人との相違の著き點

第一、支那人及多くの國民は挨拶するに當りて頭を露し、或は身體を屈し、右手を以て握手し、或は抱擁するを常とす。然るに日本人は彫像の如く屹立して不動硬直なり。而して彼等は頭を露す代りに不承々々に靴を脫す。支那人及其他の國人は室內に入るに際し在室者に敬意を表する爲に起立するを常とすれども、日本人は全く之に反して下座す。支那人及他國民は外出にはフロークコート、マンテルの如き上衣を着用すれども、日本人は脫衣し、Duerpo を衣て步行し、屋內に入るに及びて寬き禮服を着す。吾人は光澤ある髮、白き齒を尊ぶに反して、彼等は黑玉の如き結髮、及黑き齒(兩つながら人工を以て此くす)を以て粧飾至極とし、美の主なる目標なりとす。凡ての國民の一致する所にては、步行、座席ともに右方を以て優位とし名譽の位置となせども、彼等はその優位を左方に與ふ。黑衣を着することは彼等に在りては勝利と歡喜とを表示すれど、他國に於ては忌服、悲哀の服裝なり。而して白衣は彼等に取りては損失及不幸の衣服たり。彼等の婦人は外出に際して婢及娘をして前行せしむ。之に反して吾人の婢及娘は主人に隨行す。而して他國の婦人は胎兒ある時はそれに成長の自由を與ふる爲に衣を緩むるに反し、日本の婦人は膨れたる胴を强く壓して帶を卷き、胎兒を一層狹き範圍に拘束す。是れ此くすれば安產をなし得べしと想像すればなり。而して懷妊せざる時は却て身體を開濶して自由ならしむ。我國の婦人に在りては大に引締め、成し得べくは以前の恰好と痩形とを恢復せんとす。

出產の後には彼等は小兒を暖なる衣服にて包まんとはせずして、强健にする爲に之を冷水中に投じ、又母には滋味ある肉汁類を與へて疲勞後を養はんとせずして却て斷食せしめ、出產後良〻久しき時を經るまでは、著しき滋養物を攝取するを許さず。

食事の風も吾人のとは反對なり。卽ち吾人は一家の食卓に友人又は未知の人あることを喜び、少くとも親族なごの共に卓に就くことを許し、單獨に食事をするを好まざるに、日本人は之に反して各自特殊の食卓を有し、不愛想の貌して食事をなすことなり。卓膳に上る食物も貧弱にて分量も僅少を以て滿足す。

茶に對する嗜好

彼等の飮料は米より調製したるものにして、その强さといひ香味といひ、葡萄酒に類するものにて、彼等の之を用ふる樣も亦葡萄酒の如し。而も之を多量に取ることあり。然れども朝の飮物として食事後の胃を閉づる料としては、此時ばかり支那の風習に從ひて茶を飮む。是れ精神を爽快ならしめ、且大食の後胃より上り來る瓦斯を壓ふるの效あるものとす。

日本の所在及四圍

日本帝國卽ち日本島は一箇の島に非ずして多數の島なり。是れ明に海に濱する部分を見て知らるることなり。海岸は多くの入江によりて中絕せる處ありて、恰も破れたる壁障の如くに立ち、高地より落下せる淡水の河川の作れる多數の瀧は紛糾交錯して海陸の間に無數の小島群をなす。その水の過多なるより雲狀の蒸氣立騰り、諸種の騷しき天候を生ぜしむ。卽ち突風、寒雨、霰、霜、雪等なり。然れども此等の變化は空氣と調節し、暑熱の氣候の下に在りても過度の炎熱を來すこと無し。此國は經度百五十七度より百七十度半に廣がり、北緯三十度より三十七度に跨る。長さは八

百十英哩、幅は四百八英哩なり。

其東岸のみ太洋に面す。南は南海の方に横はり、巨大且多數の島嶼碁布して、新なる多島海をなす。西方は海を隔て支那帝國に對す。西北は遠き距離を以て韃靼を望む。北はペゾ（Petso）に境し、唯一箇の入江によりて隔てらる。此入江三十英哩に上らざる處にて極り、玆に兩陸地は連結して水の進行を塞ぎ、一の大陸をなせり。此大陸を横ぎりたるは日本エムペロルへの使節フランシス・カイロン（Francis Cairon）にして、東北に帝都江戸を有する關東の地より旅行し、二十七日間を費してスンガル（Sungua津輕）の王國の極端なる海角に到着し、此地に於て灣を越えて蝦夷（Jesso）の國に來れり。蝦夷は荒涼にして山岳重疊の地なれども、貴重高價なる毛皮に富めり。日本人は屢〻深く其内地に冒險したれども、其極を發見するを得ず。エムペロルも亦之に關する知識を得んが爲に頗る努力せり。蓋しエムペロルは彼の領土が何處まで廣がれるかを視察發見する目的を以て人を派遣し、彼等の爲の必要品を給するのみならず、何によらず此の如き困難なる遠征を拂らしめ且容易ならしむべきものを供給せり。

然れども此等の人は荒涼無人の地を久しく探りて遠く旅行し、或時は嶮峻なる阪路を辿り、或時は驚くべき懸崖にさしかゝり、幾多の辛苦を嘗めたれども、凡て無效に終り、その窮極する所を知るを得ず、唯むさくろしき多鬚多毛の野蠻人の少許を見しのみ。

蝦夷人其住地の廣狹を知らず

此等の人間こいはんよりも動物の如き人民は蝦夷國に關し又彼等の住居せる土地につきて何事の陳述をなす能はざりき。よりて案ずるに蝦夷と日本とは一の大陸を成すことは明なり。然れども蝦夷が如何に遙に北方に廣がり、又兩者が一箇の島をなすや否やは何人も之を吾人に告げざりき。

初めて日本に航行せし人は誰なるか

我が歐洲の航海者中何人が初めて此地を發見せしかは確實ならず。

或人の語る所によれば、險惡なる天候に厄せられし一葡船は特別の進路を執る心も無く、一五三九年（天文八年）偶然日本の海岸に吹流されたりこいふ。されども船名、船長、船主、又は他の詳細に亙りて言ふ所無ければ、吾人は此談をば只一つの物語として一笑に附し、最初の發見の名譽を與ふるに十分の典據ありこはせざるなり。

一五四二年の事こする者多し

然れどもヨアンネス・ペトルス・マフェウス及ヤコブス・ツアス兩人がアントニウス・グルアヌスの記錄中より證明せるこことは一層信用すべきものなり。即ちアントニウス・モタ、フランシスコ・ザイモット、及アントニオ・ペゾットがドドラ（Dodra）より支那に至る航海中、目的の航路を取る能はず、間斷なき暴風の爲に日本の領内に吹流されし事こす。而して此は一五四二年、葡王がアルフォンソ・ソソに全權を委ね、副王こして臥亞を支配する爲に派遣せし年なるが故に、一層記憶すべしこなす。然るに其後久しからずして葡人は多くの事故及冒險によりて好き足場を獲、盛に其地に貿易を行ひたり。その間に最も注意すべきは下の一件なり。

葡人は如何して日本に入込みしか

日本の一青年、暴戾なる君主の虐待を恐れ居たるが、或時慘刑に處せられんこことを豫期して脫走し、僧院に入りて潛伏せしに、其處にて宗教上首位の階級を得たり。猶も恐るべき君主の目を避けて陰に身を保ち居たる間、偶〻アルヴァリウス・ヴァジウスの指揮せる葡船此處に寄港せり。ヴァジウスは上陸し、新奇なるものを見んこして此僧院に來り、此處彼處を見廻して想像を養ひ居りしに、一青年あり。哀訴するが如き態度を以て、彼を脅威しつつある危險より其身

を救ふ爲に新着の船に乘らしめよとの事を身振もて告げたり。ヴァジウスは彼に同情し、青年を伴ひて其地を去るべき方法を案出し、其夜は船に伴ひ歸れり。然るに其處にては青年も安全ならず、彼自身も亦同じく不安なりと思ふや、該青年をして彼の近傍にありて同夜出帆すべき一商船に乘らしめたり。商船は卽夜出發して、彼をマラッカに運去れり。該船は船貨を積みて同地に行かんとするものなりしなり。日本青年は航海中、葡人の禮拜する方法を見、又日々の勤行に於ける禮拜の歌を聞きしが爲にや、或は神意に動かされしにや、葡人等と齊しき熱心なる基督教信者たらんことを希ひたり。是に於て船主は其意をマラッカ在住の神父等に通じて洗禮を受けしめんとせり。然るに神父等は體よく之を拒絶し、其名譽は當時臥亞に在住せる監督ヨハネス・アルブケルケに屬する趣を陳べたり。是に於て彼は同地に移され、禮拜式の後儼然たる作法を以て全會衆の前に於て受洗し、アウゲル (Auger) の日本名を變じてポールと命名せられたり。

ポールは今や葡語に熟達し、フランシス・サヴェリウス (Francis Xaverius)、コスモ・ツルレンシス (Cosmo Turrensis)、ヨハンネス・フェルナンデス (Johannes Fernandes) なる伝へるエズイト派の人に自國の情況を詳述せり。是に於て彼等は心を强うし、先づマラッカに向ひて出帆し、同地より更に日本に向ひて同樣の教役に從はんと企てたり。

サヴェリスの日本に渡航の書翰

マラッカに到着せし彼等は一の支那船に逢へり。彼等は之と約束して彼等を日本に送らしめたり。凡て此等の經過はクルヴェリウス (Cluverius) がコニムブリカ (Conimbrica) に在る彼等の會員中に書翰を以て報告し、且又彼等は日本と貿易せるマラッカ在住の葡國商人の報道によりて、日本には基督教の種子既に彼等の會員によりて蒔かれ、而も其は不思議にして驚くべき方法を以て爲され居ることを知りて大に氣を得たる由を報ぜり。

其報告の中に曰く、

數名の葡國神父は偶然如何にしてか日本に到着せしに、一人の日本侯伯は彼等に對して慇懃の態度を粧ひて種々の好待遇をなし、就中莊麗にして整備せる宿處を供給し、夜に入らば彼等は此家に宿泊せんことを豫期し居たり。然るに光景は倏忽にして一變し、彼等は怖しき幽靈及異常の妖怪に襲はれ、鐵鎖、腰掛、及枕の耳邊を飛廻る音すさまじく、彼等の衣服は引裂かれて身體より奪ひ去られ、彼等自身も同じく寸斷せらるべきかと思へり。凡て彼等の驅魔の呪文及祈禱も之に勝つの效無きを見るや、彼等は最後の避難法を索めて十字架の形を畫くことを始め、壁又は柱の上に頻に之を刻みつけしが、斯くする中に俄に四圍は靜肅に歸し、かの怖るべき現象は消滅し、當夜の其後は何等の騷がしきことも無く、翌朝まで安眠することを得たり。此話市中に弘まりて、爾後幾夜を經ても復び怪異を見聞せざるに及びて、全市民は皆進みて基督教に歸依し、其信仰の表徵として、又彼等の住宅より同樣の惡魔を拂除く爲に、彼等の家屋の壁や柱や、其他何れの處にも十字架を刻せるを見るに至れりと。是れ彼等の報告する所なり。

サヴェリウスの日本渡航　支那船主の船神像　サヴェリウスの日本上陸

さて再びサヴェリウスの話に返りて、支那への航海に彼を導くべし。上に記したる支那船は屢〻島嶼の間に出入して時日を遷延せり。船主は其航路に進むを欲せず、又迷信甚だ深く、ともすれば彼の神を拜し居れり。此神といふは船尾に立てられたる木像にして、彼は航路に關し又は其他決定せんと欲することを議せんとする時、之に供物をなし、伽羅及乳香を以て像を薫らし、多數の蠟燭に點火し、鳥及他の消化し易き肉類の數皿を供ふ。神は之を食ふにはあらざれども、其像の容貌に現ずる表象を見て、後の成功如何を知るの便とせり。是れ偶然の運に任せたる他の事に於けるが如く、時には正しきことあり、又否ざることあり。然れども此によりて刺戟せられたる彼は此木像の神の垂訓に從ひ、

且自身にも本國に歸らんとするの意志ありしかば、サヴェリウス其他の神父に對して勸說頗る力めたれば、サヴェリウス等も長く海上に在るに疲れて之を承認し、一同支那に於て休養し、然る後更に目的の航路を完うせんとすることに一決せり。是に於て船長は彼等の議定によりて直に廣東に向ひ進航せしが、風位は一層隔たれる港にして船主の住居せるチンチェルに向ふに順なりしかば、彼等も之に贊意を表し、船主は直に其地に向ひて進行し、到着の上は皆其地に於て冬籠せんと欲したり。斯くて彼等は航行して終に交趾に近づきしに、此地にて目的の港は海賊の爲に占領せられしを聞くや、風は廣東に引返すに便ならざるを以て、今や船主に取りては冬期を日本に送るの外に途無きこととなりたれば、彼等は順風に乘じて間もなく鹿兒島に着せり。鹿兒島は卽ち若きボールの出生し居住し、且二年前暴虐なる君主の手より脫走せし地なり。サヴェリウス及他の神父は一五四九年八月十五日といふに此地に上陸し、青年ボールの父母親戚より款待せられたり。

羅馬カトリック宗に改宗せる一日本人の印度所見談

青年ボールは本國の邪宗的偶像敎を捨てたれども、父母親戚は彼に對して大に敬意を表せり。何となれば彼は今や大旅行家にして、外國に於て觀察したる驚くべき新奇の事を語り得と考へたればなり。彼を訪へる人は何れも忙しげに諸種の質問を發する有樣にて、爲に全市は其話を以て持切り、終に薩摩王の耳に入るに至れり。王は之を聽きて小事件にあらずとし、かの若き旅行家に謁を命じ、王自ら質問を發して、何處に在りしか、何を見たるかを調べたれば、青年は卽座に之に對して腹藏なく下記の事實を語りたり。卽ち彼は印度に行きしが、此地には有力にして勇武なる葡萄牙人西歐の極端より來り、戰勝によりて數箇國を征服し、印度の中央に於て廣大富有なる殖民地に自國人を定住せしめ、以て東洋の海岸に在る諸國民に取りて唯一の大敵たらしめたり。又彼等が許諾を得又は劍戟によりて殖民せるマラッカ及臥亞の國は、豐饒にして人口多き地にして、その數種の產物は葡人の爲に全東方世界に於ける豐富なる商品となりしことを答へたり。次に王は彼と共に上陸せる人は何者なるかと問ひしに、彼は速に劃切なる答をなして曰く、彼等も亦葡人なるが、神聖なる宗敎上の職務に在る者にして、溫順、熱心、摯實の模範を示し、時には不可思議なる奇蹟の助を假りて人を信仰に入らしむることゝ、俗人が武力に訴へて人の身體及國家を服從せしむるより速なりと云へり。

是に於て神父等は王に謁見したるが、王は初には彼等と佛僧(bonzy)及彼等の派の他の者との論爭に公平無私に耳を傾けたり。但し其結果及福音を維持する爲にサヴェリウスの行ひたる奇蹟並に其兄弟の多くが次で行ひたる奇蹟又彼等及其聖職者の受けたる迫害等につきては隨時日本より發したるエズイト書簡に十分に記載せられ、里昂、ルーヴァン、デリンゲン及コレンなる彼等の學校の命令によりて出版せられたり。之に關しては更に下條に說く所あらん。

フランシス・ベイスの長崎渡航

然れども、サヴェリウス、コスムス、ツルレンシス、其他が屢〻日本に向ひて爲せる航海以外に、船長フランシス・ベイス(Francis Pais)のデ・サンクタクルイズ號にて媽港より一五八八年に行ひたる航海も亦有名なり。彼は其狀を語りて次の如く云へり。

吾等はラントンの海峽を通過して航行せしが、此處は六仞の海と砂地とより成れども、その中央は稍深し。峽口の左觸に當りて入江開けり。之に近づきたる時、風位逆となり、殆ど暴風に近かりしが、幸にも潮流の力强くして、無事に通過し得たり。

黎明吾等はブランコ島を發見したり。遠く隔たりながら、その嶮岨なる白堊の懸崖によりてそれと知られぬ。其後には

レーモンの平坦なる海岸を見しが、之をそれと知りたるは西北と西南の端なる兩海角によりてなりき。次で海岸に沿ひて東北に航行せしが、屢〻大風と恐るべき雷鳴電光に逢ひたり。

吾等は海岸より五六リーグを隔つる處に絶えず支那を見たり。それより兩姉妹 (The two Sisters)、臺灣、及三王 (The three Kings) の諸島に近く航海せり。其處に此地方に於て普通に見るが如く、やがて起るべき暴風雨の前兆を見たり。此前兆とは二色のみの虹にして、其中に尚二個の虹輪を現せるが、其最外部に在るもの最大なり。船長此警戒を受くるや、帆を卷き、帆桁を卸し、凡ての錨を投じたり。斯くの如くして船は碇泊せるが如き有樣にて在りしが、忽にして東北風強く起りて、海上は荒れ初め、巨浪は船首より船尾までを越したり。我船具は凡て良好なりしかど、切斷を免れ得る力なきかと思はれぬ。斯くて吾等は唯喞筒を使用し、屢〻甲板を打碎かんとする水を汲出し、一分時毎に死を豫期し居たり。一層惡しきことには風位は西北に向ひて八點動き、新しき浪を側面に打付けたり。斯くて二十四時間は極度の危險に惱まされ、今は全く絶望に陷りし時、神意によりて天候は恢復し、暴風止みたるを以て、短時間休息の後欣然拔錨して航海を續行せり。

吾等は宮古島を距る約百リーグの處に到りて、葡人のアルカトラッセスと稱する黑白相交れる鳥の多數が魚を漁るを見て之を賞嘆せり。此島の前に一の黑き懸崖あり。而して島は四個の區分を成し、全く十字形に切斷せられたり。其西南端には二個の圓丘あり。他の島は風琴の管に似たる數個の岩石にて名あり。爰に此海岸に沿ひて二リーグ航行し、三十一度の北方に至り、それより針路を多數の岩石に圍まれたる加部島に取りて、天草の山及カヴァロス島の極端を發見したり。此島は高地を飾れる丈高き松樹によりて知らる。海岸より稍隔れる地に岩石の脊あり。是れ風の爲に激せらるる波濤の暴威を防ぐ堤防の如きものにして、其内部を靜穩安全なる港とせり。次に一株の樹木と大なる教會の屋根とを目標として連結し、長崎の灣を見出せり。吾等は此地に投錨し、長艇を走らせて日本に上陸せり云々と。

是れ日本に至る最近最良の航路の最も精確なる記載を與ふる第二回の發見者なり。

リンスコットの日本渡航

然るにペイスが前述の航海を終へて歸國せる以前に、ジョン・ヒュー・リンスコット (John Hugh Linschot) と云ふ者嗎港の港を出帆して日本に至る航海を企てたり。彼は語りて曰く、

六月十九日吾等は嗎港に至る入口の西側に在るオウトカス島の前より拔錨して、盜賊島 (Isle of Thieves) を風下に殘し行けり。此島の北方に當り更に長くして森林多き一島あり。トンキアウ島 (Isle Tonquiau) も殆ど同樣の形狀を呈せるが、此は恰も城塞の如き十個の懸崖を以て自然の固めをなせど、東南の側には便利にして安全なる港灣開けり。吾等はラモン (Lamon) には近づかざりき。そは此島は遠距離の沖に在りて、多くの海賊其海岸に潛伏し、主に葡船を捕獲せんとすればなり。吾等は直にカバコン海角 (Chabaquon-Head) の方に進航せり。高地にして支那海岸より遙に見ゆる處なり。其後吾等は赤石ヴァレラ (Redstone Varella) に沿ひて航せり。此は連綿たる岩石にして、其色によりて人の善く知る所なるが、高く水上に現れ、キノゴア (Chinogoa) 港を過ぎても尚見るを得べし。それよりレケォブケノ島 (Lequeo Puqueno) を船首に見たり。其嶮岸は長さ十リーグに亙り、北緯二十五度に在り。此地に於て吾等は白き貝殼の混亂せる潮流に逆ひて航行せしが、十五リーグを過ぎたる後は安穩なるを得たり。次には七姉妹島 (Seven Sisters) に達せり。その此く稱せらるる所以は、互に相似たるより來れるものにして、第一のものは中央に隆起せる尖點を有し、西方の岬角の麓には一つの岩石ありて圓柱の如くに開けり。東北方は黑き懸崖にて目立ちたり。此七姉妹島の視界外に出づるや、暗黑なる樹木に充てるイコー (Ycoo) の長島あらはれ來る。それより東北に向ひて

此島と田名島（iTanaxuma）との間の海峽を航行す。此には岩石又は暗礁の危險全く無し。其口にはヴェスヴィウス又はエトナの如き山ありて、石と混ぜる嫌はしき煙及怖ろしき焰を噴上ぐ。山腹は潰裂して大なる爆音と共に飛出で、時には近岸及海陸を恐怖震駭せしむることあり。

田名島は長さ八リーグの一島にして、西なる良港は自然に岩石を以て防禦せられ、丘陵の起伏せる低地は此處彼處黑松を以て蔽はる。北方八リーグにして之を越ゆれば、日本大帝國の海岸を見る。但し途中エブシー（Jebuxy）に航して良く久しく安靜に碇泊しぬ。此くて第十一日には嬀港より出帆して日本に到着せりと。

蘭人の航海通商熱

然るに此等の葡西兩國の航海者及東西印度に於ける多數の發見及殖民の外に、蘭人も亦危險なる結果を生ずる虞より、且身に逼れる必要より、自家の破滅を救はんが爲に茲に航海者と變じ、その事業を企てて下の如き行動に出でたり。

初め蘭人は商業の幼稚なる時に於ては、唯短距離内を往來して、隣邦佛、英、丁、諸其他北海の諸地方に商業を營むのみを以て滿足し居りしが、利益の好餌を味ひたる彼等は更に眼を西葡に轉じ、次第に放膽となり、海峽を通過して地中海に出で、レゴルシ、ゼノア、メッシナに於て商業によりて利益を占むべき手段を索めたり。當時西葡兩國の人は驚くべき發見をなしたれども、彼等は此範圍に滿足して、更に其手を伸ばさんとはせざりき。

西蘭兩國の爭ひ

然れども西班牙より和蘭合同國に對して宣戰するに至るや、西王フィリップは嚴命を下して、從來西國の港灣より輸出せられ、或は蘭人より輸入せる凡ての商品は其孰れの國の產物たるに拘らず、之を拿捕沒收するのみならず、此特別命令を聊にても破れる者又は之に似たる非行を企つる者は重き罰金、其他の刑罰を加ふることゝせり。王は此方法によりて速に敵を屈服せしめ得べしと想像せしかど、其結果は全く反對なりき。何となれば此時までにはマゼラヌスの發見も行はれ、西班牙は東印度の全貿易を壟斷したる狀態に在りて、同國の港灣は各種の藥品、香料及他の東洋の生產品の爲に基督教國の市場となりてありき。然るに今や蘭人は俄に封鎖せられ、從來西班牙人が東洋より取り來れる商品を彼等の手にて歐洲の各地に轉送して行ひたる有利の商業とは絶緣せられたるを以て、蘭人は大に驚き、斯くては滅亡の外なしと思ひ、彼等の焦眉の急に迫れる破滅を如何にして防ぐべきかと考慮し初めたり。數度の協議を重ねたる末、彼等は終に一つの手段に想到せり。何となれば、彼等は北方の海洋を航海したること多く、遠くグリーンランドをも知れるを以て、露西亞及韃靼を越え、アニア海峽を通過して日本に達し、それより東印度に出づる新なる短航路を發見することはさして難事に非ずと信じたればなり。

蘭人の北方航海

是に於て一五四九年蘭人は四隻の船を艤裝し、計畫の如く航行してノヴァゼムブラに達せしかど、それより先は氷の爲に目的を果す能はずして無效に終れり。然るに此最初の失敗に屈せず、同年の冬準備を整へ、翌年晩春の比海の通航に堪ふるに至るを待ちて、更に七隻を加へて出發したり。されど十六週間を經たる後、同樣の妨害に逢ひ、同樣の記錄を携へてマースに歸れり。然れども此不結果に聊かも撓むことなく、無爲に時を過さず、更に二隻の船を增して冒險せしめたり。而も此第二次の航海は前の二回よりも一層不幸なりき。卽ち彼等は氷に閉ぢられて一隻を失ひ、船員は同地に冬籠する爲に其船を破壞して海岸に小屋を建つるの止む無きに至り、同地にて數月酷烈なる寒氣と無日光とに苦しみたり。他の者どもも元氣沮喪し、天候に苦しめられて歸國を强ひらるるに至りぬ。此くの如くして彼等は其豫期

せし大洋の代りに大北灣を發見し、此によりて氷を以て凍結せる通路を得んこせり。

航路の變更

是に於て近き頃葡人の發見せる普通の航路は長くして困難なれども、よく開け居れるを以て、彼等は之を取ることに決せり。初は不成功なりしかど、彼等は更に貿易の爲の艦隊を作りて同じ航路に出發せしめたり。加之他の商人も多く自ら船貨を積入れて船を出さんこする者あり。此前後兩者は合同してヤコブ・ヴァン・ネック (Jacob van Neck) を統領こして八隻の船を出ししが、其還るを待切れずして更にステフェン・ヴァンデル・ハーゲン (Stephan van der Hagen) の指揮下に三隻を出發せしめたり。

東印度會社の創立

此例は到處に摸倣せられ、新貿易は蘭國を通じての新流行こなれり。然れども其地に貿易する商人の增加こ共に大なる不便起らんこし、之が爲に全體の事業を全く沒落に陷らしめんこせり。蓋し人々皆自己の資金を傾けて吾先に貨物を買入れんこせるより、自然市場の物價を騰貴せしめたればなり。此弊害を避けんが爲に、政府は該地方に赴く冒險者を合同して一の會社を作るべきことを命じ、之を東印度會社こ呼ぶことこせり。

東印度會社の膨張

此會社は設立後豐富なる資金を得たるのみならず、征服によりて和蘭合同國の命令下に廣大なる領地を得るに至れり。何こなれば土人は西葡人の堪へ難き不法行爲に倦み、和親同盟の下に蘭人の保護を受くべく進みて自身等を提供したればなり。他の頑硬にして西人の命下に現狀を維持せんこする者をば武力を用ひて征服せり。さて征服せられたる土地の急に增加するを見るや、最も便宜の地に政廳を立つるを適當こ考ふるに至りぬ。

ジャヴァの一市場

蘭人は此目的に最適當こして選定せるジャヴァに於て一都市を建て、之をバタヴィアこ命名し、爰に堅固なる城塞を設けしが、二十萬の軍兵を率るてその前に迫りしジャヴァ皇帝を擊退せり。

太守は此地に堂々たる政廳を設け樞密院を有し、專制權を以て和戰の萬機を決定せり。其數度の征服によりて獲たる領土は日本より紅海のベッソラに至るまで、少くこも六千英哩に亘れり。

バタヴィアより日本への遣使

今や吾人はバダヴィア殖民地の建設を見、又此時代に起りたる航海者及大洋を解放して世界の各地に商業の路を發見したる一時代の簡短なる記載を終へたり。吾人は進みて日本の事に及びて、蘭人が如何にして初めて同國に商店を開き、其根據地たるバタヴィアより立派なる獻品を携へて一年に三回使節を送るに至りしかを記載するに先ちて、一の使節派遣の事を語るは不適當にあらざるべし。此使節はバタヴィアより世界の君主又は權力者に派遣せられたる同樣の使節の中、又こ無き不思議のものにて、其仔細は日本人は自ら威嚴を保ち大に儀式を張りて獻品を受取れども、曾て之に對する答禮をなしたるここ無ければなり。

エスイト僧の日本人改宗に關する努力　日本より西班牙及羅馬への遣使

アレキサンダー・ヴァリグナヌス (Alexander Valignanus) といふエスイト僧は、神學に深く高德なる上に、數學其他凡ての學術に秀でたる人なりしが、福音及基督の信仰を宣傳せんこし、成し得べくは、日本人が其無知なる僧侶に對して懷く尊敬心、恐るべき禮拜式、及暗愚なる迷信を全く除かんこするに熱心なりしが、此目的の爲に其西洋學術の弟子たる日向 (Fiunge) の王の甥メンチオ・イトー (Mencio Ito 伊東萬千代) 及有馬、大村の二王に近親たるミハエル・チヂワ (Michael

Cigiua千々石）等を說き、且此等諸王をも勸誘するに、歐洲に漫遊し、其地を目擊して基督教會の光榮と其壯麗とを本國に傳ふることの有益なるを以てせり。斯くて彼の計畫は實行せらるる運となり、青年の公子等は顧問ユリアヌス・ナカウラ（Julianus Nacaura中浦）及マルチヌス・ハラ（Martinus Fara原）の外に二人の會計方を伴ひ、二人のエスイト師父と共に年の初に長崎を出帆し、多くの危險に逢ひたる後ミアコ（都）に上陸し、九箇月間其地に滯在して便船を待ち、再びマラッカに向ひて出帆せり。此地に於て船一隻を失ひ、彼等の身邊も回教徒の爲に掠奪せられ、漸く身を以て免れたり。それよりマナブルに達し、同地より陸路交趾に達し、此人口殷富なる都市に一箇月滯在して、次で臥亞に向ひて出帆せり。臥亞にては葡國總督フランシスクス・マスカレグヌスに歡待せられたる後、葡船に駕して出發し、途中セントヘレナを過ぎたり。

セントヘレナ島の記載

此島は葡人の初めて發見したる日が五月二十一日恰も聖徒ヘレンスの日に當りしより、彼等の命名したるものにして、大洋中に在り。南緯十六度十五分にして、喜望峰を距ること五百十リーグ、アンゴラより三百五十リーグ、ブラジルより五百十リーグとす。周圍約七リーグありて水上に高く現れ、何れの方に於ても壁立せる嶮岩を以て海の暴威を防ぎ、城塞を備ふ。本來山多けれど、多くの溪谷に切込まれ、その中には二箇の極めて愉快なる谷あり。卽ち教會堂の谷とす。其名の由りて來る所以は、其處に一の小教會堂ありたればなり。其北方には高地に達すべき上り易き樂しき坂路あり。南方には橙の谷あり。橙實を多量に產ずるによりて此名あり。橙のみならずレモン、柘榴其他の產多く、年々六七隻の船に滿載すべき程なり。教會堂の西方に好碇泊地あり。然れども吹き流さるる虞あれば、海岸に近く碇泊するを要す。蓋し風は岩石多き海岸の傾斜地より屢〻猛烈なる勢を以て突然吹下し來ることあればなり。

セントヘレナ島

此島の氣候は溫和にして人體に適し、船中の病人を此海岸に上陸せしむれば健康を恢復する程なり。谷は尋常以上には熱からず、山は程よく冷氣なり。空氣は一日五六回の驟雨によりて清涼にせられ、太陽は屢〻その間にも輝けり。地味は本來乾きて不毛なれども、清洌健全なる泉を以て補償せらる。教會堂の谷に於て殊に然り。此谷には高地より流下する數箇の心地好き河ありて海に注げり。此地に碇泊して水を汲入れんと欲する者に大なる便宜を與ふるは此川流なり。

此島には住民無し。其野獸多きは葡國の一商人の力に歸すべし。其商人は一五一二年此地に投錨し、愉快なる地にして而も寂寥なるを見るや、たま〳〵彼は多少鬱憂病の傾向ありしかば、よく其性情に協ひたるを感じたり。蓋し是より先、家道に多く不如意の事ありて生業に倦み、かねて關係ありし人々の狡猾なる行爲に快からざりしなり。是に於て彼は此寂しき地に住居を定め、船中に在りし羊豚及家禽などを放ちしが、短時日中に驚くばかりに繁殖し、此地に寄港する者に新鮮の食料を多分に供給せり。葡王ジョンは嚴命を下して、凡ての臣民に此地に殖民することを禁止せり。

*　*　*　*　*　*

一行は此地に上陸して休息し、若き公子達に野猪獵を觀覽せしめたるに、頗る其意に合ひたり。

日本の使節リスボン、マドリッドを經て羅馬に向ふ

此地より或は順風に助けられ或は惡天候に妨げられつつリスボンに到着し、總督にしてブラガンセ公爵たるアルバート・アウストリア（Albert Austria）の歡待を受けたり。是よりグッダルーペ、タラヴェラ、トレドを經てマドリッドに着せり。西班牙王フィリップは多くの寵榮と懇親とを以て彼等を饗應し、宮中其他を觀覽せしめたり。三箇月間カスチルに滯留してアリカントに航し、マヨルカ及ミノルカの二島を訪ひ、ピサ港に入りてベーテルに會せり。ベーテルは

兄フロレンス公爵フランシスより出迎の爲に派遣せられ、彼の宮廷に案内せんことなり。此宮廷に於ても先に西班牙宮廷に於けるに劣らざる歡迎饗應を受けたり。

羅馬入りの盛儀

次で彼等は直に羅馬に向ひて出發せしが、法王は彼等を誘導する爲にフランシスクス・ガムバラを彼の領境に派遣せり。夜に入りて彼等はエスイト大學の學長に面會し、鄭重の待遇を受けたり。學長は彼等に宿泊所を供し、禮儀を以て饗應せり。翌日一行は公式の入都式を行ひ、法王グレゴリ第三世に謁することゝなり、其典儀は成し得る限りの凡ての壯嚴を以て行はれぬ。卽ち先頭には法王の親衞兵華麗高價なる服裝にて騎馬にて打ち、其次に步兵進めり。次には瑞西人の衞兵、次にはカルヂナル等の從者の全身を金及緋色の絹にて裝へる者、之に次ぎては騎馬隊にして、市の內外凡ての侯伯及貴族の一行なるが、最高度の華麗を以て粧ひ、喇叭、太鼓を其前に吹奏せしめて秩序正しく進行せり。其次に日本の公子巧に馬を御し、國風に從ひて美美しく裝へるが、下衣、胴衣、外衣に花鳥の珍しき刺繡を施し、袖は廣く短きを用ひ、頸には衿卷をなし、二振の劍を一方に橫たへ、其柄と鞘とには眞珠及金剛石を鏤入せり。最後には市の高官及紳士續けり。此行列を以て一行は法王宮に進み、法王の座せる面前に至りぬ。法王の周邊にはカルヂナル及僧正等皆其階級に應ぜる法衣を着け法帽を戴き、手には十字杖を携へたる樣未曾有の壯觀と謂ふべし。一行は公子なるに拘らず、式法に隨ひ謙讓なる態度と喜悅の容貌とを以て法王の足に接吻し、次に羅甸語に反譯せられたる三王の親翰を披きて之を朗誦せり。其初頭は次の如し。

慇懃なる日本諸侯の書翰の冒頭

「最も熱誠なる敎職、地上に於て基督の位置を充たせる主位の牧者、最上且神聖なる神父に對し、足下に拜伏して此書を呈す」こありて次の如く署名せり。「豐後の王トリムス（Trimus）誠恭誠敬猊下の最も祝福せられたる足下に俯伏す」と。他の二翰の書式も同樣なりき。

神父ゴンサルヴスの紹介

書簡朗讀の終りし後葡國のエスイト僧ヤスペル・ゴンサルヴス（Jasper Gonsalvus）は若き日本の公子の爲に十分に使命の意義を說明し、且書簡の意味を敷衍し、然る後三王に關する贊辭を述べ、彼等の宗敎に對する敬虔及渴仰の趣を披露せり。其終りたる時、彼は法王の方に向ひて、高き推賞と贊辭とを以て斯くの如き謁見に於て適切に言はるべきことを述べたり。

ブラバヅリウスの法王答辭代演

此の陳述終るや、アントニー・ブラバヅリウス（Anthony Burapadulius）法王に代りて陳べたる要領次の如し。

「諸王が甚だ細心且敬虔に行動し、且彼等の最も近き親族を斯くの如く費用の莫大にして道途遠隔、危險亦多き使節として派遣し、神の代理者、使徒ペーテルの眞正の相續者、公敎會の首長、天の鍵の保管者たる此羅馬なる猊下を訪問せしめ、是に依りて全國民をして之無くしては救濟せられざるべき基督敎の信仰に全然歸依せしめんことを希望するは、甚だ推賞すべきことなり。而して救濟の爲に彼等の忌むべき異端の迷信を變じ、惡魔の殿堂に於てせずして神の聖殿に於て捧物をなすは、彼等の幸福なり。彼等は敎訓及敬神的の勸說によりて永久の恩惠幸福竝に靈魂の眞の平和に就きて初めて聽くことを得しめたる聖者サヴェリウスに對して多大の感謝をなさざるべからず。其救濟の信仰は既に此程有力に東西印度に於て多くの國民の上に働けり。彼等は古くより無智に導かれて、忌むべき偶像敎を盲信し居りしが、今は基督の旌旗に隨ひて、惡魔の敎義に對して公敵となれり」と。

彼は此意味を以て演述したる後、更に又法王は日本の諸王が斯くの如き壯大なる使節によりて彼等の敬意を彼に表せしことを彼等に感謝し、大なる厚意を感ずといふ意をも附言せり。是に於て衆皆起立して退出せり。

日本人羅馬にて歡迎せらる

其後數日を經て法王は彼等を私室に引見し、數時間心易き談話を交換し、彼等の國の幅員、富力、習慣、風俗、其他に關して尋ぬる所あり。彼等が數箇月に亙りて羅馬に滯在せし間は、カルヂナル、官吏及市内の有力者より屢〻盛大なる饗應を受け、又葡、西兩國の大使の訪問を受け、日々の寵遇と各種の盛なる招宴とに時を費せり。其中グレゴリ第十三世は食後突然卒中症を發し、遂に八十三の高齢にて殂せしかば、爲に聖餐式を行ふ能はざりき。その墓上には次の如き碑銘ありて、今も猶見るを得べし。

法王グレゴリ第十三世の墓碑銘

「グレゴリ第十三世、彼の嗣法者、其他如何なる階級の人よりも凡ての愛と榮譽とを當然に受くべし。第一彼は教會其他の公共の建物を以て羅馬市を粧飾せしが爲に、彼の貧民に對する慈善事業の爲に、世界を通じて多くの公共學校を建てし爲に、耶蘇の信仰弘通の爲に、凡ての國民に對する父の如き愛の爲に、殊に世界中最も遼遠の地より遣はされたる日本の使節を懇切に待遇したるが爲に、最後に曆の精密なる訂正の爲に」と。

法王セクスツス第五世の贈遺

嗣ぎて法王となりたるセクスツス第五世も日本の王族に對して大なる親切及恩惠を示し、且日本の基督教會の爲に年年四千クラウンの歳入を定め、又二千クラウンをば眞正の信仰にて青年を教育する爲に公共學校を建設するの料に充て、公子等の伯父たる諸王には金銀寶石を以て象眼を施せる劍及十字架、其他の珍品を贈遺せり。

日本使節の歸朝

一五八五年六月十三日日本の使節は法王より此等の夥しき恩賜品を受けて羅馬を出發し、伊太利其他諸國を旅行し、海上に於ては風濤の爲に惱まされつゝ、五箇年の星霜を異邦に費して、日本長崎に到着したるが、直に都なるエムベロルの宮廷に急ぎたり。

是れ日本より歐洲又は其他の國に發したる唯一の使節なりき。

エスイト派の密謀露れて葡人日本を逐はる　通商事業蘭人の獨占に歸す

此時より以後和蘭人は日本と通商を開きて莫大の利益を獲たり。殊に葡國人がエスイト教徒謀叛の爲に同國との通商を禁止せられし後に於て然りとす。その顚末略下の如し。

エスイト派は日本全帝國を擧げて葡王に渡さんとするの計畫を立て、其熟するや王に對して勸誘の書翰を致し、若し十分に武裝したる堅艦八隻を送らば、其到着するや否や、數人の王及數千の改宗者は直に彼の味方たることを宣言して起ち、エムベロルの他の黨與を壓伏すべし。若し尙頑强にして服從せざる徒輩あらば、彼等は武力を以て之を伏すべしと云ふことを約せり。然れども此事露顯して、葡人は直に一時國外に逐はれ、一六四一年永久に日本より排斥せられ、エスイト僧及主なる黨與は凡て死に處せられたり。

故に商業は蘭人に開かるることとなりて、彼等のみ之に從事し其收利の大なる故によりて、三年毎にエムベロルへの見事なる獻上品を携へて祝賀の使節を派遣するに至れり。

蘭人の平戸市場

蘭人の日本に設けたる第一の市場は平戸と云ふ一小島に於けるものなり。此島の東海岸に豐後 (Bongo) あり、往々四國

(Cikoko)ッ稱せらる。北にはタキ島(Taquxima)あり、南は五島に面す。兩者ともに海水に洗はる。又西は大洋に面す。平戸の港は蘭船よりも日本船に便宜を與ふ。蘭船は重く、吃水深く、殊に港の入口は狹きに彼等の船體大なるを以て危險なり。然れども港内に於ては安全に碇泊し得。周圍は陸地を以て固められ、如何なる風波の力をも防ぐべく、颶風の際にも平滑なる海上に在るを得べし。

平戸の記載

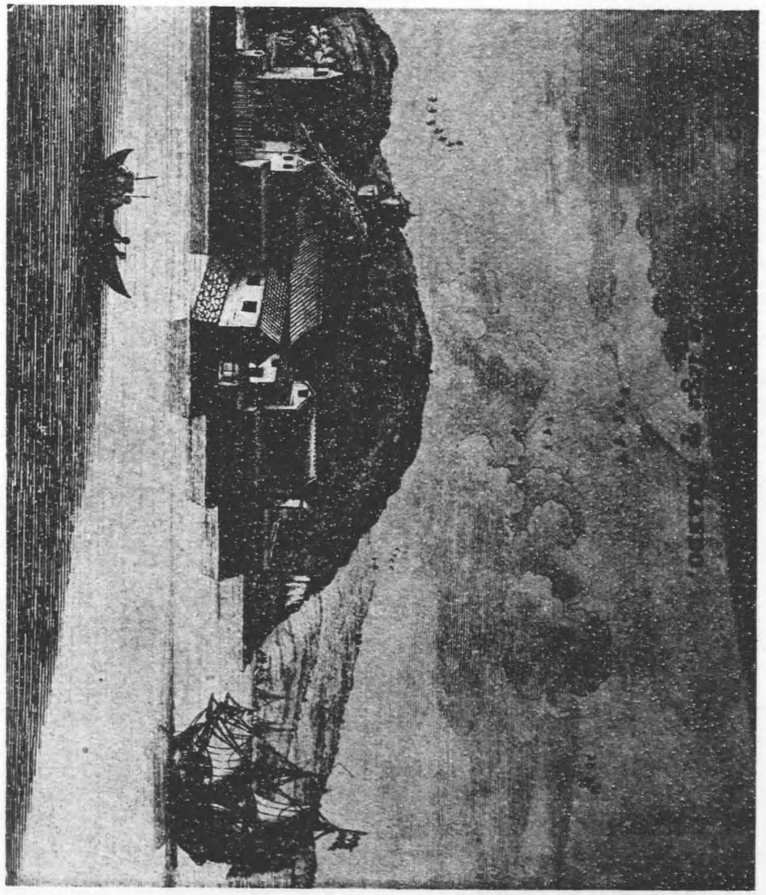
土人は此島を二重の胸壁を以て固めたり。支配者は美第に住せずして、板を組合せて建てたる陋屋に住せり。此港は近き比までは人の至ること繁からざりしが、蘭人の東印度會社爰に市場を設けしより、近傍の島及其他の地より多くの商人來りて蘭人と貿易を行ふに至りて、支配者は年々多くの利益を得、且蘭人よりは大なる地代を收めたり。是に於て彼等は少くとも四十の家屋を建てたり。

同地の東印度會社倉庫　蘭人平戸より長崎に移る

會社の命じて初めて此地に建てたる倉庫は階下の四室と階上の五室とより成りて貨物を納る。其他に庖厨、食料室及事務室あり。所在は海岸に近くして、水に至るには鍵と梯子とあり。然れども木造なるを以て、短日月に乾燥し、腐敗し、商品の火災、惡天候、又は盜賊の難に遭ふを防ぐ能はず。是に於て一六四一年更に一個の倉庫を石材もて建て初めたり。エムベロルは之を懌ばず、彼等は之を防禦の城壁と變ぜずやと思惟し、命じて之を取毀たしめ、同時に長崎に移さしめたり。

平戸の奇なる偶像

平戸に近き一小灣に一の偶像あり。高さ三尺許りの一木函に過ぎずして、一の香案の如くに立てり。婦人懷妊したり



平戸の洋館

と思ふ時は參拜し、跪きて米其他の品を供へ、多くの祈禱をなし、産む所の子の男兒たらんことを願ひて、「何ともして男子を授け賜へ。大なりとも負ふべし」と言ふならはしなり。

蘭人平戸を去るに先ちて、彼等は商品を小舟に乘せて長崎に輸送せり。彼等は既に此地に工場を有し、一六九四年(一六〇四年の誤か、今原のまゝとす)にメルヒオル・サンドウォールド (Melchior Sandwoord) といへる蘭人を爰に見出せり。彼はマフ (Mahu) より艦隊を率ゐてマゼラン海峡を經て航海したるが、同行の船を失ひ、三十年以前に此海岸にて難船に遭ひたる者なり。斯くて蘭人は平戸を去りてより此方、長崎に市場を有せり。

蘭使長崎より江戸に差遣せらる

一六四九年六月二十八日バタヴィアより日本エムペロルに派遣せる使節は、先づ長崎に在る市場に上陸し、更に江戸に在るエムペロルの宮殿まで進むべき豫令を受けたり。此任務を委任せられたる者の首班はブロッコヴィウス卿 (Lord Bloccovius) にして、助員としてアンドレアス・フリシウス (Andreas Frisius) といへる巨商を附したり。萬事の準備成り、見事なる贈遺品を調へて海路に就けり。船隊は三隻の船と一隻のケッチとより成れり。

* * * * * * * *

一行は先づ海峡を進航せり。此水はサムトラ (Samutra) の海角とバンカ (Banca) の島とを洗へるものなり。さてバウロチモン (Paulo Tymon) の海岸を右舷に見て、之に沿ひて八日間航走せり。

* * * * * * * *

是より彼等は目的の航路を取りて第十二日には一小島プロ・カンドル (Pulo Candor) を見、次にはプロ・セシル・デ・テル (Pulo Cecir deTerr) を見たり。セシル・デ・テルは白沙を以て緣とし、カムボヂアの大陸の前に横はり、日本人、

葡人、交趾人、及馬來人の來訪を受くること屢〻なり。

* * * * * * * * * *

カンボヂアを去りて彼等はチャンパ (Chiampa) に赴けり。後四日を經てセント・ジョン・デ・フィックス (St. John de Fix) の附近を過ぎたり。此は嶮峭なる山にして、其尖頂は人間に似、大なるこゞコロサスの如し。此地に於て翌夜八月十五日大使ブロッコヴィウス卿は薨去せしを以て、遺骸に香油を注ぎて棺に納れ、嚴肅こ名譽こを以て葬儀を行ひたり。是れより彼等は使節がアンドレアス・フリシウス一人こなりしを悲しみつつ、前進してプロ・カムビール (Pulo Cambier) 及カタォ (Catao) を經、アイナム (Aynam) の島を見、又久しからずして媽港を見たり。此地に於ては全海面を蔽へるが如き多數の漁夫に苦しめられたり。

* * * * * * * * * *

艦隊の媽港を離れたる後、九月四日怖るべき暴風猛雨ありて、雷電をも伴へり。此惡天候は一の奇なる現象によりて豫告せられたり。シリウス卽ち犬星は凡ての恒星中最も大に且最も光輝あるものなるが、其體より蠍の爪に似たる烈しき光線を發したり。此暴風に苦しむこと三日にして、猶風下に吹流され、終に碇を下すの外餘儀なきに至りしが、暴風は尙勢を增ししかゞ再び碇を引揚ぐるを得ず、目前の安全を期して碇綱を切斷して只管前進をなし、前に經過し來りたるよりも九リーグ退きたり。此上に多くを失はざらんが爲に本來の針路を維持せんこ試みしが、强健なる海員にして良指揮者たるペーテル・ダヴェンソン (Peter Davenson) は綱具を操縱する間に帆こ共に海中に墜ちたり。是に於て乘組一同は會議を開き、人々の生命の危險に瀕せる此際、如何に臨機の處置を執るべきかを議し、結局警戒に警戒を重ね、成し得る限り帆を揚げてベスカドルスの海角を廻り、其地より風及天候の許す限り豫定の航路を取るに決せり。

然るに天候は或は順こならんこ期せしに、其夜に入りて又風劇しく吹き、斜杠帆を張るを得ざる程なりしが、翌朝に至り稍風ぎ初めて、南方に押流さるるこを防ぐ爲に尾帆を張れり。時に北緯二十二度に在りたり。暴風の威力も今は盡きたるならんこ希望せしに、又もや正午に至りて再び東方より吹出で、其威力は是までよりも大こなり、斜杠帆を失ひて夜半に及びたれば、彼等は全く救助の望を失ひ、死の門に在りて何時引入れらるるも知れずこ覺悟せし時、神惠ありて風力は減じ、風位は變じ、支那海岸より一リーグの地に達するを得、スプーン山 (Spoon-Mountain) の掩護を蒙りて天候の暴力を避け、海面も漸く靜穩こなり、終に萬死を脫して臺灣に安着せり。

臺灣の記載

臺灣島はもこ支那人よりバッカンデ (Paccande) こ稱せられたり。南より北に長く、東西は狹く、周圍百三十リーグあり。一見高地をなして丘陵多く、鹿を初こして山羊、兎、野猪、虎を產し、森林には雉子、鳩あり。地味豐饒にして砂糖、ジンジャー、ココアナット等の收穫多く、且到處に人口に富める村落あり。此等村落の住民は粗暴强健にして體軀偉大なり。彼等は野蠻なりこ雖も、蘭人を遇するこ懇切にして、奄末ながらも健全なる食物を供し、心をこめて蘭人を饗せり。

* * * * * * * * * *

臺灣に於ける蘭人の貿易　臺灣の大切なる所以　西班牙人臺灣に於ける蘭人を逐はんこす　日本人蘭人を憂ふ

蘭人は此地に支那のジャンク船こ大なる貿易を營めるが、此等の船はチンチェオ (Chincheo) 及漳門市より來れるものなり。彼等の貿易し物々交換を行ふ品は此地より日本、印度、和蘭に輸送せらる。船若し漳門より歸ること晚くして、通例日本又バタヴィアに輸送する貨物を積込むべき時を過ぐるときは、蘭人は其地に向けて出帆す。此地に於ては十テール（一テールは佛國の一クラウンに相當す）を以て絹一ピコルを買ふ。一ピコルは重量百二十ポンドなり。

此島は蘭人に取りて大切の處とす。何とならば、彼等は之によりて西班牙と支那及日本との商業を妨碍するを得べければなり。西班牙朝廷はよく此不便を知りて、之を避けんが爲に一六二六年臺灣の北端に上陸して早急に城砦を建て、之を基隆（Kelang）と稱せり。然れども西人は此處に定住したるのみにては滿足せず、大艦隊を艤裝して蘭人をチョーヴァン（Tyovan 臺灣）より追はんとせしが。惡天候の爲に目的を得ざりき。此後葡人は媽港に於て類似のことを企てしが、同樣の不成功に終れり。此は亦日本人に取りて小からざる障害なりき。彼等は蘭人が臺灣に於てゼランヂア（Zelandia）に城砦を建つる以前より甚だ有利なる貿易を行ひ居たりしが、後此手段によりて甚しく妨害せられ、內心頗る不平なりしかども、之が賠償を求むる能はざりき。かくして各方面の事情混雜を來せるに乘じて、蘭人は猶豫無く機會を利用して基隆を取り、全島の主人となれり。然れども後優勢なる海賊起りて、ゼランヂアは之が爲に奪はれたり。

* * * * * * *

蘭國艦隊日本に進航す

日本への使節一行は豫定の航海をなしつつ終にセントクララ島（St. Clara）に來りたり。同島は岩多き高地チカコ（Chikako）の南端に面せり。此處より北行して西に傾き、第二夜には大暴風に逢ひしが、非常の困難を以て漸く之を脫し、九月十七日に於て長崎の前岬を見たり。然れども尙疑を懷きて進航を續け、正午比船を操りて北方に出でしが、其土地を見れば低く、見慣れざる海岸なれば、頗る心を惱したり。而して水先案內は長崎灣の口に近く現はるる多くの島を見て愈〻自信を失ひ、再び沖の方に向ひしに、其處にて南航しつつある日本船を發見して之に近きたれども（此時風は急となり居るを以て之に妨げられて）之と通信せんとするの企圖を拋棄せざるを得ざりき。次で直に他の日本船を見付け、近づきて物言ひかけたれども、互に領解するを得ず、その努力は再び無效に歸せり。

蘭船長崎に入る　大使フリシウス

十八日の早朝、長崎の海角は北々東に當りて五リーグ半の距離に見え、五島は北々西に見えたり。此位置によりて彼等は正しき海路に在りて、安全に港灣內に入り得ることを知り、此くて夜に入るまでには野母(Nomoo)の海角に達したり。此海角は有馬灣に沿ひて西南に延びたり。斯くの如くにして彼等は北緯三十度の處にて北東に橫れる野母より四リーグ以內に漕付け、それより前檣下帆のみを用ひて東に進み、翌旦彼等は滿帆を揭げて歡喜の裡に北岸に航走して長崎灣心に入れり。其對岸の頂には塔の如き岩あり、その背後南方七リーグの處に長崎あり。之を過ぎて港の方に進む間に多くの島及若干の岩に遭ひしが、此等は皆丁寧に彼等を歡迎して通路を與ふるかと覺えたり。正午までに長崎の前に着航せしが、其處は水深六尋半にして粘土の床なりき。和蘭の友船六隻此港に碇泊せり。

此時デリック・スネック（Derick Sneck）は東印度會社を代表して領事たり、又東京總督フィリップ・シレマンス（Philip Shillemans）も同地に在り。船の到着するや彼等は直に船に來り、バタヴィアの會議によりて故大使ブロッコヴィウスの後任として任務に就くべく任命せられたるアンドレウス・フリシウス（Andreus Frisius）を伴ひ、莊重なる儀式を以て後者を案內せんとせり。香料に浸されたるブロッコヴィウスの死體は同樣の儀式及尊敬を以て陸地に移されしが、其葬儀は日本人の奇驚と贊嘆とを博せり。

スチック、バタヴィアに航す

十月一日デリック・スネックは長崎よりバタヴィアに赴き、アントニウス・ブレックフルスト（Antonius Brekhurst）之に代れり。彼は又アンドレウス・フリシウスの職務上の同僚となり、當時の日本エムペロル（江戸の大都市に住せる）に對して蘭人と彼の臣民との間の自由貿易及商業を行ふことに關する使節の一人となれり。此使命は甚だ重要なるによ

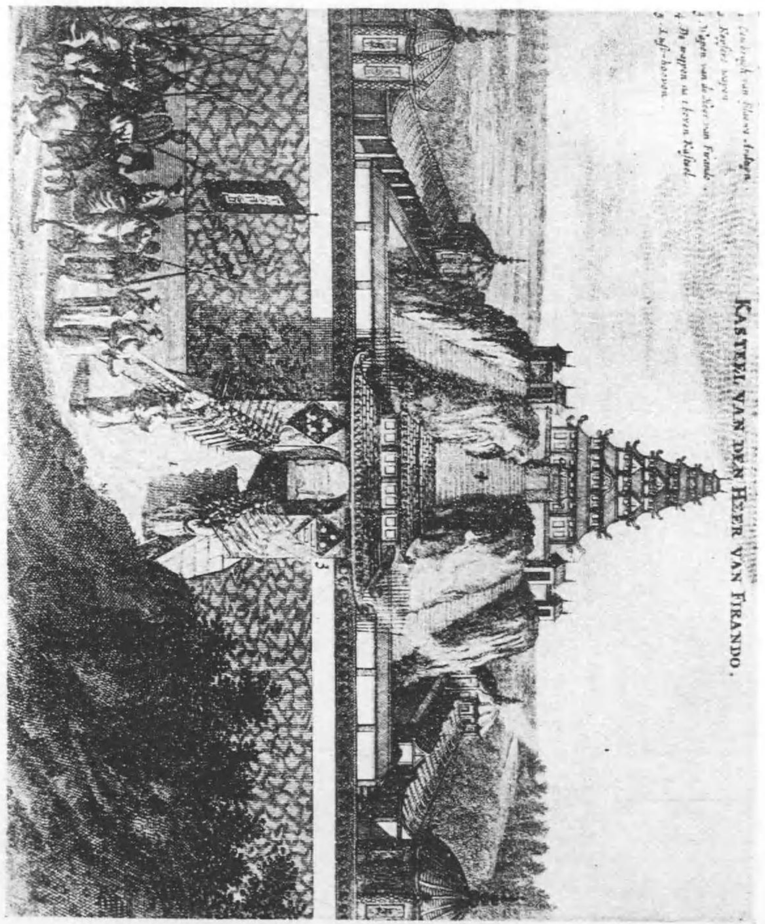
り、之に應ずるだけの從者供廻りも華々しく準備せられぬ。然れども蘭人は平戸より長崎に來りて以來未だ十分に落着かず、其倉庫なども猶整頓を缺き居れり。之が爲に彼等の決定を實行するにつきては混雜を生じたり。蓋し長崎は平戸に比して富み且つ人口多く、旅客の訪來も多けれど、蘭人に取りては平戸の方遙に便利にして且貿易を行ふに都合よかりしなり。

平戸の記載

此國は何等の價値あるものを生ぜず、又島の君主の同胞たる平戸殿（Firandano）の住める城の外には見るべきもの無し。城は心地よき牧場の中央に在り。此城に入るには青色の板石の橋を渡る。此橋を過ぎて階下の廣庭あり、其兩側には銃士の列之を警衛せり。門は二重の庇を以て被はれたるが、此二の庇の間には稍大なる隔りあり。相對する傍面は、飾るにエムペロルの紋章及國主の紋章を以てせり。城は丘陵の上に位し、遠隔の地より望見すべし。塔は七層にてピラミッド形を成し、尖端に至るに從ひて次第に小なり。城の各側に八個の戸開けり。堅き石より切出されたる階段に依り、嶮しき坂を上りて此門内に入り、數個の戸を通過して宮殿に達す。下には四個の歡樂の東屋あり、之を饗宴室とす。方形の柱の上に立ち、周圍に廊を繞らす。頂には圓屋根あり。是れ平戸が唯一の誇りとするものなり。然れども彼等は使命を果さんが爲に出發せんとして、はたと當惑を感じたることあり。そはエムペロルに謁見せんとするには、先づ多くの高價なる獻品をなして路を開かざれば許さるることなしとの事を聞きたればなり。

マッフェウスの日本記事

茲に此國民の鄕國、習慣、特性に關し、好典據たるヨハンネス・ペトルス・マッフェウス（Johannes Petrus Maffeus）によりて記載するは誤りにあらざるべし。



平戸侯の城

普通に日本と稱せらるる此國は一島にあらずして三個より成り、其周邊には多くの小島碁布せり。最大最富の島は五十三州卽ち小王國に分れ、首都をメアコ(Meaco 都)と云ふ。第二の島はクシムス(Ximus九州)といひ、九箇の領土に分れ、其最も大なる都市をヴォスキム(Vosuqium臼杵)及フナユム(Funaium府内)とす。第三區はシコクム(Xicocum四國)とす。唯四人の代官あり。土佐の市を以て名あり。此くの如くして日本の三島は六十六王國を算し、凡て一人のエムペロルに隷屬す。

全國は長さ二百リーグに及び、幅は長さに匹敵せず、最も廣き部分も三十リーグを超えず、最狹は僅に十リーグに至る。其周圍は未だ詳に知られず。南北に延長して北緯三十二度より三十八度に及べり。東はノヴァ・ヒスパニア(Nova Hispania 新西班牙)に對すれども、百五十リーグを隔て、北はスキチア(Scythia)卽ち韃靼及他の未知國に隣す。西は支那に對すれど尙遙に隔れり。支那最東の岬角に在る一市リアムポ(Liampo)より日本の最西に在る島にして船の先着處たる五島に至るまで六十リーグを隔て、支那東側の最西港なるアマッケン(Amaccen)より前記の島には二百九十リーグを間つ。南は廣き大洋を以て境せられ、遠距離に未知の國あり。傳ふる所によれば、其地より一種の珍奇なる國民荒天の爲に日本海に漂流して日本に着き、定住して歸國せざりしことありと。

氣候は大部分雪を見て寒冷なり。地味も甚しく豐饒にあらず、米は彼等の一般の食料品にして最も多量に產じ、九月に於て之を收穫す。他の穀物は概ね五月に於てす。歐洲に於けるが如く之を麵麭に作らず、熟煮してばん粥或は粥に作り、柔くして食す。諸處に溫泉あり、(彼等の云ふ所にては)多くの病を癒すと。

日本の奇なる山嶽

此國は平坦と謂はんよりも寧ろ丘嶽多しと謂ふべく、其中に於て二箇の驚くべき山あり。一は絶えず炎を吐き、恐るべき煙と爆音とを發し、凄しき狀態を呈せり。或人は是れ山嶽なる火環の中に立てる惡魔の所作なりと想像するもあり。今一箇は富士山(Figenoiama)と稱せらる。(或人の報告によれば)其高さ數哩に達し、垂直に立ちて雲と中空との上に出でたり。

此國は鑛山に富み、國人は之より大なる富を集む。其人々は外國の商人を誘ひて彼等と貿易及物々交換を行ふことに努む。

日本の奇樹鳥獸

彼等が必要又は快樂の爲に植うる草木は、我國のものに相似たり。唯棧橋に至りては他の植物とは異り、柔弱にして珍らしき性質を成し、最少の溫氣其根に觸るれば直に萎縮枯死す。卽ち水分は此樹に對して恰も毒の如き破壞作用をなすなり。之を救治するには掘上げて太陽に晒し乾きたる砂を入れたる新しき穴に植うれば、移植と同時に直に恢復して綠葉を出す。樹枝若し風なごの爲に折るれば、幹に固着して恰も接枝又は接芽したるが如くなりて發育す。杉は各地に多し。往々甚だ高く大にして、其幹枝は莊麗なる建物の主要木材となり、船匠は之を以て檣とす。日本人は羊、豚、鵞、鳥、又は家禽を飼養せず。又鹿の外には殆ど肉食せず。曠原には野生の牛、馴れざる馬あり。後者は良種なり。森林には狼、猪、鹿、熟兎あり。

種々の鳥類の中には雉、鴨、野鳩、斑鳩、鶉、鷓鴣を缺かず、魚も亦多し。其中には鰻あり。又國人のヴォーム(Voom)と稱するもの最も賞美せらる。彼等は牛酪を知らず、又甘油の用を知らず。然れども鯨より絞れる油を用ふ。鯨は屢海岸に漂着す。下等民は蠟燭を用ひず、蠟燭及炬火の代りとしては松樹の枝を取りて照明用とす。

日本人の體格

人物は身長高く、體格頑丈にして、容易に夜警其他の困難に堪ふ。十二歲より六十歲までは閲兵、徴兵、及軍事に關係す。鬚をば稍長く成長せしむ。頭髮の剃方には種々あり。青年は前額のみを剃り、農夫及下層民は頭の半にのみ剃刀を使用し、貴族は頸背に近く剃り、唯房を殘す。若し何人か之に觸るるときは、彼等は此を以て甚しき侮辱、大なる不名譽とす。

日本人は强堅なる人民　其習俗

彼等は各種の艱苦に對して忍耐性を働らかしむ。而して習慣的に鍛へられ居るが故に、飢餓、寒暑、節儉、夜警、旅行は彼等の遊戲の伴侶なり。天候甚だ寒冷にして膚を刺すが如き日にも、生れ落ちたるままの嬰兒を持出して流水に於て洗ふ。其洗滌中にも嬰兒をして沈沒より自ら救ふが爲に手足を以て水を爬かしむ。彼等が乳離れするや、第一の教習は狩獵術にして、母及他の女子の親族より引離さる。彼等が剛健を學び初むる學校は、荒涼にして人跡稀なる場處なり。小兒を婦人に近づかしむるは之をして柔弱に女々しからしむる最大因なりと信ぜらる。

彼等の家の床は甚だ巧に席を敷けり。蒲團の如く塡料を詰め、之を踐むに柔ならしむ。是れ寧ろ彼等の寢床なり。彼等は其上に横臥して、頭の上には枕無く、木片又は石を置きて安靜に休息す。

彼等の席は又食卓なり。其上に足を交叉して食事をなす。食物に於ては、支那人に劣らず、調理巧にして美味なり。又支那人の如く二本の箸を用ひ、各手に一本づつ執りて細片にしたる食物を取上ぐ。そを用ふること巧妙にして、小刀又は叉を要すること無く、此等の道具は彼等の目的に適應して何物をも落さず、又指をも汚さず。食室に入れば清潔を尙びて靴を脫す。海岸に住する下層民、殊に貧困の生活をなす者は食料にも窮乏して、唯米、魚及鹽を食す。然

れども内地人は日々美味を取り、支那人の如く多量に食す。

日本の盛膳

食卓布及ナプキンは無くして小形の板の上に皿をならぶ。板材は松又は杉にして、彼等の好に從ひて巧に各種の色彩を施せり。料理用の皿は諸種の食物を以て積上げらるること我國のビスクの如く、金箔を以て飾を施し、其端には糸杉の枝を插す。然れども彼等が貴人を饗應する時は、鍍金したる獻立書を用ふるを例とす。友人と外人とを別たず衷心より歡迎して心地よくもてなすなり。

彼等が飲食する間には種々の習慣ありて、之を行ふに奇異にして模倣的なる身振を以てす。全國民を通じて皆然り。葡萄酒は全く彼等の知らざる所なれども、其代りに米の酒を作る。然れども彼等の最も好むものは茶の粉末を混じたる熱湯なり。

日本人の飲料製法

此混合物を作るに工夫を凝し思を經ること最も甚し。貴族は友人を饗するに方りて之を作ることを以て誇とし、此特殊の飲料を作る爲には家内に特別の室を設け、一種の爐にて文火を以て之を煎る。客の訪問する時は、釜の蓋を取りて其中より椀に汲取り、熱きままに供す。椀は一人より二人と順次に廻さる。

之を作るに用ひらるゝ器物は一種の爐、漏斗、石、小瓶、匙、壺にして、壺には茶の葉と粉末とを入る。

彼等が最も誇る所の最後の馳走は彼等の集め居れる珍器奇什を出して自己の富を示すことなり。日本人は前記の飲料を尊重し、吾人が寶石及寶玉に於けるに超えたり。

彼等は劍の柄を尊重すること甚しく、名工の作なる時に於て殊に然り。

日本人の家庭

彼等の多數は壓窄せる木材を縱に裂きたる板を以て葺ける家屋に住す。此地には地震屢〻起ることなるが、家屋倒壞してもさしたる害を受けず、速に修繕を加へ得ることを圖りてなり。但し往々石造の家に住する人あり。此等は美術的なると同時に又高價なるものなり。殿堂は頗る雄麗にして、莊嚴なる僧院を附屬し、境内に男女を別居せしむ。

日本人の言語

日本人は一の共通言語を有すれども、發音は種々に別れ、數個の特殊の方言を有するが如く認めらる。彼等は吾人の如くに實名詞に形容詞を添ふることをせず、數種の詞によりて或事を善とし惡とし又は善惡無しと了解し、又其他に及ぶ。加之言語に數種の調子又は語勢あり、我が音樂の調子の如く或は鋭く或は平にして、之によりて意味を區別す。然れども君主は威嚴ある態度を以て傲慢なる言語を使用し、平民は數等低き風體にて語る。簡短に言へば男女は同一の話法を用ひず、且又文章の體も日常の俗語とは異り、又書く時には一種の文字を用ひ、印刷には他の文字を用ふ。而して兩者は全く相異りて、其間に何等の類似もなし。書物は多し。神に關するものあり、道德又は英雄に關するものあり。彼等は一字を以て一語を意味するものを用ひ、時には一字にて一文を意味するに至る。其文字は支那文字又は埃及の象形文字に似ざるにあらず。此故に日本語を學修し又は領解すること最も困難なり。

彼等の武器

彼等は甚しく戰爭を好む。武器には銃、弓矢等の外に長劍短劍あり。男子十二歲に至れば、之を帶び又使用し始む。彼等の劍は製作精良にして鍛も佳し。我が歐洲製の刀身を切斷すること菖蒲又は葦を截るが如し。而も刃は之が爲に鈍りもせず又截痕を生ぜず。

彼等は金又は銀を尖端につけたる投槍を有し、又普通の槍を有す。槍は歐洲のものよりも長けれども輕し。彼等は之を用ふること甚だ巧妙なり。

彼等の衣服

彼等は年と共に衣服を變ず。小兒期を過ぎて成年に達すれば、各種の色の外衣を着す。其長さ踝に達す。戸内に在る時は之を緩む。然れども外出する時は之を着用し、脚の周りにて長き股引の如くに結び、胴の處にて帶を以て締む。その上に日本人がキモノ(Quimon)と稱する短き袖ある胴衣を着す。此衣服夏期には甚だ細柔なるを用ひ、冬季には巧に綿を入れたる粗硬なるを用ふ。

靴には踵なく、スリッパーの如し。拇指と第二指との間に固着せる角の環あり。彼等は金の刺繡ある扇を持ちて日光を防ぎ、又熱き時は涼を取る。身分ある人は傘卽ち天蓋の下に威儀を具して歩行す。然れども平人は冬夏とも露頂にして、寒暑風雨を事ともせず。

彼等の中にては黑色又は緋色の衣服は勝利と歡喜とを表し、親戚故舊の死、其他の不幸の喪服としては白衣を着す。

日本人の習俗の歐洲人に反すること

衣服と食物とに於て彼等が如何ほど吾人と背馳するかを述ぶるも、輙くは信を置かれじ。嗅覺につきて言はば、歐洲に取りて最も快く芳しく佳香と感ずるものは、彼等には腐肉の惡臭の如く、又その他の嫌惡すべきものの如くに忌む。吾人が佳良とし美味とし良く調理せられたる食物とするものを、彼等は唾棄し嘔吐を起す。それと同じく彼等の甚しく推賞して美味なりとするものを吾人は大に嫌ふ。吾人は夏の炎熱に於ては冷なる清水を好めど、彼等は熱湯を飲み、且清潔なるものよりも泥など交れるを好む。聲樂或は器樂、歌謠、又は演劇にして吾人に最も快感を與ふるものは、彼等の耳には軋るが如く聞え、彼等は指を以て耳を塞ぎ、粗野不諧とするが如し。白色は世界を通じて齒の最良の色とする所なるが、彼等の齒も本來は象牙の如くなるに拘らず、之を嫌ひて故に人工を加へて黑色とし、其色の濃厚なるほど美なりとして誇る。彼等は此くの如く物毎に我等と正反對の趣向を有することなるが、乘馬につきても吾人は馬の左側より乘るに、彼等は右側より騎る。吾人は挨拶する時に帽子を脫すれども、彼等は靴を脫して足を露す。吾人は友人又は上長の人に敬意を表し、告別の語を以て挨拶し、或は他の尊敬の態度をなす時に起立すれど、日本人は下に座して尊嚴の態度をなし、他の言を發するを待つ。吾人は眞珠及他の寶石を貴重するに反し、彼等は之を砂礫とし、古き鐵と土器とを賞美珍重す。吾人は苦味其他の惡しき味は調理藥を以て之を除けども、彼等は好んで苦味を其儘に取り、吾人の馬を殺すに足る劇甚なるものをも顧みず。吾人は病人には消化し易き輕き食物を與ふるに反して、彼等は粗食に飽滿せしめ、鮮魚、鹽魚を別たずあらゆる種類の魚肉を與ふるを憚らず。患者の病氣の如何を論ぜず、すべて放血刺胳の術を施すこと無し。彼等は此等の反對の風俗習慣に根柢するこころ深く、且之を守ること頑强にして、其何故に然るかを訊かるる時は、彼等の主張を固守して敢然として爭論す。

殿と稱する最上資格

彼等は共同の習慣、其他人と人との關係及人間の同等に關する說に於ては我等に異なるものありと雖も、統治及權力といふ堅實なる一事に於ては、吾人が爲す如く漸次に高上して、吾人のと同樣の規則と術策とによりて之を建立し居れり。第一は此の組織の基礎にして、之を殿(Tono)と稱す。此は彼等が政治を行ふ各種の階級及地位に對する總稱にして、吾人の男、伯、侯、公、及王の如き差異あり。而して凡てのものは唯一の王卽ちエムペロルに服從して、之を階級の終極とす。此等は富力によらず、人數によりて統治す。彼等若し地方の統治者に選ばるる時は、人民は凡ての土地

を新民軍に與へ、唯彼等の地主たるより來る地代の僅少なる收入を保留するのみ。而して彼等は租稅又は義務を課せらるゝこと無く、唯祝日、他の季節及戰時に於て宮廷に出仕し、自費を以て彼を助くべきのみなり。

日本諸侯の權力

故に彼は縱令貧しくして何等の財寶の誇るべきものを有せずとも、平和の日に於ては彼の宮殿中に於て多數の侍臣の奉仕を受け、戰時に於ては强大なる軍隊を率ゐて戰場に出陣す。然れども此等の諸士につきて最も賞嘆すべきことは、彼等は唯總督たるに過ぎざれども、一たび選擧せられたる以上は專制政治を行ひ、如何なる非運又は死の恐怖、其他如何なる事變も彼等をして其稱號を捨てしむることなく、神及彼等の好運が彼に與へたる力を奪ふこと能はず。然れども老年に至れば私第即ち安樂の家に退く。此處には果樹園又は遊樂の庭園を周らし、彼は自身慰撫を享け、年齡に相當なる安易を得ると同時に、子息即ち繼嗣に命令して政府の楫を執らしむ。子息は其幼時より此目的に適するが如く教育せられ來れるものなり。

日本の僧侶

王に次で權力あるは神聖階級即ち僧侶とす。凡ての宗教上の事件を支配し、彼等の暴惡なる利權と忌むべき迷信とを命令す。彼等は頭と頤とを剃り、獨身生活をなし、言語、容貌、態度に於て眞に宗教的なる人々の儀容を具す。この神聖なる外見の下に於て凡ての淫慾、貪婪、及復讐を行ふ。然れども盲目なる民衆は彼等を信仰の權化なるが如くに思ひて、此外貌のみ神聖なる惡魔を支持する爲に如何なる費用をも惜むこと無し。彼等は他の職能中に就きて葬儀殊に貴族の葬儀を行ふに深く注意す。彼等は教會の人としてのみならず、式部官の如き態度もて凡ての秩序及儀式を以て之を按排し、柩前に立ちて進行し、死者の爲に新作の弔歌を歌ふ。

彼等には數種の宗派及結社ありと雖も、凡て坊主(bonzi)と稱せらる。多くは貴族名門の子弟にして、必要に迫られて僧籍に入れるなり。

日本に於ては青年教育の爲に數個の學校及大學あり、之を維持するが爲に大なる歲入を定む。

此等の宗教界の人々は往時は彼等の間に最高の名譽を得たりしが、基督教の說かるるに至りし以來其教義の爲に彼等の面皮を剝がれ、其恐るべき姿の眞相を露見せられ、以前の評判を失墜せるのみならず、彼等の嘗ては賞贊者たりし人々の爲に寧ろ厭忌せらるるやうになりぬ。

市民は第三級を成す　商人は第四級　農夫は最下級

第三位に在りて名譽ある者は貴族及市の吏員なり。

其次に來るは商人、職工にして、職工は其技術に精巧なり。主要なる市には多くの通告者詰所及印刷所あり。

最下級は農夫及田舍の仕事をなす者なり。此等は貧困なるが故に、極めて多數なる富者の下に勞作す。

日本人は慧敏なり　忍耐あり　名譽心强く侮辱せらるるを厭ふ
怒を隱し訴訟を作さず　諍論せず　何故に此く堅忍なるか

此等の人民は多くの美德を備ふ。第一彼等は溫和にして親切又愛想よき性質を有し、理解速に記憶强く、想像に敏なり。堅實なる判斷と學問を解する能力とに於ては東洋人の多くに超ゆるのみならず、西人にも超ゆる所あり。田舍の人及其小兒と雖も、丁寧にして禮儀ある擧動等に於ては、鄙人と謂ふべからずして寧ろ貴族の如し、彼等は羅甸語及機械的又は理論的なる精巧なる技術を學ぶこと歐人よりも速なり。貧困なることは恥づべきことに算へられず　又他より此が爲に侮辱せらるる等の事無し。彼等は家を淸潔に整頓し、然る後相當の裝をなして外出し訪問をなす。彼等は凡て嘲罵

することを嫌ひ、高聲にして傲慢なる言語を用ひず、偸盜、無益なる誓言、其他之に類する亂行をなさず、常に名譽と好評とを得んと欲す。故に上長者又は彼等を權力の下に置ける人々に對しては、信じ難き程に尊敬の態度をとる。彼等は面目又は正直の點に關して疑問を挾まるることに堪へず、恥辱となり非難となることを忍ぶ能はず。若し誤りて嫌疑を蒙れば罪人となりたるが如くに感ず。故に彼等の中の最も賤しき者と雖も、相逢ふや互に敬意を表することに留意し、人の在らざる時、そを惡しざまに言ひ、又は侮辱的に其人の事を語ることを無し。貴族の談話の大部分は互に他を推賞するに費され、常に彼等の多くの貴き行爲、多くの美德を追想す。最も賤しき職工又は日雇者と雖も、之を或仕事に雇入れんとする時、彼等に對して尊敬を以て語らざる時は、憤然雇主の申込を拒絶し、其仕事を輕蔑す。彼等は凡ての爭議喧嘩を避けんが爲に最もよく警戒し、最も深き注意を以て行動す。若し二者の間に舊き怨恨ある時は、之を口舌に現さず、唯悲しげなる又は不滿足の顏色を以て此を示す。而して正邪如何に拘らず彼等の主張を爭ひて仲裁に委することをせず。速に之を捨つ。彼等は多辯を以て身分ある人に似合はしからぬ行爲と考ふ。故に街道を通行する普通人の間には口上の爭鬪無し。夫婦、父子、主從の間には少しの不和もあらず。かくの如くにして彼等の事件を靜肅と沈默とを以て處辨す。若し小破裂を生ずる時は、友人之を調停して直に和解せしむ。而して非行者を罰することありとも(稀にあるのみ)、凡ての口汚き言語を發することを差扣ふ。彼等は歐洲に於けるが如き裁判所又は他の法律を有せず。彼等は私の復讐をば公敵に對する戰爭に於て費す爲に貯ふ。彼等偶然に相會し或は公私の饗應に於て坐する時は、家又は外に於ての苦難又は不幸につきても、或は如何なる事に關する損害につきても、愁訴めきたる言をなすこと無し。而して彼は如何にも喜ばしき容貌を以て、心を刺すが如き悲痛、腸を斷つが如き哀愁を蔽ふ驚くべき能力を有す。此くの如くにして彼等は必要なる又は時宜に適せざる愁訴を以て、互に相苦しめ相惱して、以て同席の凡ての人を妨害することなし。若し彼等の友人が何事なるかを問へば、巧に假粧せられたる微笑を以て之を外づし、或は事實の一少部分を告ぐ、恰も告ぐるの要無きが如し。然れども若し(極めて稀に有るが如く)其實無きに嫌疑を受け、或は侮辱的叱責を蒙ることあれば、如何ほど內心には苦しむとも、毅然として面色を變ぜずして之を忍ぶ。恰も之につきて寸毫も關する所無きが如し。此等の性格の源泉は人事をば不定にして變化多きものと考ふる大なる謹愼及溫和なる氣質に在るべしと判ぜらる。蓋し此國にては他國に於けるよりも機運の轉變甚しく、身分の昇降急直にして、乞食も王侯となり、王侯も貧困の最下級に墜落することありて、運命の飜弄は其極技を盡せり。彼等は之に熟し、之に慣れ、最高の位置に在りて最低の狀態を常に記憶し、回運の爲に心を惱さず、如何なる變化をも之を甘受して、以前より夙くに豫期せるものの如し。然れども是れ年齡又は經驗によりて得たる美德とはすべからずして寧ろ天性なり。此傾向は小兒にも見つべし。そは小兒が其容貌と談語とに於て寬大なる精神を有することを示せばなり。然れども彼等は常に此好性質を示すに非ず。彼等は亦多くの惡德をも有すれば、吾人の上陳し來りたる凡てのものは僞善にして、寧ろ劇に於ける巧妙なる演技とする方何よりも適當なりと考へ得べし。

日本の宗教は忌むべし

彼等の宗教卽ち忌むべき偶像崇拜及迷信は、多くの勸說によりて彼等の惡德を熱心の上衣の下に陰蔽するが如く彼等を傾かしめたるのみならず、又彼等の神たる惡靈の鼓舞により、彼等は殘虐、流血、其他を喜ぶことも想像し得。而して之を勸說するものは僧なり。

僧侶の主義

此等の僧は彼等自身の間には異同あれども、靈魂の不滅に就きては凡て相一致す。或者は公に會衆に對して說き、他

の高き階級にある者は彼等の神的教義を教込み、貴族の家又は王公の家族に對して禮拜堂預りたり。然れども彼等の附屬する此等上流社會に對しては、來世に於ける罪人の罰に就きては殆ど何事をも說かず、唯一般の說敎師は普通民衆に對して公に之を說き、常に地獄に於ける苦難及永久の處罰を以て聽衆を驚かす。

阿彌陀と釋迦　ホトケとカミ

此等の二種の階級以外に他の一階級ありて、常に其題目を阿彌陀と釋迦との賞贊に取る。此二佛は彼等の救世主にして、其上に彼等の信仰を立て、又彼等に法律たり福音たるものなり。彼等は常に艱難に處しても、又歡樂及幸福に在る時に於ても、祈願せざるべからず。卽ち阿彌陀及釋迦に祈り、其德によりて彼等の罪と非行とを洗ひ去ることを許されんこと、且之によりて彼等の靈魂が永久の福祉を得んことを願ふなり。此等及他の優れたる神を彼等はホトケと稱す。彼等は又ホトケより下級のものを信ず。卽ち彼等は現世の利益、健康、富貴、小兒、及凡ての變り易き幸福のみの爲に之に祈る。之をカミと稱す。

神となる人間　日本人の邪惡

彼等のカミは既に多きが上に常に其數を加へ行く。其大部分を成すは王公なり。或王にして大事業又は勇敢なる行爲の爲に名譽を博し尊敬せられたる者死すれば、彼等は葬儀の禮式の中に之をカミの列に安置して登錄し、其後常にカミとしての禮拜をなす。恰も古代の希臘、羅馬人が偉人英雄に對して爲したるが如し。彼等も希臘、羅馬時代の神マルス、バッカス、ヴィーナス、マーキュリー等に似たる神を有す。初には此等を善行の模範とし、後には淫慾、亂醉、其他忌むべき非行の保護者と呼ぶ。

他の外見的美德の中には特殊の才能を見つべし。卽ち彼等は容貌態度に於ては常に敬虔及純粹なる熱心の唯一實行家たるが如く見せかけながら、其胸中には各種の邪惡なる計畫を蓄へ居ることなり。彼等は最大にして最烈なる惡意を有して無殘なる復讐をなさんとするに方りて、猶微笑し、追從し、言語、容貌、態度に於ては相手に對して尊敬と慈愛とを有する外何等の禍心をも藏せぬことを示す。是れ日本人には尋常事たり。此くして若し誰にても正直に公明なる行をなし、思へる儘に語り、約束を果すときは、笑はれ者となり了るなり。

小事故によりて相殺す

復讐は彼等に快感を與ふること甚しく、路上にても或利益ある最初の機會あるときは對手の背後に忍び行き、刀を拔きて之を斬る。第一の打擊に失敗すとも、第二の太刀には彼を斬殺す。此を終ふるや、殺人者は刀を拭ひて鞘に納め、滑稽事なるか又は何等の事も爲さざるが如くに悠々として立去る。時には何等の爭も無きに、唯一時の戲として、自己の所持せる刀刃が柔軟にして他人の首を斬るに方りて鈍り又曲らざるかを試むることもあり。

降伏者を虐遇す

軍隊の力によりて奪取せられたる都市村落は悲しむべき運命を有す。彼等は人を宥免すること無く、老幼、婦女及地位にも無差別に殘虐を加へ、慈悲も無く斟酌も無く、一齊に屠殺し去る。此と同樣に或黨派又は軍隊にして戰場に敗るる時は、一人も其場を脫する者無く、現場に奮鬪して死す。若し逸走する者あれば、民衆の爲に無殘に殺戮せらる。彼等は味方なると敵方なるとを論ぜず凡て落伍せるものを見れば、之を殺すに躊躇せず。唯彼等の着衣を剝取りて所有物を得んと欲する外には何等の理由もあらず。竊盜は彼等が嫌ふことなれども、劫掠と流血とは彼等の榮譽とする所なり。故に全國は剪盜が奪掠の爲に行ふ殺人の下に苦しみ、海上は亦海賊の爲に甚しく惱まさる。

婦人の無慈悲

婦人は子に對して不思議にも無慈悲なり。何等の母らしき愛情なく、柔弱なる嬰兒をば出産前に、又は之を爲し得ざる時は出産後直に殺す。此目的の爲に佛僧は彼等の良顧問として墮胎せしむべき飲料を敎ふ。若し自然の力强くして墮胎せざる時は、其出産後直に嬰兒の頸を踐みて之を殺すこと殘虐なる虎よりも甚し。此は彼等の普通に行ふことにして、之を養育し又は敎育するの面倒を見るを嫌ふより起り、然らざれば貧困の爲に之を支持するを得ずと考ふるに因れり。

貧窮者は死す

病人、跛者、及癈疾者又は旅行者に對しては公設の病院も無く、又私設の收容所も無し。彼等は寒き天空を屋蓋として凡ての人を離れ、凡ての人に見捨てられて宿泊せざるべからず。此くして病氣自然に快癒すれば佳し、否ざれば死す。死したる時は腐肉として塵塚の上に捨てらる。

刑罰

凡ての犯罪に對し彼等は只三種の刑罰を行ふ。卽ち足蹠を打つこと、追放及死なり。首は彼等の眼に觸れざる劍を以て切斷せらる。然れども或地に於ては盜賊は最大の罪人と看做されて車に乘せて引廻され、その後に磔刑に處せられ、市に近き大道に在る十字架に釘付けにして之を放置せらる。

謀叛者の處刑　自ら腹を割く

謀叛又は暴動計畫の嫌疑ある者を生ずる時は、國王は一隊の士を送りて其家を圍み、少しの間隙も無きやうにして何人も脫出することを得ざらしめ、然る後彼等に二條の提言をなす。卽ち自殺するか又は降伏するかなり。之を承認すれば熱せる鐵を以て烙痕を附し、何處に往きても以前の謀叛者たることを識別するを得しむ。然れども若し自ら處刑することを擇べば、彼等は腹部を剖く。彼等は往々珍しき勇氣を以て恐るべき方法により横に肚を開き、內臟の露出する時直に己を斬らしむる爲に頭を低れ、仕人の一人をして斬らしむ。彼等は此仕人を以て彼等に對し最上の親切心を有するものとす。他の敎唆者又は共謀者は主謀者を先立てて生殘することを恥とし、彼等の間に二派を作り、奮鬪して互に相殺す。

他の多くの急變殊に名譽に關する私爭に於ても同樣のことをなす。小兒と雖も兩親の機嫌を損ふか或は之に類する不親切をなす時は、絕望して腹を剖くに至る。

彼等は法律を有せず

彼等は貿易賣買をなすに何等の法律規程を有せず、取引者の欲するが儘に放任せられ、約束の認知無く、契約の署名無く、約定の條款も無し。都市に於ては從來の市民は新來の外人より以上の特權を有せず。商工業者は會社を作らず、同業組合又は告訴すべき法廷も無く、又判事或は陪審官の審判を受くることも無く、負債者を拘束すべき制度もあらず。凡ての爭論は武力に因りて決定せられ、王の專制權によりて判決せられ、之に對して上告の途あることも無し。

此等の王は部下の貴族の上に絕對の權力を有し、若し彼等の首を欲する時は、何等の審問をも爲さずして與奪を縱にす。是と同じく貴族は其官人を支配し、官人は市民を支配し、市民は自己の家族の上に同樣の權威を振ふ。

諸侯と其臣下

此等の王は金錢を拂ひて雇へる外人又は傭兵を有することも無く。唯臣下の愛護心に依賴するのみ。然れども彼等は其凡ての國土の保管者として之を領し、且全民軍を外人として統率するが如き名譽と服從とを受くることを期す。宮中に在る時も、步行する時も、王は常に一定の護衞兵に圍まれ、此護衞は凡ての請願者を隔つ。若し人ありて大困難を

冒し彼等の抑損せる上奏をなすことを許さるるとも、王は單に一顰又は一點頭をなすのみにて答詞を與へず、然らざれば文書を以て應酬するのみ。

諸侯は往々位地を奪はる

然れども王は斯く偉大なるに拘らず、若し人民憤怒の餘り彼等に對抗して叛旗を擧ぐれば、彼等は孤獨となり、援助軍を募集することを得ず。然れども時には臣民の間に分裂を生じ、一派は勤王軍にして王の味方となり、一派は民軍にして人民の爲に擁護的の武器を執り、其結果戰鬪となることあり。其成功如何によりて王は位を退き、又は舊位に安んずることとなる。人民勝利を得て新に王を選擧するに至る時は、競走者を指名するに方りて往々彼等の間に新衝突起り、之によりて再び大戰爭を生ず。時には此紛擾の後結局其破綻を縫合せ、王冠と笏とに關する凡ての問題を調停する爲には、彼等は再び以前の王を戴くの止むなきことあり。通例最も峻嚴苛酷なる君主、王位を最も鞏固に保ちて最も長く位に居る。然れども記錄を案ずるに長く王位に在る者は少くして、一家系にして相繼承するものも亦僅少なり。

日本は初は唯一の君主内裏に統御せられたり

日本が往時繼續せる君主に支配せられしは確にして、其最後のものは王(Vo)或はダイロ(Dairo 内裏の訛)と稱せられ、長き時代に亙りて平和に治めしが、温和靜安なる性質なりしにより、彼の貴族卽ち大臣中の二人の粗暴なりし者茲に野心を逞しくし、帝國政府を分配して占有せんと共謀するに至り、彼等は其高き地位よりクビ(Cubi 公方の訛)と稱せられたり。かくて彼等は適當なる機會を待ち、計畫を實行して大叛軍を起し、幸福なる長き平和を維持し來りたる政府の蝶番ひを逆轉し紐帶を錯置し、劇しき内亂を起したり。其成功は惡しき側に落ち、エムペロルは以前の權勢を多く失墜したり。然れども此惡事を働きたる兄弟は絶對的命令權を横領したる後、間もなく彼等の間に衝突を生じて、双方同等なることを許さず、第二の内亂起りて、一は破られ他は全支配權を握れり。

内裏の特權

然れどもダイロは今日に至るまで榮譽の源泉たるべき權力を保持し、凡ての地位と品位との稱號及階級は其手より出づ。而して之を受けたる人々は凡て彼の代理者たるが故に、年々の貢物を受け、其大部分は彼の宮殿及從者の壯麗及光彩の爲に費消せらる。

日本人の主長

諸王中第一位に在るは、現在日本の君公中最も顯著に且最も有力なるハシバ(Faxiba 羽柴)卽ちミヤコ及普通タサ(Tasa)の名を以て知らるる領地の大王なり。

此王冠は王ヌバナガ(Nubananga 信長の訛)に屬せるものなりしが、ハシバは其與黨某々と共に之を奪ひ、彼の妻及子孫を滅したり。ヨハンネス・ペトルス・マッフェウスが語る所凡そ以上の如し。

* * * * * *

蘭使フリシウスと總督代理ブロークホルストとの合同

今餘談を休めて前に記述したる我が使節一行の事に及ばんとす。アンドレアス・フリシウスはバタヴィア顧問の命令により、若し不幸にしてブロッコヴィウスに事ある時は、彼に代るべきことなり居りしが、長崎に在る蘭國住民の民長は多くの重大なる討論を重ねたる後、デリック・スネックスの不在中總督代理たるアントニウス・ヴァン・ブロークホルストが使節一行中のフリシウスに合同することの便利なるを知れり。此が爲に凡ての準備は長崎なる東印度會

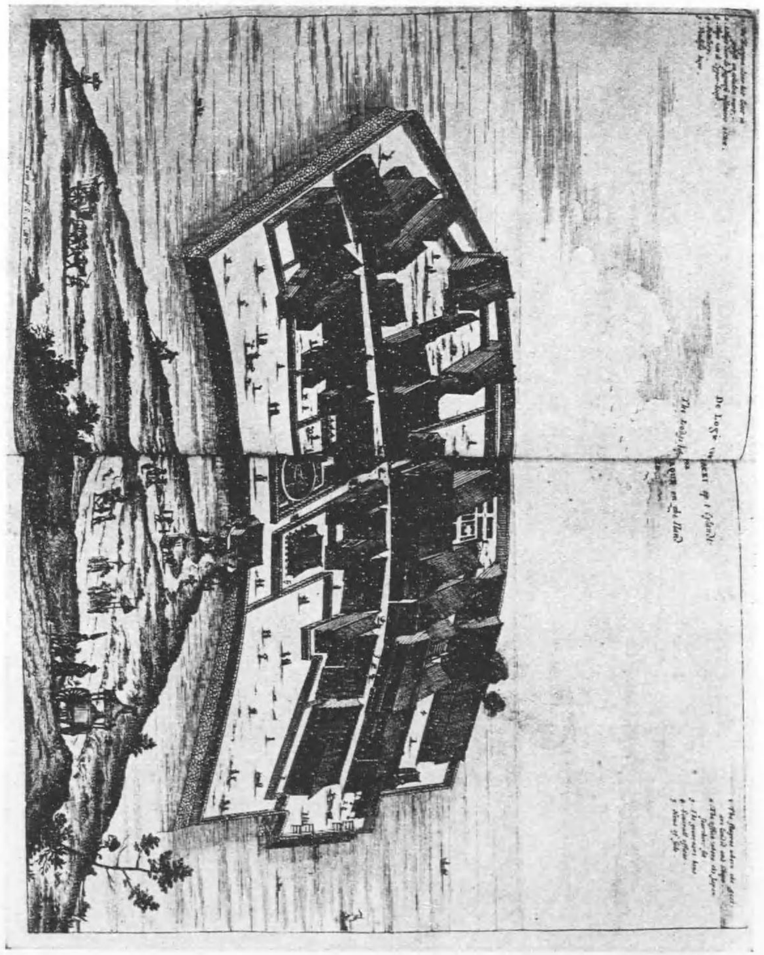
社の倉庫内に於てせられたり。

長崎に於ける東印度會社倉庫の記載

茲に長崎に近き日本に於ける蘭人の主なる市場と居留地とを約説するは誤にあらずと信ず。荷人初め此地に定住することを許されし時は、城塞即ち建物を水中より作りたれども、其日本より追はれ、蘭の平戸より此地に移轉することを命ぜられし後は、荷人の殘したる荒廢せる館舍に入ることを許されたり。

此館舍は小島に在り。長崎とは幅四十呎の河を以て隔てられ、之を越ゆるには刎橋を渡る。其長さは洪水に對する懸念より百五十歩に及べり。

此島即ち城塞は四方ともに堅固なる木柵を以て水を防けり。内部便宜の場處に壯嚴にして設備完全なる總督住宅あり。刎橋の門に近き處に賣場即ち事務所あり。此處にて彼等は諸種の貨物を賣る。他の一方には快適なる庭園ありて、各種の花卉を以て飾れり。二條の十字路は全體の城塞内に通ず。其兩側に手頃の倉庫ありて、商品を納れ、且包裝するに適す。島の入口に近く第二の門あり。此處にては貨物の梱を船積し又は揚陸する爲に、美麗なる階段一對あり。館舍の中央は平坦にして、廣敞なる中庭あり、周圍には家屋建てり。此處に商人來りて下記の貨物を賣り、又は物品交換を行ふ。即ち白生絹、バンスセンス (Pansjens)、ペーリンクス (Peelinx)、ギーレムス (Gielems)、チオンス (Chions)、ガーゼン (Gasen)、スモングス (Sumougus)、フランネル、染めたるブロカーデン (Brokaeden)、繻子、支那ファビタス (Fabitas)、緞子、チオウェレンス (Chiowerens)、麻布、シットクローズ (Sit clothes)、ソーイング絹 (Sowing silk)、絹ピー (Silk-pee)、ナムラック (Namrack)、ジャバン木 (Japan wood) 黑砂糖、カンボヂャ胡桃、カイマン・スキン (Caiman skins)、赤鞣皮、伽羅、カポックス (Capox)、蠟、白砂糖カンヂー、銅、綿、スブレマクト、(Sublemact)、カシ



出島の長崎駐館

ア(Cabzil)、リグヌム(Lignum)、西班牙綠色染料、磁器顔料、樟腦、カレンパック(Calemback)、麝香、陶器、鹿皮、牛皮、紙、胡椒、象牙、アゲル材(Ager-wood)、凡て此等は支那人の長崎に齎すものにして、他の國民は尙多種のものを持來る。長崎に於ける蘭人の商業取引に關してはエムベロルは次の命令を同市の奉行に下せり。

日本エムベロルの長崎貿易に關する命令

「汝人民よ、汝等は知るべし、我が日本の船舶は何れかの外國に赴くが爲に積荷することを許さず。若し斯くの如き潛に罪を犯す者ありて汝等之を捕へたる時は之を殺し、唯船舶と貨物と船長とを殘して、我が更に沙汰するを待て。而して此命令の發布後、我が臣民の何人たりとも、外國より歸りたる者は、之を死刑に處せよ。基督教の傳播者たる凡ての僧侶につきては嚴重なる調査を爲よ。此等の誘惑者を捕へたる者は銀百枚を賞賜せらるべし。彼等の居處を告ぐる者も亦賞賜を受くべし。我が船舶にして入港せるもの此命令に從はざる時は、援助としてオメラ(Omera 大村)に在る我が守衛兵を招集せよ。貨物は何人にも買占をなさしむべからず、多くの人に賣るべし。我が貴族又は軍人は何人も外人と直接に交渉すべからず、日本商人の手を經て買取るべし。船貨或は積荷證書は船荷を開き又は其中の包物を賣るに先ちて我が官憲に提示すべし。市價は生絹の各種につきて之を定め、之を五部市に公告すべし。然る後凡ての他の商品は自由に販賣することを許可す。凡ての商人は何事を契約すとも、二十日間には支拂を爲すべし。凡ての外國船は九月二十日までは出發し得べし。期に後れて入來れる船は貨物を揚陸する以前五十日間停泊せざるべからず。凡ての商人は帝國の五部市より七月五日に長崎に赴くべし。若し之を果さざれば絹の市場より彼等の分前を除かるべし。加何なる絹を平戸に運ぶとも、之を長崎に於けると同價に賣るべし。既に言へるが如く如何なる貨物も絹の價格の確定するまでは市場に出すべからず」と。

此命令は一六六五年に接手せるが、其奥書は次の如し。

「寛永十二年、日本のエムペロルより長崎に在る我が官吏センゴク・ガンマタネカミ(Sengok Gammatane Camy)及サッキビバレ・アンダノカミ(Sackibibare Andano Camy)。」

此命令は五老中の署名あり。其人々はコンガオカミ(Congao Camy)、ボンゴナカミ(Bongona Camy)、インハノカミ(Inhano Camy)、サンニキノカミ(Sannikino Camy)、及オエモカミ(Oyemo Camy)是れなり。

蘭國使節長崎を發して江戸に向ふ

一六四九年十月二十五日午後アンドレアス・フリシウス及びアントニウス・ヴァン・ブロークホルストの二使節は出發せり。之に隨行するもの蘭人二十名、佛僧三名、通譯三名、日本人三十三名。此一行三隻の船に同數に分乘して長崎を離れたり。

此郡市はブンゴ一名シココ(Cikoko)の島に在り。

日本の漁夫　漁撈の方法

灣外、長崎より約六リーグを隔てたる處、江戸に赴く途上にヴヴォス(Duvos)と稱する漁市あり。此地及日本の多くの地に漁獵する者は脚の半まで長靴を穿つ。其狀恰も歐洲古代のバスキンの如し。船中には枝編細工の籠を置き、此中に捕へたる魚を生きながら入るるなり、彼等は各種の漁獵の方法を知り、枝の長き列を有する一種の投網を用ふ。彼等は尚一種の漁獵法を有し、主に鯡及シタンに用ふ。シタンは常に水底に近づき居るものにして、其網の底に餌を置く。さて長崎より遠く進むに先ちて其位置を一瞥せん。

長崎の記載　市街及寺院　各街に門戸あり

日本人の漁撈法

此市は北緯三十度に在りて便宜なる港に近く、後者は日本の何れの港よりも商船を入るるに適せり。市は廣大にして亦人口も多けれど、日本の多數の都市と異なりて城壁も壘塞も無し。

高塔樓閣は尋常の家屋の上に高く見えて、此市に與ふるに莊嚴にして愉快なる外觀を以てす。殊に海の方に向ひて然り。海上よりは宏壯なる建物の多き街路を見渡し得べし。

市は數流の河を以て分たれ、多くの木橋之を連結す。街上は鋪物無く、雨天には汚くして歩行に惱まし。各街には大なる門あり。毎夜之を閉ぢ、番人ありて之を監す。故に夜更けては盗賊、殺人、又は他の狼籍の行はるること無し。

長崎の家作り　家屋を高く作らざる所以　庭園

彼等の家は構造概ね一定してはあれど、材料に至りては建築者の能力に從ひて異なれり。大概木材を用ふ。然れども下層者に在りては粘土をかけたる稻藁を以て壁とせる陋屋を建つ。かくして藁は密に其目を塞がれて雨風を防ぐべし。然れども、富者に在りては劃壁を漆喰として基礎を地上四尺まで盛上ぐ。巧に縫合せたる厚き蓆を以て蔽はれたる板張あり。家は脆弱なる建築にして方形をなし、大抵高さと幅と等し。そは此國に屢〻起る地震の爲の破壞を防がんとして家を高くせざるなり。屋根は殆ど平にして稍〻傾斜あり。四呎ばかりは壁より外に突出して差掛小屋の如し。其下に入口あり、之を經て庭園に出づ。庭園は人工的なる岩石と常緑の樹木とを以て飾られ、人は食事室に於て心地よく之を見るなり。前に記したる差掛の構造は日光と雨とより街道の歩行者を護る。此等及屋根全體は互に締合せたる板より成り、容易に雨を運び去る。其上に木鉢及桶ありて水を受け、不時の失火の用に備ふ。彼等は凡て第一階に住む。二階及其上は低くして、雜用具を入るるにも適せぬ程なり。

都市は火災に惱まさる　上流者の建物は莊麗なり　屋内の裝飾

最大の村も最小の村も斯くの如く木造なるを以て、火災の爲に惱まさるること多く、時には莫大の損害に及ぶ。故に富者又は能くし得る者は石造の倉庫を別に建て、此處に彼等の貴重なる什物、商品を納る。家の燒失したる跡には直に前と同樣に木造の家を建つ。木材は森林より多量に供給せらる。彼等は石を用ふること殆ど無し。若し地震に倒さるる時は、無用物の大堆積をなし、之を除去するの煩に堪へざればなり。紳士又は上流者は大なる美第を有す。夫妻は各別に數室を有ちて欲するがままに別居し、又別に業務、應接、饗應の爲に用ふる室あり。食事室は皿杯を以て飾り、恰も銀屋の店の如くに燦然たり。器具は鍍金せられたるもの多きを以て、我が歐洲の卓拔なる繪畫よりも見る目に一層多樣の愉快を與ふ。然れども廣間及客室の壁は壁掛を用ひずして繪模樣を畫きたる紙を以て張る。其紙は巧に繼合され、何人も何處に繼目あるかを知る能はず。此等の廣間には巧なる扉あり、之を開けば押入あり、又小さき閑室に通ず。然れども此等の戸卽ち開くべき場處は巧に作られたるが爲に、何人もそれが堅き完全なる壁と思ふの外無し。廣間の上段に寫生の大繪畫あり、其下には花瓶ありて、常に自己の庭園より集めたる佳香ある花を插む。座すべき矮壁に沿ひては椅子又は腰掛の代に箱あり、巧に印度風の假漆を塗る。其上に彼等の賞玩する椀あり、此を以て彼等の愛好する茶を飲む。此外には壁上に兩刀及他の武器を掛く。是れ彼等が戰爭に使用するものにして、貴族及上流者の所有する最良且最貴の家具なり。下流の人民は其分と力とに應じて各其住居を飾る。然れども彼等の家屋の正面は粧飾なく尋常なり。

長崎の街路の數　夜間街道を通過する者無し　失火の節各街相救ふを得ず

街道は狹く短く、其數八十八あり。同數の門ありて、毎夜之を閉づ。各門には燈火を點ぜる强力の護衞あり、市の奉行の印章ある許可證無ければ、何人も之を通過するを得ず。之無ければ、醫師が患者の宅に、又助産婦が産婦の許に至るの途無し。又一市街に失火ある時他よりの來援を期し得ず、自己の注意と精勵とによりて自ら救はざるべかず。今や火を被りて灰とならんとする人々の叫喚も悲涙も高聲の愁嘆も、隣街の人又は奉行の心を動かし、門を開きて此憐むべき狀態に在る者に援助を與ふることを得ず。之が爲に全區の男女老幼ともに一の火葬場に燒かるることあり。此悲しむべき運命は或街に宿泊したる蘭人の身上にも起らんとせしことあり。燒失の家屋一時に二十戸に及び、多くの人々は彼等の眼前に死せり。彼等は門の開かるる望無く、他の者と共に火災の苦患を忍ばざるべからざるを見るや、木柵ありし後部を無理に破りて、辛うじて災厄を脫したり。門の錠と鍵とは隣保の援助を妨ぐとも火災を防ぐこと能はざること屢々にして、全市は廢墟の中に煙りつつ倒るることあり。但し彼等が一度失へる市街を以前と同樣に再建することの容易なるは旣述の如し。近傍の森林は其爲に諸種の木材其他の材料を供給するが故なり。

長崎を圍める庭園　長崎外園の杉

此市は又大なる庭園を以て圍まれ、其快美なること何時までも見飽かぬ程なり。各種の果物は色々の手當を施されて盛に生長し、殊に移殖せられたる支那林檎及諸種の梨あり。此處には又杉を以て陰を作れる散步道あり。其高き頂は天に參す。其幹は一本を以て殿堂の柱となすべく、大容積の船舶卽ち海上の君主の帆檣となすに足る。

長崎の殿堂

殿堂も亦木造にして、普通四十呎平方に作られ、附屬の樓あり塔ありて巧に彫刻し鍍金せらる。其數は甚だ多く、ただ大なるに至らざれども、想像的技巧を以て快感を與へ、又頗る華美なり。屋根の各隅には龍立てり。堂內には數個の像あり、人間よりも大にして、容貌恐るべき巨人に類す。日本人は堂に入れば、此等の像に對して簡短なる祈禱を

なす。供物の盆にカシウス(Casius)と稱する銅貨の小片を入る。

長崎住民の外貌及服裝

住民は印度人よりは色白く、歐人よりは淡黄色なり。強くしてよく緊りたる身體を有し、鼻は平く凹み眼は小し。殊に婦人に於て然り。男女大抵同樣の服裝をなし、長き衣類を着く。然れども支那人のよりは短し、其上衣の隅を手を以て取上げ、右の裾を左腕の下に、左の裾を右腕の下に持行き、其上を帶を以て締む。斯くの如く外衣を結び上ぐる結果左の隅は自然に胸部に於てポケットを供す。其中に覺書又は書類を入る。左側には帶より長き二本の柄ある刀垂下せり。

上流婦人の美服

上流及富裕なる婦人は絢爛華麗の衣服を着し。髪は巧に滑に梳られ、綺麗に上に向けらる。長き上衣は下流の婦人よりも一層寬濶にして、厚き弛き褶をなして垂れ居れり。啻に地質の優良なるのみならず、全體に金の刺繍を施せり。頸の廻りには大なる絹の衿卷ありて、胸の上に斜に相合す。刺針細工の帶は金銀絲を交へたる優麗のものにして、彼等の格好よき身體を繞れり。左手には大なる長き柄の扇を持てるが、其面には諸種の花鳥を描き、立派に鍍金し、漆を塗れるものなり。其長き上衣は(上に言へるが如く)美しく刺繍を施したるものなるが、其下には七八枚の絹の女袴を着く。其袴は次第を成して長短あり、最終の最も長きものは地上に垂る。凡て此等の衣服は之を日常に用ふれども重からず又煩しからず。然れども彼等は外出すること稀にして、家内に於ても客前に出づること無し。夕方に至りて好天氣なる時には、夫と共に少許の散歩をなすことあり。晝間は閉ぢたる轎輿の中に於て陸行し、或は幕を被ひたる小舟にて水上に出づ。

婦人の服裝

男女風俗

爰に使節をして更に日本を横斷して前進せしむるに先ち、此の廣大にして有力なる帝國の簡略なる觀察をなして、讀者の領解に資せんことは無益にあらざるべし。

四周　緯度　國土の區分　諸島

此廣き富みたる島を國人はニッポンと稱す。西班牙人は往年之をアルガンタナ(Argantana)と稱せり。基督紀元千二百年には(有名なる著作家パウルス・ヴェネツス(Paulus Venetus によれば)クリセ(Chryse)及ジパングリ(Zipangry)の名ありき。此地東方にはカリフォルニア及ニューグラナダを控へたれど、距離は甚だ大にして、其間には千リーグの大洋を介せり。西方には遙に隔りてコレア(Corea 朝鮮)の島及大支那(Great China)と相望む。ヒュー・リンスコット(Hugh Linschot)は支那より日本に廣がる最近の海角を八十リーグ隔りたりと算せり。北は蝦夷の地及アニアン海峽の地に對す。而して凡ての背後に亞米利加海岸あり。南はフィリッピン、ミンダナオ、ギロロ及モラッコ島に境す。

日本は北緯三十度より四十度に廣がり、最も長き晝は十四時十五分、最も短き晝は九時四十五分なり。最も高き太陽は正午に於て頂天を去る十五度に現る。氣溫はサルヂニア、ロードアイランド、キプルス、カンヂア及シシリア諸島と大差無く、葡萄牙、西班牙の本國に似、亞剌比亞、シリア、波斯、支那の如く溫和なり。

日本は五國に分る。卽ちヤマイステロ(Jamaystero 山城)、エッェンゴ(Jetsengo 越後)、エッェゼン(Jetsesen 越前)、カントー(Quanto 關東)及オーチオ(Ochio 奧州)なり。其他にサイコク(Saykok 西國)及びシコク(Chicock 四國)あり。マッフェウスはサイコクをシムム(Ximum)と稱して之を七國とす。然れども目擊者たるフランシス・カイロン(Francis Cairon)は之よりも信憑するに足る。彼曰く、數人の王此地を統治し、又シコクに一人の王と三人の副王とあり。此國のヂャバンと訛稱せられたる部分には二箇の主都を誇る。都(Miaco)及江戸なりと。マッフェウスは尙吾人に語りて

曰く、此國には五十三王國ありと。其中にミアコとアマングチウム(Amangutium 山口)との名を擧げて曰く、ミアコは二十三王國、アマングチウムは三十王國より成る。然れども近き比、凡て此等の小王國は一人の王卽ちエムペロルの合併する所となり、エムペロルは其宏壯なる宮廷を江戸に有せり。

尙日本はサイコク及シコクの外に多くの島を以て圍繞せらる。卽ちヒウ(Hiu)、タカスマ(Tacaxuma)、イキクチ(Jujuicuchi)、カンガ(Canga)、ヒランド(Firando 平戸)、メアクシマ(Meacxima 三宅島)、オエノ(Oeno)、コシケ(Cocyque 甑島)、ベロエ(Beroe)、オキ(Oqui 隱岐)ムルガン(Murgan)、アヴァンス(Avans 淡路)、メットガンマ(Mettogamma)、メホ(Meho)、ミアニシヌ(Mianisinu)、銀鑛の多キサンド(Sando 佐渡)、及西方にシコク及タカスマの二島を洗ふヂエモン海峽(Straighs of Diemon)の背に在りて屢〻恐るべき煙を噴出するヴルカニア(Vulcania)なり。

奥州

日本の東北の領域たるォーチォ(奥州)は蝦夷の廣き荒野に接す。此等を分界する入江は四十リーグ以上に出でず、オーチォの諸山に止められて其處に盡く。

大蝦夷の記載

山岳多く、高價なる毛皮に富める蝦夷の廣袤は未だ知られず。日本エムペロルは此地につきて注意し、其發見に苦心し、此目的の爲に自ら費用を負擔して多くの人を使用し、岩石及山岳又は殆ど足を入るべからざる場處を搜査し、廣き荒れたる國を深く探險せしめたれど、遂に窮極する所なし。彼等は努めて住民に質問を試みたれど、固より野蠻人なれば、彼等の住する地以外につきては何等の陳述をもなす能はず。此くて彼等は長く困難辛苦したる後、目的を遂ぐる能はずして歸るの止むなきに至れり。(譯者曰く此記事既に前に出づ。)

エスイト派の僧ロドヴィック・フロユス(Lodowick Frojus)は一五六五年二月二十八日付を以て印度の諸神父に贈れる書簡中に、蝦夷の住民に關して次の如く言へり。日本の最北部にミアコより約三百リーグを隔て甚だ大なる一國あり。野蠻人此處に住す。彼等は野獸の毛皮を着、全身多毛にして非常に深き髭及長き上髭を有す。飲料を採る時は其目的の爲に作られたる棒を以て上髭を搔上ぐ。彼等は貪慾にして甚しく酒を嗜む。又戰に勇にして日本人は之を恐る。若し偶然爭鬪中に負傷する時は、其唯一の療法は鹽水にして、之を以て彼等は傷を漬し洗ひ、後に之を飲む。懷には鏡を着く。此は楯又は胴甲の用をなす。彼等は劍を頭の廻りに結付け、其柄は肩上に垂るるが如くす。彼等は月のみを禮拜す。大都市秋田は蝦夷に境するゲヌエーン(Genuaen)の領内に在り。此地に蝦夷の土人多數貿易の爲に來る。又秋田の人も蝦夷に往けども、多數にはあらず。屢〻遮斷に遇ひ且住民の爲に虐殺せらるるが故なり。

蝦夷に關する地理學者の誤謬

世界の地圖は近比まで秋田より後には大洋の外何物をも置かざりしが、既に稍〻久しき以前よりヒュー・リンスコットは之を駁し、エスイト僧フロユスの言を以て證據とせり。フロユスは(日本に長く住居したれば)何等の所據も無きに單に傳聞によりて日本の廣袤を定めんとせる一般地理學者よりも一層信ずべき人なればなり。然れども日本は普通に地圖に畫かれ居るよりも遙に遠く廣がれることは明となれり。且江戸に在る日本エムペロルへ派遣の使節フランシス・カイロンは此國の廣袤は住民自身も之を知らずとのことを證せり。

故にマッフェウスが日本の長さを二百リーグとし、其最も廣き所を三十リーグに過ぎずと云へる、竝にクルヴェリウス(Cluverius)が其著せる地理書中に長さ百五十リーグ、幅七十リーグと云へるは何れも誤れり。

* * * * * * *

日本人の起原に關する臆說

日本人の起原につきては既に言へるが如く、祖先は支那皇帝に對して暴動を起し、荒凉たる日本島に追放せられたるものゝ云ふ說あり。然れども神父マルチニウスは其支那地圖中に於て此說に反對して曰く、日本人は支那人より出でたるのみならず、韃靼人よりも出でたるは、彼等が今も猶其兩族の風俗を保有せるによりて知らる。彼等は支那の宗教に從ひ、又衣服に於ても今日ホナン (Honan河南) と稱する支那の一地方にて用ふるものゝ同樣のものを着す。此地方が日本に植民するだけの人民を產するは寔も不思議にあらず。八箇の大都市と少くとも人口多き村落百箇を有すればなり。加之支那の年錄に載する所にては、此省は五百萬七千二百七十人を戰場に出すを得といへり。然れども日本人は習慣に於ては支那人と相類似すと雖も、彼等は風俗に於ては韃靼人を模倣す。其頭部を剃りて少許の毛髮を殘留する習慣あるのみならず、支那の國語に於ては認められざるDとRの文字(音の意ならん)を用ふと。

マルチニウスの日本人起原說

マルチニウスは尙曰く、支那の記錄に皇帝シオ (Xio 秦の始皇) のことあり、日本に一種の草を產ぜるが、若し皇帝にして之を得れば不死とならんと或人に欺かれ、之を確むるが爲に數人を此地に派遣せしかど、彼等は其國に還らずして日本に土着せりと云ふと。

豪族及其歲入

最後に此大帝國に屬する歲入に關しては、フランシス・カイロンの取りたる日本の王公の歲入の公記によりて明なり。

歲入は日本風によればコキーン (Cockiens古金?) を以て算ず。一コキーンは佛貨一クラウンに當る。フランシス・カイロンが此地に住せし時は最大の歲入を有せしエムペロルに次ける者はカンガ (Canga 加賀)、ゼッチュー (Zetchiu 越中)、及ナッタ (Natta 能登) の王にして、カンゴナチューナゴン (Cangono Tsiunagon 加賀中納言) と稱し、ランガ (Langa) 城に住せり。年々の收入は黃金百二十噸を下ることゝ無かりき。(黃金一噸は一萬磅なり。)

スルガ (Suruga 駿河)、トト (Toto 遠江)、ミカワ (Micauwa 三河) の國の王、スルアンゴダイナゴン (Suruango Daynangon 駿河大納言) はファイチュー (Faytsiu 府中) の城寨に住す。オワリ (Owary 尾張) 及ミノ (Mino 美濃) の兩國の王オワリノダイナゴン (Owarino Daynangon 尾張大納言) はナンガイ (Zangay 名古屋) の城塞に住す。各年々七万磅を有せり。

マサニネ (Massanine) 及オーチオ (Ochio 奧州) の王センダイノチューナゴン (Sendayno Thiunangon 仙臺中納言) は堅固なるセンダイ城に住し、年々黃金六十四噸以上を有す。

サツマ (Satsuma 薩摩)、オシナ (Ossina 大隅)、ヒューゴ (Fiungo 日向) 及ルチオ (Luchio 琉球) の王サツマノンチューナゴン (Satsumanon Thiunangon 薩摩中納言) はカガシマ (Cangasima 鹿兒島) 城に住し、年々六万磅を得。

キノ (Kino 紀伊) 及びイセ (Iche 伊勢) の王にしてワカヤマ (Waka Jamma 和歌山) の城を支配するキノクニダイナゴン (Kinocouny Daynangon 紀州大納言) は年々五十五万磅を有す。クマモッテ (Knumamotte 熊本) 城に在るヒゴ (Fingo 肥後) のカットー・ヒゴノカミ (Catto Fingonocamy 加藤肥後守) 及フカサ (Foucasa 福岡?) 城に在るスンキセン (Sun Kicen 筑前) のマツェンデイロ・エムノスコ (Matsendeyro Iemnosco 松平右衞門佐) 及オエクデ (Oeccle) の城塞を守るエチェセン (Ietchesen 越前) のマツェンデイロ・イノカミ (Matsendeyro Inocramy 松平氏) の諸王も大抵同樣の收入あり。

* * * * * *

ハギ(Fangy 萩)城に住するソヴァ(Sova 周防)のマチェンデイロ・ナガト(Matsendeyro Nangato 松平長門)、及ミト(Mit 水戸)の城塞に在るヒタイツ(Fitayts 常陸)のミトンスチューナゴン(Mittons Thiunangon 水戸中納言)、ロギオイス(Logioys)城を支配するヒジェン(Fisien 肥前)のナビシマ・シナノ(Nabissima Sinano 鍋島信濃)、タカハム(Takaham 高濱)城塞に在るイナバホキ(Inabafoky 因幡、伯耆)のマチェンデイロ・シンダイロ(Matsendeyro Sindairo 松平新太郎)は年々三十一磅を收む。

其他第二位の諸侯卽ち侯に當るもの、第三位の諸侯卽ち伯に當るもの等、以下差異あり。

* * * * * * *

エムペロルの宮廷費及後宮費

エムペロルの宮廷費は凡ての官衙の諸局と後宮とを合せて、年々の給與百四十萬磅なり。之に加ふるに近衞兵は尙之より多きこと十噸を要す。故に諸卿及官吏に要する給與及宮廷と民兵との維持費は年々黃金二千八百萬三百四十五噸を算す。

近衞兵の服裝

エムペロルの爲に兵役に服するものは大概は貴族にして、小き兜を被る。然れども袴は頗る大なり。彼等は時には短き、又時には長き銃を携ふ。我國のものと似たるものなるが、唯引金が外方に向はずして內方に向ふの異あるのみ。角製火藥入又は彈藥筒の代りに菖蒲又は葦にて作れる小き方形の籠を用ふ。帶には大小二口の劍を挾む。

蘭使長崎より海路大阪に至る　路次の諸市邑(蘆屋、小倉、下ノ關、室、姬路等)

武裝せる兵士

さて今や再びアンドレウス・フリシウス及アントニウス・ブロークホルスト兩使節の事に立返るべし。彼等は長崎より一六四九年九月二十五日に日本エムペロルへの獻上品を積みたる三隻の大船にて出帆したり。蘭人二十人、大阪より江戸に案内役たるべき佛僧三名、通譯者三名、日本人三十四名此外前記の使節二人を載せたり。

一行はやがてホヴェンダ(Hovenda)、ゾッタ(Zotta)、ナナトヤマ(Nanatjamma)を越えて、北方ヒランド(平戸)、オモダケー(Omodackey)、及オイシノクビ(Oysinocuby)の間を航行せり。此等はブンゴ(Bungo)(卽ち九州を指す)に在り。それよりアウオ(Auwo)、ヒミシマ(Fimissima 姫島)、及ギンカイ(Ginkai 玄海)諸島に達し、豐後海岸の左側なるナンガゴ(Nanggago 長門)を後にせり。

それよりアイミシマ(Aymissima)を風下にして、同處より東北十二哩に在るアッシア(Assia 葦屋)市を見たり。此市は白砂の海岸に在り、海上遙の處より之を見るべし。雲にも達せんかと見ゆる高山の在るによりてなり。次で彼等は有名なるイカミナンガノ・ミサッコ(Icaminangano-misacco)及コケロ(Cocero 小倉)市を見たり。同市は海の入江に在り。コケロ市は初めて見たる所甚だ目を喜ばす。二の郊外地ありて、一は市の上に、一は下手海の方に在り。此處に於て一行は航路を東の方海峽に向けたり。此海峽の水は北は日本を洗ひ、、南はシコク(Ghiekok 四國)及トンサ(Tonsa 土佐)を洗ふ。日本の左側にシモニシッキ(Simonisicci 下關)市あり。其中には小き城塞及之に對して高丘上に立てる堅固なる城あり。近くイサカ(Isacka)港ありて、之に二箇の村落附屬す。各四十戸あり。

前記海峽の中に多くの島を見たり。其中の多數は名も知られず。然れども向の端にメットガムマ(Mettogamma)あり、次にモッコ(Mocko)、ミアノシミ(Mianosimi)、及カメロ(Camero)あり。其間にカムメノサキ(Cammenosacci)市日本の海岸に在り。

東より西に亙る長き地域に日本の海岸にイコウェ(Icowe)、スワ(Szuwa)、カロト(Caroto)、コミナガリ(Cominagari)、及ヨコスミ(Iocosmi)の諸島を見たり。凡て村落を成して開拓せられ居れり。

カラトに對して此海峽の中央、日本ミトンサ(Tonsa 土佐、四國の意)との間に高山數峰あり。其山頂には各種の樹木を冠す。此處より彼等は正東に進行せり。左舷には日本海岸にタントノミス(Tantonomis)、メワリ(Mewari)、ビグナツム(Bignatum)、及ビンガ(Binga)の諸市あり。右舷には人の住せるシリアス(Syrias)島あり。それよりシメイア(Simeia)ヒサムニク(Sammic)との間、ウシマテ(Ousimate 牛窓)とウォタ(Wota)との間、イクシマ(Irsima)とムロ(Muro 室)との間を進み、强き潮流に逢ひて、之を通過するに漕手は大努力を費せり。

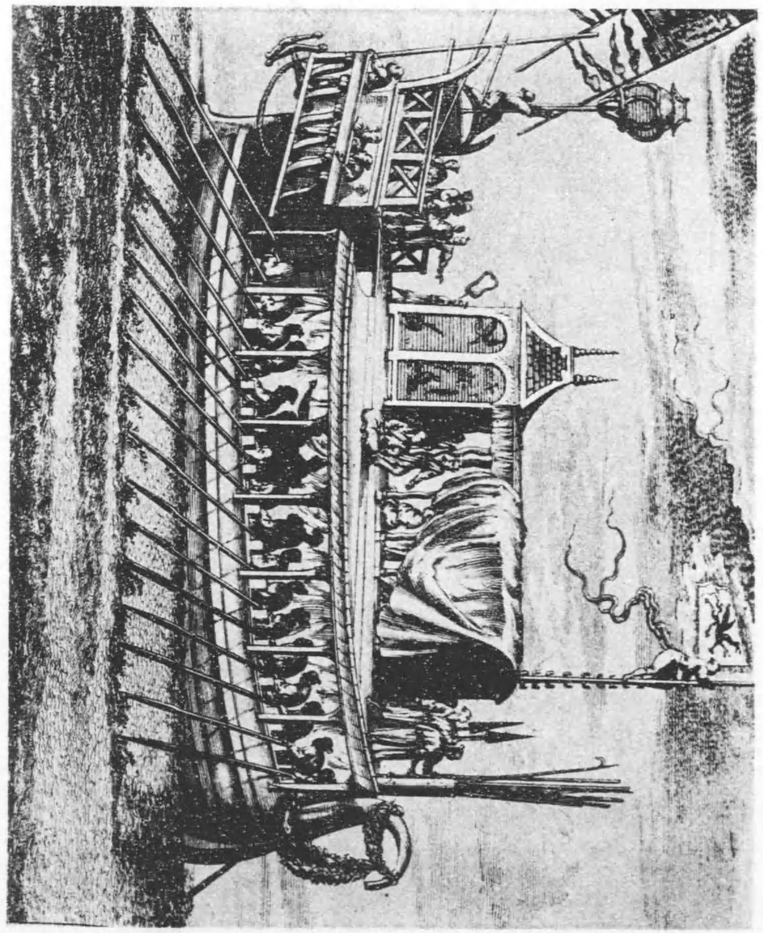
日本側に在るムロ市は立派なる港を有せり。其を越えて五哩にヒルメンシ(Firmensi 姫路)あり、莊麗なる市にして堅固なる城あり。その近くの海上は屢〻荒きことあり。此地と又アボス(Abos 網干)、タカシマ(Takasima 高島)及スウオヤ(Swoya 鹽屋)を左舷に後にして、ヒョンゴ(Fiongo 兵庫)に來れり。然れども風に逢ひて風無かりしかば、人々は綱を以て岸に沿ひて船を曳きたり。

蘭使大阪に着す

此よりアマナサキ(Amanasacci 尼崎)の海岸に沿ひて進み、一月十三日といふに十三日間の旅行を了へて大阪に來れり。河を溯りて大阪の郊外地アニシマ(Anissima)の前に碇泊せり。後に三隻の游船此處に來りて、使節一行及荷物を輸送せんとす。

日本の遊船　早船

日本人は一種の遊船を作る。彼等は之をハイヘナ(Fayfena 早船)と稱す。大抵楫の數を四十とし、船首は象の頭の如



日本人の快遊船

くし、船尾には美麗なる鏡、船室及舵あること荷式の如し。早船の或ものは一艘に三十人以上を有し、其速なること又新進路を作ること驚嘆すべきものあり。通例大阪より長崎まで十二日を以て航海す。此距離實に二百二十リーグなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

フリシウス及ブロークホルスト大阪に送らる

使節フリシウス及ブロークホルストの大阪に到着せし最初の報あるや、土地の男女此外人を見んとて多數群集せり。然れども最も多數の群集は橋上に在り。此等の橋の中數者は斯かる大多數の人を支ふる能はざるものにして、屢〻劇しき響をなし、橋上に在る人々に大なる危險の迫ることを脅威するのみならず、亦下を舟行する者をして同樣の不安を感ぜしめたり。

世界の他の部分に住せる或國民が三千哩以上の遠路を經て彼等のエムペロルへ國使として來りしを始めて見んとする好奇心は、大阪の主なる市民を驅りて前記の木橋の上に生命を失ふことを敢てするに至れり。

スペックス及セゲルソーンの大阪に來りし時

一六一一年ヤコブ・スペックス(Jacob Spex)及ペーテル・セゲルソーン(Peter Seggerszoon)は貿易の自由を得る目的を以てエムペロル御所樣(Goyssio Samma)への獻品を携へて大阪を通過せしことあり。御所樣は當時ソリング(Soringou 駿河)市に宮廷を有し居れり。

平戸よりの彼等の旅行

此使節は一六一一年六月十六日に一隻の船を以て平戸を出で、アミシマ島アシア市の傍を航し、小倉の堤防に沿ひて

漕ぎ、夕方下關(Ximontchequi)の見ゆる處に碇泊せり。然れども風大に起り、此處を抜錨してイサキ(Isacky)港に漕戻すの止むなきに至らしめたり。此地に着するや風凪ぎたるを以て、再び抜錨して下關の方に進み、夕方ミアンヅ(Myands)に來れり。夜半の比左舷にカドメネセキ(Cadmenexequi)を殘してスワ(Szuwa)に近づき、該島の下に投錨せり。スワより前進して潮流に從ひしが、風は逆にして三日間に漸く六十哩を進めり。而も漕手に取りては至大の苦痛なりき。漕手は全く疲勞せしかば、スペックス卿は止むを得ず牛窓(Vosimado)に向ひ、此地に於て日本船四隻を雇ひ、交代して疲勞せる漕手に休息を與へんとせり。然るに風は尙東に吹き、屢〻强力なりしを以て、大なる困難を嘗め、漸く室港に着せり。此地波浪高く、傭船の中二隻は港前に於て沈沒せり。やがて天候は漸次に靜穩となり、再び櫓を執りて高き波を漕行きしが、潮勢劇しき爲に終に姫路に碇泊するの止むを得ざるに至れり。此地よりタケシマ(Tackima)を過ぎ、兵庫に達し、兵庫より大阪に行けり。航路の大部分は船を海岸に沿ひて曳くを要し、水夫をして大に苦心せしめたり。

八月六日スペックス使節は大阪の河に來り、アウシマ(Aussima)市の前に碇泊し、此處にて伏見に行く爲に數隻の小舟を雇入れたり。淺瀨を行くに彼の船は吃水深きに過ぎしが故なり。午後彼は大阪を過ぎ、夕方河を溯流せしが、河は處々水淺く、舟を行るに困難を感じたり。

秀頼其地位を失ふ

其時大阪には王家の出にしてヒデリサマ(Fidery Samma 秀頼)と稱する十八歳の幼君住せり。彼は不測にも其王國の冠を奪はれしかど、大なる歳入と貴族及平民の愛とによりて全帝國の主として正當なる人と目せられしが、今や凡てのものを失ひしを以て、此地に一私人として退隱し居たるなり。

カイロン及ハゲナールの平戸より大阪に至る旅行

爾後他に多くの使節もありし中に、フランシス・カイロン(Francis Cairon)及ヘンリック・ハゲナール(Henrick Hagenaer)は一六三四年十月十三日江戸のエムペロルへの使節として行きたり。彼等は平戸より航して同夜タシャ(Tascha)灣に碇泊し、翌日は夕方まで航行を續行せしが、劇しき雷雨の爲に止むなくヨボッキ(Jobokki)村の前に投錨したり。翌朝航海を續けて博多(Fagatta)市、アネスマ(Anesma)島を過ぎ、終に下ノ關(Chimano Suky)に投錨せり。此地に於て彼等は同地に住せる東印度商會の代理人より新しき食料品の贈付を得たり。

暫く休養の後、カイロン使節は抜錨し、西北よりの强き風を受けて夜半カモノシキ(Camonosiky)海峽に入れり。其兩側の堤防は家多く續きたる街なり此處にて彼等は旅行券を示さざるべからず。此を終へて同處を去り、多少の時を經て後、或散布せる島の間にて激浪に逢ひしかば、漁業市の小港に入る必要を見たり。然るに天候は靜穩となりしかば、カマンガシー(Cammangasie)まで漕ぎ、それより多くの塔を以て飾られたる美麗なる市メマリ(Memarry)に達せり。海の方に向へる極端の地に麗しき殿堂あり。其塔は海上遙なる處より望見するを得べく、標臺又は燈臺の用をなせり。

此くて彼等は左舷にビグナツム(Bignatum)市を殘し、東北東に向ひて牛窓市の傍を航走し、夕方室に着せり。此地に於て長崎のボンヨイス(Bonjoyes)は蘭人の通譯者に命じてエムペロルの方に旅行せる者の何人たるかを報告せよと云へり。

此港よりカイロン大使は其一行の外に百人以上の日本人の一隊を加へて出帆せり。間もなく明石市に着せしが、此地に於て東北の暴風に逢ひ、波浪頗る高かりき。

明石は城砦堅固の市なり。一方には防禦の城ありて、水邊より築き上げられたる石壁を以て圍めり。此地を出發して兵庫を經、午後大阪ミサッカイオ(Saccaio)市を見、日沒比に平地を行くが如く大阪灣に入れり。此地に上陸するや、東印度商會の代表者として住せるグラッビドンス(Grabbidons)に歡迎せられ、其家に投宿せり。

フリシウス及ブロークホルスト大阪にて豪家に迎引せらる

此等の二使節はフリシウス及ブロークホルストより以前に大阪を通過したる者なり。フリシウス及ブロークホルストは午後上陸したる後宏莊なる家に在るべき設備の凡て完き美麗なる旅館に案内せられたり。此旅館は長崎の奉行、地方官等がエムペロルへ旅行する往復の時に宿泊する家なり。建物はもと日本僧の住みし處にて、後に使節等接伴の家に變ぜられたるなり。

大阪市の記載

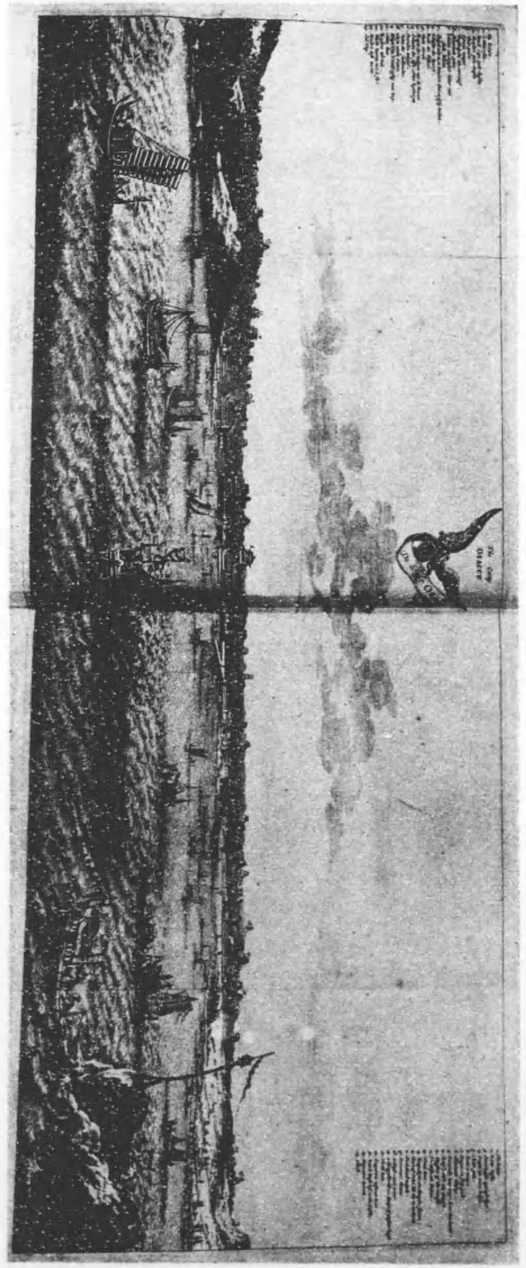
大阪につきて云ふべきは、同市は帝國の一大市にして、キオー(Quioo 畿内)の領域の首府なり。河口に近く妨碍する岩ありて、水路を二に分つ。河を通過するものには邪魔となりて危險なり。河は北に向ひて走り、大阪の中央を經て二に分れ、又都を過ぎ、多くの淺瀬を成し、終には其市の背後の廣き湖水に注入す。

河の最極端卽ち出端には王の稅關あり。凡ての船は此處に立寄りて、積込める船貨に對する關稅を拂ふ。此官署は各階にそれぞれの屋根あり、莊麗にして遠く海上より望見すべし。

兩側には二箇の丘陵ありて、爲に市の東西の展望を妨ぐ。唯高塔の二三その上に拔出でて見ゆるのみ。

大阪の水城

稅關に對して王の防舍あり、川より積上げたる堅固なる石垣を以て圍めり。巧に据付けられたる大砲ありて、凡ての



大阪城

場合に應ずる準備完し、エムペロルたる將軍樣(Nogunsama)は此城砦の建築を初めしが、その子當將軍樣(Toxongunsama)之に繼ぎて一六二九年任に上り、三年を費して之を完成し、衛兵を配置せり。

此建物の後には十戸の倉庫ありて海に面す。廣き街路及石の甃道あり。此等の倉庫は頗る大にして、凡て石を以て作り、火災の損害を受けざるやうにせり。

又多くの塔あり。此處にエムペロルは財寶を貯ふ。四國、西國及土佐より集めたるものなり。

水門

前記の建物の外に又水門あり。關稅を課すべき貨物之より出入す。廣大なる一對の階段あり、之によりて海に下る。兵士五百人より成る一隊ありて、常に之を守れり。

稍離れてエムペロルの造船所あり。周圍は大にして多くの船渠あり。絕えず各種の船を建造せり。其船體は大概幅廣く作らる。市の他側は丘陵の背後に在り。小河を以て之と隔つ。海より少し河を溯れば、巧に建てられたる太守の宅あり。內に立派なる室多く、屋根四層ありて塔の如くに高く聳ゆ。

鬼神の殿堂

此建物と防舍との間に地獄の殿堂の高屋見ゆ。此中に日本人は一の恐るべき像を禮拜す。其頭は猪の如く、顎より二本の大なる牙突出す。頭には金剛石及他の寶石を滿載せる壯麗なる冠を戴く。胸の上には衿卷懸る。後者は中央に於て二に分れたり。像の外觀をして一層怖るべきものとなさしむるは四本の伸したる手にして、其左手の一を上に擧げて中指に環を持つ。他は下に垂れて蓮に似たる花を持つ。最上の右手には火を吐ける小き龍の頭を摑み、最も低き手は金製の笏を持つ。足下には彼の下に橫れる他の魔鬼の腹と腿とを踐む。此魔は頭髮長く、牛角一對その上に生ず。頭

の廻りには鐵鎖、胴の廻りには大なるボタンある帶を卷く。長き尾は足の間に、廣き靴下は膝の廻りにあり。右腕を伸し左腕を腹部の方に曲げたり。他の一體の如く恐るべき觀を呈す。此等の像を彼等はヨーシー・チーデバック (Joosie Tiedebak) と稱し、之に向ひて神をヨーシー・グサル (Joosie (Goesar) と稱す。日本人は此惡魔の像を崇敬禮拜し、各種の供物をなす。其害を受けざらんが爲なり。

* * * * * * *

大阪の望樓

此魔王殿の背後には海岸に廣がりて望樓あり。王宮以上の莊嚴なる建築にして、堺市に通ずる大街路に著しく高く聳えたり。

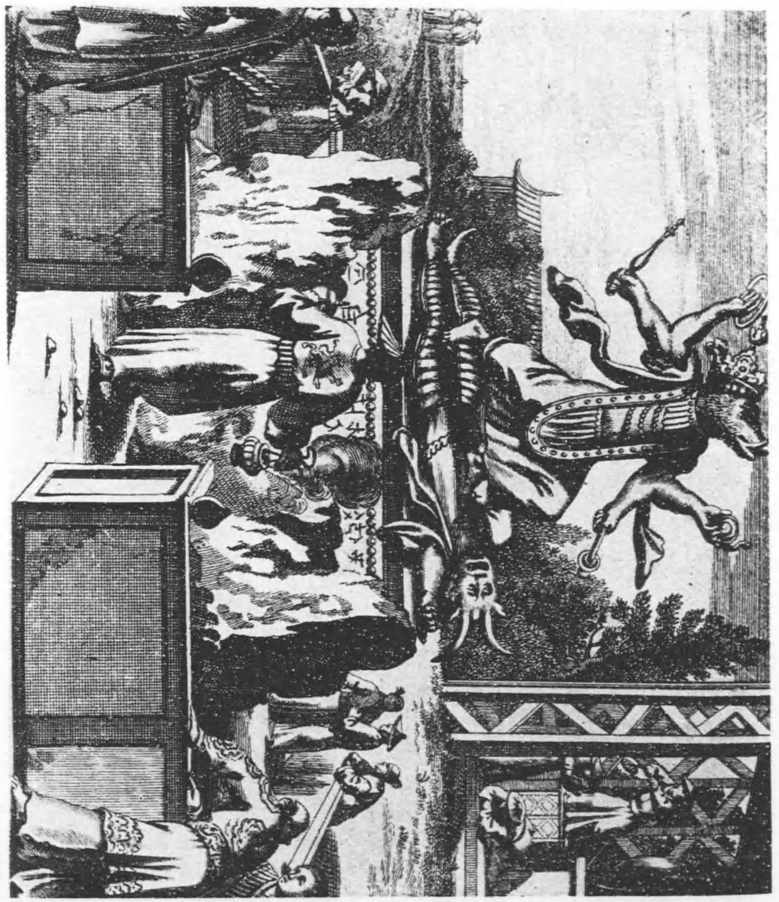
此を距ること僅にして、宏大莊麗なる殿堂を見るを得べし。此殿堂中には驚異すべき偶像ありて、其高さ五十呎、頭部は凡て銀を以て作らる。ボム (Bom) 王より寄進せられたるものなり。此王國には銀を多額に產出す。

エムペロルの饗燕場

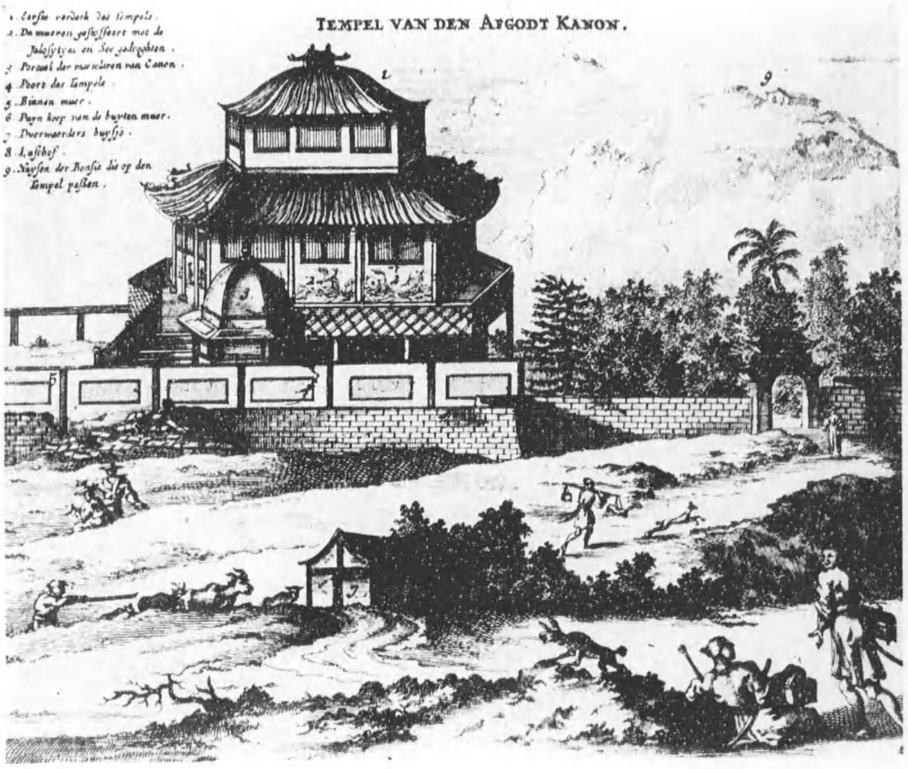
左に當りて市の低き端に丘後よりエムペロルの高樓の美觀開く。樓は無數の尖塔を頂く。其背後、大阪より南方約一リーグの處に他の高樓を見るべし。之を諸卿の城と稱す。此處は貴族等が重要事件の爲に又娛樂の爲に集會する處とす。

觀音の殿堂

市の中央には觀音の偶像を以て有名なる殿堂あり。日本人は觀音を以て水中に棲息する各種の魚鳥の上に絕對的の力を有すと信ぜり。觀音は彼等のネプチューン卽ち司海神なり。是より二三歩にして門番所あり、廣き緣の屋根を有す。



鬼神の殿堂


TEMPEL VAN DEN AFGODT KANON.
1. Eerste verdiek des tempels.
2. De muuren gefiguureert met de Jakssiyas en Sie gadeghien.
3. Portaal der voorloren van Canon.
4. Poort des tempels.
5. Binnen muur.
6. Pagen hoep van de buyten muur.
7. Doorwaerders huysjes.
8. Lustbof.
9. Nieuwen der Bonsis die op den tempel passen.

觀音堂

其端は遙に壁の前方に差出づ。此門番所に近く外壁に通ずる路あり。外壁は大部分荒廢したり。但し此壁に一の美麗なる門ありて凱旋門に類す。是を通過すれば愉快なる原野に出づ。蔭多き樹木多し。然れども此愉快は白き泥土を以て塗れる第二の長方形の壁ありて隔てらる。各區には之に屬する愛すべき緣の芝生あり。

觀音堂前の奇門

さて又空地を圍める第一の壁に屬する寺門は球狀に建てられ、六角を有し、頂は一種の圓天井をなす。此悲しき場處に來集する者は憫むべき境涯に在る人々にて、或は貧困に惱み、或は癈疾に苦しみて生活に疲れ、或は盲目的の熱心に精神錯亂して宗教的鬱憂の發作に罹り、此處に凡ての悲哀を除去して現在の幸福に入らんとて來るなり。されば彼等は先づ謹愼の態度を以て門に於て觀音に相談して助言を求む。此くて彼等は想像の指示する所に從ひ、希望に滿ちて歸り、或は絕望の餘早く自決せんが爲に水を貪飲す。

* * * * * * *

觀音堂の細記

此殿堂は特殊の三階建となりて高く聳え、其屋根は六角を成して四壁の上に大に斗出す。各階には三個の二重の窓あり。唯第二階と最下階との間に廊ありて、大圓柱二十八本を以て支ふ。各種の魚類を描きたる四壁、殿堂の外部を粧飾す。

* * * * * * *

觀音の記載

其内に觀音の像立てり。觀音は日本の僧の語る所によれば、二千年前に世に在りし者にして、日月を創造せりと。像

は中程より以上にかけて魚の口より出でたるものの如く見え、其額には花を插む。各臂の關節より二本の腕出づ。一腕は上方に立ちて中指に輪を有し、他は垂れて指の間に花を持つ。右手は高く、擧げたるは握り、低きは笏を把る。腕、頸、胴の廻りには眞珠の房絲懸かる。肩よりは二枚の衿卷垂れたり。觀音の前に一青年の像立つ。其胴より上部は大なる貝より出づ。青年は兩腕を擧げて觀音に祈念す。衿卷は胴の廻りに結ばれ、其端は下垂せり。右側に香案ありて其上に四個の像安置せらる。懇願する姿勢をなす。彼等の手は組合せられて其より水出で、水は彼等の足の爲に作られたる四個の圓孔の中に注ぐ。僧は此等及貝中の像の神語を說くことを拒みたり。

大阪に於ける主なる建物

觀音の右側には海軍提督の宅あり。而して此市の附近に佛僧の住せる壯麗なる寺院あり。二個の高き屋根又は階を有して聳ゆ。此二個の階の間には大なる距離あり。之に隣して大將の住宅あり。二重の屋根及破風作りの壁によりて知らる。之に接近して二百の像を納むる殿堂あり。日本の大藏卿に屬する邸宅も宏壯の點に於て前記諸屋と優劣を見ず。同じ街に望樓あり。市より六ーリグを隔つる處より望むを得。海上に於ては七リーグの處より見らるべし。老佛僧の像を神聖なる遺物として納めたる會堂あり。亦珍奇見るべきものとす。其一部は海上若干の距離に於て見るべし。他の部分は丘陵の後に隱る。

大阪市の内部

大阪は日本の自餘諸市と同じく城壁、又は壘壁を有せず、中央に河ありて二に分たる。河の兩側には粘土を以て作れる莊麗の家あり。外部は板を以て蔽ひ、水の浸透するを防ぐ。内には大なる宝多し。一六一四年エムベロル將軍樣(Xogunsama)の時罪人を載せたる船七隻大阪港より長崎に行けり。彼等が羅馬教を捨てざるが故なり。其時大阪に在るエスイ

魚口出現の觀音

ト教會はエムペロルより羅馬教徒迫害の權力を附せられたるサンガミド(Sangamido 相模殿)に破壞せられたり。此迫害は各種の殘虐を以て實行せられ、凡ての想像せらるべき慘刑信徒の上に加へられぬ。

大阪屢〻日本の内亂に災せらる

然れども大阪は帝冠を得んとして互に相爭ひたる人々の起したる内亂の爲に甚しく惱まされたり。市も城も一時甲の手に落ちたりと思ふ間も無く、亦一時乙の手に落ちたりき。

一六〇一年エムペロル太閤樣(Taycosama)の死後、日本は内亂の爲に騷擾し、九人の諸侯は内府樣(Dayfusama)に反對して團結せり。其主なる指揮者は九國の王なる毛利殿(Morindono)にして、彼は其九國より四萬の兵を集め、其中には多くの身分高き人あり。彼は逝ける太閤樣の財貨と戰爭の必需品とを有したり。かかる間に此等地方の君主の中には内府樣を攻擊せしが、内府樣は逆擊して之を破り、八萬の兵士は斬られ、或は自ら腹を割き、或は捕虜となり、死を脫れし者は極めて僅少なりき。

内府樣の攻略

是に於て内府樣は勝誇りたる軍勢を急に大阪に進めしが、此處にては毛利殿は内府樣の獲たる勝利に驚き、二重の備ありて、如何なる攻圍にも堪へ得るばかりに堅固なる此難攻不落の大阪城を内府樣に委したり。内府樣の全軍の到着するに先ち、毛利殿は彼の貴族の數人と俱に城を脫れ、遠く大阪を距れる彼の宏壯なる宮殿に行き、全く勝利者の爲さんと欲する所に任せんと決心せり。

然れども薩摩(Sassuma)王は彼以上の勇氣を示せり。彼は六百の兵士を率ゐて、内府樣の勝誇れる軍隊の中を切拔けて大阪の方に無事に進み、内府樣に先だつ數時間に此地に到達し、彼の見出したる限りの船によりて其王國薩摩に歸

りたり。此地は大阪を距ること二百リーグなり。彼は此地にて内府樣に抗せんしたりしなり。

大阪の大地震

大阪の市は此援亂の外に、一五八五年八月四日夜半に起りたる突如たる地震の爲に遙に大なる慘害を受け、殆ど全く荒廢に歸したり。最初の震動は激烈にして、半時間に過ぎざる間に數百の人民は倒壞物の裡に葬られたり。最美の建物先づ壞れしが、其中には太閤樣の建てし天下最美最大の建物もあり、此は廣大なる廻廊を有し、十五萬人を練兵せしむるに足ると稱へらるる廣き中庭を有す。此大建築は支那の使節に對して權力と莊嚴とを示さんが爲に建てられたるものなりき。

蘭使大阪を發す

我が使節フリシワス及ブロークホルストは大阪市を十分に視察したる後、一六四九年一月二十日を以て此地を出發したり。早朝先づ貨物を送出ししが、其車には馬八十二頭を要したり。一行は四十四人の騎馬蘭人とボンヨイスと獻納品たる銀器、大鏡、其他多くの珍品稀什の運搬に從ふ百人の人夫とより成れり。使節は輿に乘り、三百の人と百二十八頭の馬とを隨へたり。

都への旅行

此鹵簿を率ゐたる使節は正午頃大なる村牧方(Firaskatta)に來り、此處にて午餐を喫し、午後四時頃淀(Yonda)を經て旅行せり。淀は小き市にして巧に建てられ、堅固なる城を構へ、壁を以て圍めり。此地の地方官は使節を迎へたり。彼は多數の從者を從へ、輿に乘り、衛兵若干其後に從ひたり。彼等の通行せしは高き堤防にして、之に境する稻田は見渡す限り遠く廣がれり。爾時此堤防の上面は何れの處も固く凍結したり。堤防を下りて路傍の兩側に樹木を植ゑたる數村を經過せり。

日本の杉樹

此等の樹木中杉は凡ての他のものよりも高き頭を擡げ、餘程の高さに達せり。テオフラスツスの言にシリア人及フォイニキア人は杉を用ひて船の檣とせりと。同じ習慣は今日日本にもあり。蓋し杉は護謨性の濕氣を含み、之によりて腐蝕するを防ぐ。日本人は此祕密を知らず。杉を刻みて作れる像の發汗を以て大なる不可思議と看做せり。然れども是れ濕潤なる空氣及南風の爲に起ることにして、此等のものは大概該樹より脂を引出す作用をなすなり。又此樹は其栽培の場所によりて高く又太くなる。シリア山中には杉は太く生長し、四人合抱しても尙之を測ることを得ざる程なり。然れども其頂の雲と相交るが如き驚くべき高さに比例しては細き幹を有つものとす。日本にも亦之に劣らざる杉を產ず。其葉は柔にして柔毛の如し。然れども銳き尖頭は棘の如し、杉と杜松(Juniper-tree)との間には些少の類似點あり。然れども杜松の葉は長く小にして、其樹は高く成長せず。その木材は切りて用ふれば直に腐蝕す。而して又杉は佳香あり、桃金孃(Myrtle)に似たる莢を生ず。之を開けば其中に包まれたる米の如き四個の白粒あり、熟すれば濃黃色を呈す。之に反して桃金孃の實は黑く、苦くして口に不快なり。

蘭使都に着す

蘭使は樹木を以て蔭とせる此堤防に沿ひて淀と稱する町を經て都に來り、此地に於て富裕なる商人の宅に迎へられて其家に宿泊せり。

此エムペロルの市ミヤコは大阪より十八リーグにして、ミノ(Mino)國に在り河に沿ひて。(此河は都より三時間の路程に在る大湖より發源し、大阪を經て海に注ぐ)エムペロルの血の籔(Imperial Blood-Grove)あり。其名の由來する所は

一六八二年六月二十二日に殺されたる日本のエムペロル信長より出づ。

信長自ら神として崇拜せられんことを望む

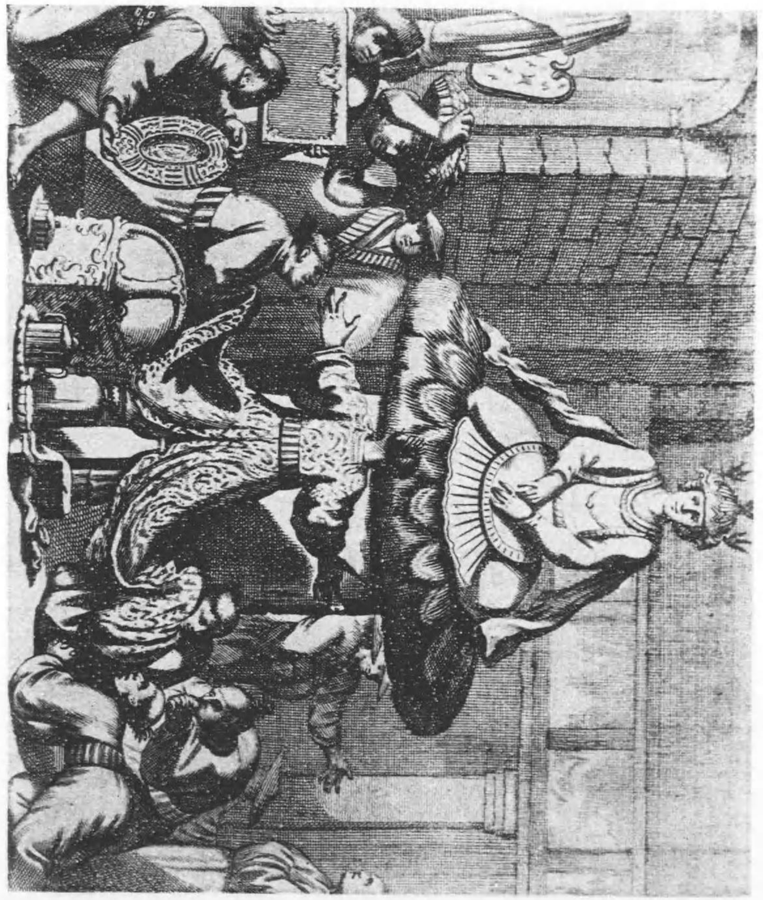
信長は其統治を行ひし間に一の新市を快美なる山の上に作り、之をアンツキヤマ（Anzuquiama 安土山）と稱せり。其中に一の莊麗なる殿堂を建て、之を一層有名ならしめんが爲に、日本中の最も尊敬せられたる諸偶像を此地に運ばしめたり。此殿堂に隣して豪奢なる禮拜堂を建て、磨きたる大理石の上に自家の紋章を刻せしめ、自己の像を等身大に作らしめたり。其工竣るや、嚴命を以て次の如き布令を發せり。曰く、宣言に指定せられたる時日の後は、安土山の此殿堂内に在る彼の像以外の神を禮拜すべからず。何となれば彼は天と地とによりて創造せられたればなりと。

新偶像「三體」

次で彼は同樣に嚴重なる第二の命令を發し、二月の末日には何人も其階級の如何を問はず此日を神聖に守るべし。是れ彼の生誕日なればなりと。而して又彼等に對して安土山の禮拜堂に行き、新しき神サンタイ（Xantai 三體）を禮拜すべしと要求し、之に約束と威嚇とを附加して曰く、彼の命令に從ひて彼の自ら新に作りたる像を尊敬せん者、若し貧ならば富むべし、若し富む人ならば其の財産は大なる幸福の中に益々增加進展し、且長壽を得べし。而して此本分を怠りたるものは其反對を豫期すべしと。

此命令帝國を通じて發布せらるるや、さしも廣大なる都會のミヤコも日々團體をなして此處に繰込む大群集を容るるには餘りに小なるを覺えたり。是に於て此大群集を受入るる爲に市の周圍數リーグを取入れしが、是より先市は既に人を以て充塞し、其多數は船上に臥すの止むを得ざるに至れり。

祝賀の日となるや、信長の子たる年若き公子は第一に儀式を初め、恭敬の態度を以て新像「三體」の前に稽首し、之に次



安土山の信長神像

（都　京）

都

公方の祝儀

ぎて諸王、諸侯伯、貴族、其他の身分ある人々順々に禮拜せり。

爾時不可思議なる怪異ありて、大に會衆を驚怖せしめたり。卽ち一の炎光を發する彗星なり。又正午には火天空より落ちたり。突然にして悲しむべき不幸が威嚇的に信長の頭上に落つることの前兆と視るべかりき。信長又都より一哩を隔てたるヅボ(Dubo)といふ村に美麗なる殿堂を建てて、ここに自己の肖像を置かんとせり。此偶像は廣き緣を附し巧妙なる彫刻を施したる臺の中央に足を交叉して坐し、手を腹の上に加へたるものにして、頸の廻りには緩き布片を懸く。貴重なる寶石の鎖は胸を飾り、眞珠の三重の鎖は頸、胴、腹の周りを飾る。然れども最大の飾は頭に著けたる赫耀たる冠なり。

信長自らエムペロルとなる　公方の遭害

一五六四年エムペロル公方(Cubo)は日本を支配し、宮廷を都に有したり。其時一萬二千人の逆徒はエムペロルに對し嚴肅なる同盟を作りて叛逆を謀り、第一着手として都を襲ひ、宮殿の四箇處に火を放ちたり。公方は不慮の襲擊に遇ひて適當なる防禦手段を講ずる能はず、自ら劍を拔きて大膽なる突擊をなし、唯二百人を從へて血路を開かんと試みたり。然れども衆寡敵せず、敗れて數箇處に負傷して殺されたれば、從臣も亦凡て寸斷せられたり。斯くて弑逆者は宮中に亂入し、公方の母及女を見出して慘殺せり。單り妻女は寺院の僧舍に隱れ居りしが、忽ち發見せられ、亦罪人として斬られたり。

都の略取及宮殿の再建

斯くの如くにして彼等は王族を全く滅亡し、唯公方の弟のみを殘したり。是れ僧籍に在りしが故なり。彼等は爾後彼に對して安心を得る爲に宗教上の誓約を以て彼を拘束したり。然るに彼は此誓約後身を免れ、密にロカ(Loca)の君主

和田殿（Vatadono）の許に走りたり。和田殿は彼を丁寧に待遇し、尾張（Boari）の王信長に援助を乞はんことを勸めたり。信長は之を容れて六萬の軍を戰場に出し、公方の殺害者と相抗せり。殺害者等は抵抗し得ざるを見て降伏し、首魁たる煽動者は罰せられたり。彼は血統に於て最も近き公方の弟を立てずして、自ら都の市及城の絶對的君主となり、燒けたる宮殿を再建すとて其完成を急ぎ、費用と勞力とを厭はず、土工を使用すること日に一萬五千人に及べり。彼は拔刀を携へて彼方此方を巡視し、以て何人も懈怠し又は時間を徒消するを得しめざりき。彼は偶然通りかかりたる婦人の覆面を擧げたりとて、一木工の首を刎ねたることありき。

覇權を收めし後の信長

信長は威風堂々として短日月の間に三十の王國を征服し、我が治下に立たしめ、尋で亦公方を排してエムペロルの冠を己が頭に戴きたり。其後彼は同じ王冠をヅボに於ける彼の新肖像の頭に加へ、以て存生中に神として禮拜せられんとせり。此目的の爲に彼は阿諛する宮廷の官人及市内の佞者を缺かざりき。後者は彼の虛榮心を長ぜしめ、彼が細心、卓拔の行爲、勇氣によりて斯くの如き驚嘆すべき事業を成し、斯くの如き多くの勝利を得たる上は、今の行爲は正當にして又榮譽たることを自信せしむるに至れり。

信長虛榮傲慢を以て世人に厭はる

然れども他人は此虛榮の空想と傲慢なる企畫とを忌むこと甚しかりき。彼等は多くの君主の善行ありし者に對し其死後之を神として祀るに慣れたれば、此が爲に彼を忌むにはあらざれども、彼の望む所は甚だ高く、存生中卽ち猶人間の弱點に陷り易き時に於て神となり、同時に人たらんとし、特に靈界に在りて永久に祝福せらるる者にのみ捧ぐべき供物と犧牲とを受けんとするは神聖を褻瀆するものにして、（彼等は言ふ）吾人は彼の如く殘虐、破約、僞誓をなせる者を神となすを欲せず。例へば如何なる國が彼の君主たる面目、誓言、寛仁に信賴して彼に降伏することありても、彼は攻擊の手を緩めずして、之を略取し、恰も暴力を以て侵入したるが如くに無慈悲に其國人を屠るが常なるを惡みしなり。彼を怨める者の中最も甚しきは明智（Aquechi）王なり。彼は大膽にして勇氣ある君主なりしが、信長の瀆神的傲慢を見て平然安處するを得ざりき。信長は多くの寵遇を明智に加へ、彼を丹後の王となし、自己の全軍の大將としたれども、宗教の名譽竝に正當なる神の眞の禮拜が危險に瀕せんとするを見るや、彼は信長の全軍をして彼に變心反對せしめ、一五八二年六月二十日都に進軍せり。此くて信長は不測に襲擊せられしが、自己の軍勢を以て圍まれたることを見て脫走を企つるの方法なく、敵の追跡を被り、都の川に近き森林中にて殺されたり。此森林は以後エムペロルの血の森の名を得るに至れり。

ヅボの殿堂の收入

信長がヅボに建てたる殿堂は年に銀二十萬テールの收入あり。（日本の一テールは五シリングに相當す）。さて今再び都の話に立返らんとす。

都の記載　ヅボの偶像釋迦

帝都の側にヅボヤマといふ大なる山あり。淀に向ひて走る。其山麓にヅボ村あり。信長の建てたる莊麗なる殿堂存す。其殿堂の高き屋背は處々より蓊鬱たる樹木の上に見るを得べし。其中には大なる釋迦の偶像あり。日本に於て最大の稱あり。此殿堂は一年に唯一回開扉せらるるのみにて、其他は絶えず閉さる。此時には盛なる儀式を以て開かれ、ホケスス（Foquexus 法華宗）と稱する僧侶の階級第一に此に入る。

宗教に關する日本人の諸說

日本人は宗教のことにつきては大に說を異にす。然れども之を三大派に分つことを得。此三大派は又多くの支派に分る。

禪宗

第一はゼンスス(Xenxus 禪宗)と稱す。來るべき生、善に對する報償、凡ての惡業に對する罰を認む。其僧は此說を主張し、主として彼等の偶像チャミス(Chamis)に大なる尊敬を表す。之を禮拜する爲に多くの殿堂を建て、凡ての重大なる事件に於て、或はエムペロルに忠誠を誓ふ時に、彼の名を用ふ。彼等は多くの供物を此像に捧げ、よりて彼等の身に存する苦悶を除き、或は彼等の事業に有利幸福なる成功を與へんことを祈願す。

ピタゴラスの教義日本に存す

第二宗も亦靈魂の不滅を許す。然れども ピタゴラスの所說に從へば、靈魂は其價値に從ひて善き動物又は惡しき動物に移る。彼自身は嘗てマーキュリーの子アイタリデス(Aethalides)にして、マーキュリーは彼に許すに彼の欲するものにして不滅の生以外のものならば何物をも與へんとの恩惠を以てしたれば、彼は死後に起ることを何事にても知り且記憶し、レーテ卽ち忘却の川の水を飲むを要せざることを願ひしにより、アイタリデスの死後彼はトロヤの英雄にしてメネラウス(Menelaus)に殺されたるエウフォルブス(Euphorbus)に移住し、次にはヘルモチウス(Hermotius)、に次にはデリエル(Delier)の漁夫ピルフス(Pyrrhus)に、最後には前記の哲學者ピタゴラスに移りたりと云ふ。

偶像阿彌陀

ゼンスス(譯者云く第二派をも Xenxus とせるは如何なれど姑く原文に從ふ。淨土眞宗を指すが如し。眞宗と禪宗とを混同せるならん)と稱せらるる一派は普通に阿彌陀(Amida)と稱せらるるオミイト(Omyto)を禮拜す。日本人が此偶像に關して語る物語は殆ど理解を超絕して、吾人には之を信ずること能はず。唯茲に語るべきは彼等は救濟及永久の幸福を彼等の神卽ち阿彌陀に歸し、常に南無阿彌陀佛と唱へて彼に祈願す。此意味は「我等を救へ、幸なるアミダ、我等を救へ」といふことなり。此反覆せる祈念を數ふるに念珠を以てするさま羅馬教徒が彼等の祈禱をなす場合の如し。像は彼等の持てると同樣の念珠の絲を持てり。

法華經宗の偶像釋迦

第三の大なる宗派は法華宗(Foqueux)なり彼等は釋迦の像を崇敬す。之に對して南無妙法蓮華經と祈禱す。何人にても此語を最もよく發音するものは、彼等の幸福を來すべき善兆なりとす。但し印度より出でたる日本人にして此等の語をよく領解する者無し。

弘法大師　偶像崇拜を敎ふ

此等の釋迦像崇拜者はコムボダギー(Combodagies 弘法大師派)及カクボ(Cacubos 覺鑼派)の兩宗徒とす。何れも日本人の間に最も熱誠にして且最も宗教的なりとして尊ばる。

コムボダギーは先づ惡魔に犧牲を供し、降神の法を用ふることを敎へ、カクボは支那の僧侶の如く占トと巫術とを敎ふ。彼等は大抵人寰を遠ざかりたる山又は荒凉たる地に住す。

都の主なる建物

都を距ること一哩ゾボヤマの麓のゾボ村には殿堂ありて、大なる釋迦像を安置す。

大阪に近き所にて海に注ぐ河は都を貫流す。

此市は村落を以て圍まれ、河の兩側に塔を有する一橋を架す。オーツ(Oets 大津)及ゼジ(Gei 膳所)に至る街路の門に近く騎者及步行者に對する甚だ堅固なる警衞所ありて、常に嚴重なる檢査を行ふ。稍離れて高塔あり。其頂上よりエム

ペロルはゼジ(膳所)に近き大湖と風致あるパウロママ(Pauromama)山とを望見するを得。

坊主の殿堂

此塔に近く又一塔あり。此をエムペロルの武器庫とす。此建物の右側に僧侶の六階級に供せられたる莊麗の殿堂見ゆ。此處にはサシモヒンス(Xaximofins)と稱する佛僧の首長の住居あり。

内裏の宮殿

さて又市の中央には凡ての建物をして顔色無からしむるダイロ(Dayro 内裏)の莊麗なる宮殿あり。國人はダイロを最も尊敬し、彼の身體を神聖なるものとして、足をして地を踐ましめず、又日をして身體の何れの部分をも照さしめず、又彼等は普通の外界の空氣を呼吸せしめず、鬚又は頭髪を剪り又は剃らしめず、又爪を切ること無し。彼の食卓に供せらるるものは常に潤澤にして、一回ごとに新しき皿を用ふ。

エムペロルの宮廷

右にはエムペロルの宮廷あり。山の突出せる蔭に目立たぬやうに建てられ、大阪より都に旅行する者は之を見ることを稀にして、唯尖塔の一二の丘上に現はるるを眼にするのみ。

信長は謀叛者が此宮殿を燒きたる後之を再建するに多大の費を用ひたり。

之に近く皇帝の庭園あり。樹木及香の高き花多し。之を栽うること巧にして、觀者の眼は此くの如き快きものを見飽かず。

市内の建物　諸侯の邸第

此庭園の兩側に諸王が通例エムペロルに奉侍し住居する諸宮廷ありて、互に美を競へり。之が爲に市の一端は多くの

華美なる建物を以て飾られたる一箇の宮殿なるかの觀あり。

饗宴の塔　後宮　大佛殿　税關

ダイロの宮殿の左側は非常に高き塔を以て影をなす。塔は黃金の板金を以て蔽はる。宮廷の下、河の方に尙十二の莊麗なる建物あり。是れ後宮を成すものにして、此内にはダイロの宮嬪を置く。

稍下方にはエムペロル内府樣の建てたる壁を見るを得。彼が都の周圍を四リーグ擴張せし時に建てたるものなり。

更に立派なるは、高く聳ゆる三箇の屋背ある方形の大殿堂にして、大佛の鍍金像を安置す。之を拜せんが爲に日本人は遠近各地より集る。

ソカンシー(Xoquansie)の奉行廳も亦甚だ華麗なり。エムペロルの税關は淀に通ずる門に近し。大阪より來る蘭人は此を通過して市に入れり。此處にて外人は凡ての書類及旅行券を示す。然せざれば前進することを許されず。

税關の左に美なる殿堂あり。最上の屋背より三箇の塔聳ゆ。此殿堂内には一年の日數ほどの神像あり。

エムペロルの紋章司長はホンロック・ラクライボノ(Honroccou Racclaybono)と稱し、三の屋背を有する他の美しき邸宅に住す。

之に隣して警衛所あり。其處には二千の兵士警衛に任じ、常に任務に就けり。

市の最も極端に皇帝の厩及倉庫あり。此處には馬と兵士に屬する道具及武器とを收む。其構内には四萬の騎兵武を練るを得。

市民の邸宅

市民自身は皆小き邸宅内に住す。其室の取り方一樣ならず、彼等が適當と思ふまゝにす。而して此室も若し彼等が欲

する時は、鍍金を施し且印度風に巧に漆をかけたる仕切を以て尙多くに分つを得。此くするときは煩累少く立て又外すことを得べく、凡ての場合に於て全家を便宜に變更するを得。

都の繁昌

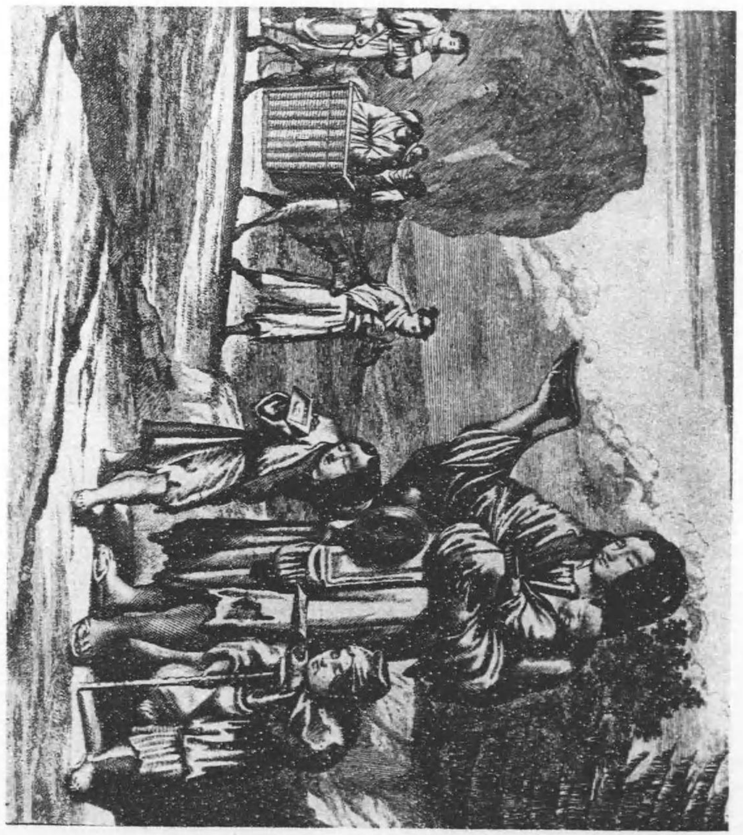
都は日本の凡ての都會よりも繁盛なり。他の都市は屢内亂の爲に惱むことあれど、都はダイロの居處にして、エムペロルの權力を失ひたる後と雖も、人民は其人に對する尊敬より之を苦しめざらんが爲に敢て其方を望見する者無く、又其地に近く軍隊を差向くる者無きが故なり。

蘭使の前進　大津より膳所

蘭人は一夜此市に止り、一月二十一日午時に近く大津と稱する村に旅行せり。此地に赴く路は高き山の間にして、兩側に家屋あり。一方には河の突出地に築かれたる城砦を見る、大津に於て使節一行は半時間止りて休養したるのち前進し、膳所を通過せり。膳所は一个の城砦ある市なり。此市までは路平坦にして、兩側の樹木愛すべし。其並木道の末には水に洗はれたる一村あり。その突出地に大津の城立てり。此地に於ける水は二个の入江をなす。其一の上には小き木橋を架し、他の上には長二百三十歩の橋を架す。

日本の乞食

此路には日本の大抵の道路の如く乞食多し。乞食は概ね多數の子を伴ひ、手に椀を持つ。彼等は此椀に施物を受集む。女は袋を前に垂れ、其下に財布を持つ。彼等は全部都市より追はるるこゝありて、妻子を伴ひて田舍を漂浪す。老幼をば方形の籠に入れ、其籠を二頭の牛の角に結付けて運ばしむ。一頭の牛は前に他の一頭は後に行く。壯者は其前後に從ひ、日本古代の英雄の歌を謠ひながら行く。多くの家の前を通れば、其住人は彼等の歌の報酬として多少の慈



乞食

善金を與ふ。

膳所より水口　最良竹杖の產地　草津

蘭人は膳所を去りて、夕方嶮しき石多き山を越え、草津(Cusatz)の村に來れり。

此村は日本の最良の竹を產ず。若き芽は甘き汁を以て充ち、硬くして節多し。各節は等しき距離に於て圓き結目を有し、下方に於ては小にして頂は太し。此等の竹は繩の代りに結束用に供せられ、又大船の錨綱とするに麻の繩よりも久しきに堪ふ。彼等は亦此竹を以て各種の籠を作る。木の枝を以て編みたる歐洲のものに比して頗る强し。此竹の二片を取りて邊しく摩擦すれば火を發し、燧石と鋼との代用をなす。

*　*　*　*　*　*

黎明前使節は進發して日出までに石部(Itaibe)村に着したり。石部より約二リーグにしてヨカタン川(Jocatangauwa 横田川)を渡舟にて渡り、十時頃に水口(Minacuts)に來れり。

此地には都に通ずる往還の固めとして堅城立てり。

水口までは平坦なる路なり。兩側に蔭多き樹を栽う。而して目の及ぶ限り稻田と境す。

日本の米

日本は他の諸國よりも稻多く、印度に於けるよりも良質のものを產ず。九月に之を刈る。最も白きもの最も高價なり。

日本には印度に於けると同じく、米を粉に製すべき水車無し。彼等の米は歐洲風に麵包にやかず、水にて煮粥又はプッヂングとして食卓に上す。揑ねられずして塊をなせる米は甚だ不健全にして、腹痛及視力減弱を起すことあり。彼等

は亦之を煮たる後焼きて餅となす。

神父サヴェリウスは語る、日本を旅行する際彼は米の餅を以て身を養ひたりと。日本人は之をアレラ(Arela あられの訛)と稱し、袖中に入れて持ち歩行く。

米は成長する時に脂肪多き厚き葉を有す。地上より一ヤード以上に延び、紫色の花を開き、二重の根を有す。

ブリニウスの言に印度人は米を以て油を作ると。然れども現在に於ては日本に於てのみならず、印度にて米より強力の飲料を作る。

水口—鈴鹿山—龜山城—石藥師

蘭人は水口を出發し、スツェカヤマ(Soetsecajamma 鈴鹿山)と呼ばるる高山に逢ひ、此處にて荷物を運搬するに困難を感ぜしが、終にジンツサムマ(Zintzsamma)及サッカ(Sacca)を通過してシッコノジロ(Siccono-zito 關の地藏?)に來り、彼等は終夜此地に休息せり。

翌朝日出前一時間月光輝き、道も河も凍結し居たるが、彼等は旅行を續けて前進し、遙に高き塔を有する龜山(Cammimmi)城を見たり。城壁は砂石より成り、構造堅固にして猛烈なる攻圍にも堪へ得べしと見えたり。此城の後に大なる村見ゆ。約二リーグにして石藥師(Isacutz)の市に入る。彼等は其地に中食する時、三四の農民來りて食物を賣らんことを申出でたり。彼等は普通の市民の如き衣服を着けて地方を水牛にて乘廻れり。水牛は鼻に鈎を插み、そを鎖に繋ぐ。鎖は耳を廻りて兩角の間に來り、手綱の用をなす。

女は足の下に下駄を穿てり。下駄には突出物ありて第一指との間に着く。之によりて下駄を足に密着せしむ。彼等は短き長靴卽ちバスキンを穿ち、紐を以て互に交叉し結着く。

野人の生活

庄野—桑名市—宮

使節は石藥師よりゾノ(Zono 庄野)、オエバキツ(Ojebakitz)。オワカ(Owaka 追分)、四日市(Jokeitz)、富田(Tonuda)を經て桑名(Quana)に達せり。夕方暗くなりてより市に入れり。此市は日本に於て最も藝術的に建築せられたるものにして、堅固なる壁を以て圍らし、一側に於ては全部切りたる石を以て作れる大なる城なり。其塔は遠くより望むべし。

ビオンゴ市の荒廢

都ミ桑名(Quano)ミの中程に少しく北に當りて有名なるビオンゴ(Piongo)市あり。此市はエムペロル公方の死後信長の行ひたる戰によりて全く荒廢に歸したり。公方の兄弟に當るカワドニス・ウォカタ(Cavadonis Vocata)はエムペロルの一族中に殘りたる唯一の人なりしが、敵手を免れて和田殿(Vatandonus)の許に赴き救援を乞ひしに、彼は其請を容れられ、和田殿は城中に於て彼を歡待せしのみならず、隣國の諸王に對しエムペロルの虐殺者に復讐をなさしむるやうに勸說して彼等を奮起せしめたり。其諸王中には尾張の王信長もあり。彼は進みて此機會を捕へ、陽にウォカタをして故公方の後を紹がしめんミの目的を以て行動を開きしが、事實は之に反して內亂を生じ、全國を混亂に陷らしめたり。盡し信長が叛徒を鎭定して彼等の主魁三好殿(Mioxidoni)及ヂオンドノ(Diondoni)ミ和を講ぜし時、彼はウォカタを公方の位につかしめんミはせずして、彼の勝誇れる軍隊を他の日本の諸王に向けたり。其諸王中三十八人を歸服せしめたるは既に前に記したるが如し。而して此征服によりて彼は自ら同帝國の首長ミなれり。此內亂の動搖中にビオンゴは信長に略取せられ、其殘虐を免るる能はざりき。然るに其後又一五九六年大地震の爲に全く破壞せられ、市の半以上は家屋、殿堂、住民ミ共に地中に陷落し、其殘部も亦上を下への顚倒の有樣にて、荒廢破壞の殘物の堆積に過ぎざ

るものとなれり。

地震は日本には亞米利加に於けるが如く普通にして、一六一九年には南米秘露のトルジロに、又一六六三年には加拿陀に大震災ありしは著聞せることなるが、多くの災害を併起して殆ど全く荒廢に歸することは日本の如きは他に比類なし。（下略）

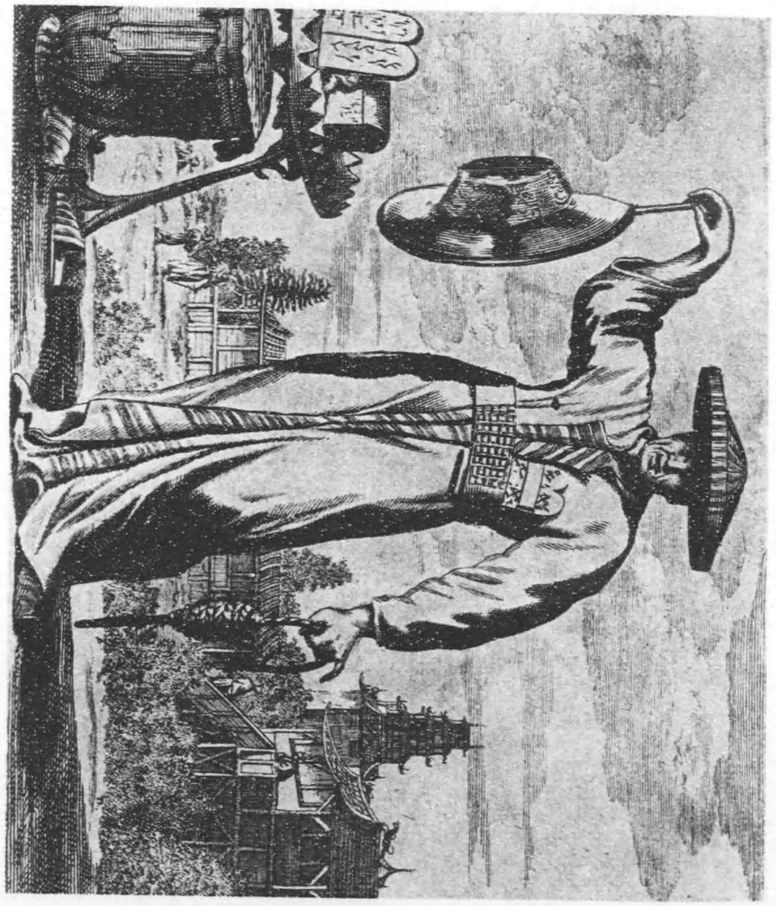
使節は桑名より乘船せり。桑名と宮（Mia）との間は大なる入江をなし、陸路を取らんとすれば費用と時間とを多く費消し、又道路も險惡なり。此理由より彼等は十六隻の船を傭ひ、貨物人馬を積み、帆を揚げしが、風は微弱にして夜半宮に達せり。入江の幅は約七リーグなり。

宮市の記載

宮市は巧に作られ、多くの殿堂を以て飾られ、海の方は堅城を以て固めたり。此處に蘭人は一夜宿泊せり。

日本僧「サッキ坊主」

此市に於ては凡ての日本を通じて然るが如く、彼等はサッキボンジ（Sacci Bonzi）に面會せり。後者は日本の僧にして、殿堂に於て勤行をなし、貴族の家に於て家庭僧の役目をなすものなることは既に言ひたるが如し。其帽子は細き藁を以て作り、廣き圓き緣あり。頂は我が頭巾（Scull-cap）の如く、頭の型と恰もよく相適へり。上衣は甚だ廣く、跟まで垂れ、各種の色をなし、亦白色の織緣あり。帶は廣くして綿をつめたるものなるが、公の禮拜に使用する書籍及覺書類を入るべきポケットの用をなす。靴はスリッパーの如くにて、跟は三片の柔皮を以て高く作れり。右手には紡の如くに卷かれたる大なる綱を持ち、左手には銅盤を提ぐ。其盤には日本の偶像を彫刻せり。彼等は前記の節ある綱を用ひ、力を極めて銅盤を打つ。然れども此習慣は公なる街上に於て供物、犧牲をなすに非ざれば之を行ふこと甚だ稀なり。他



佛僧

侯伯行列中の武士